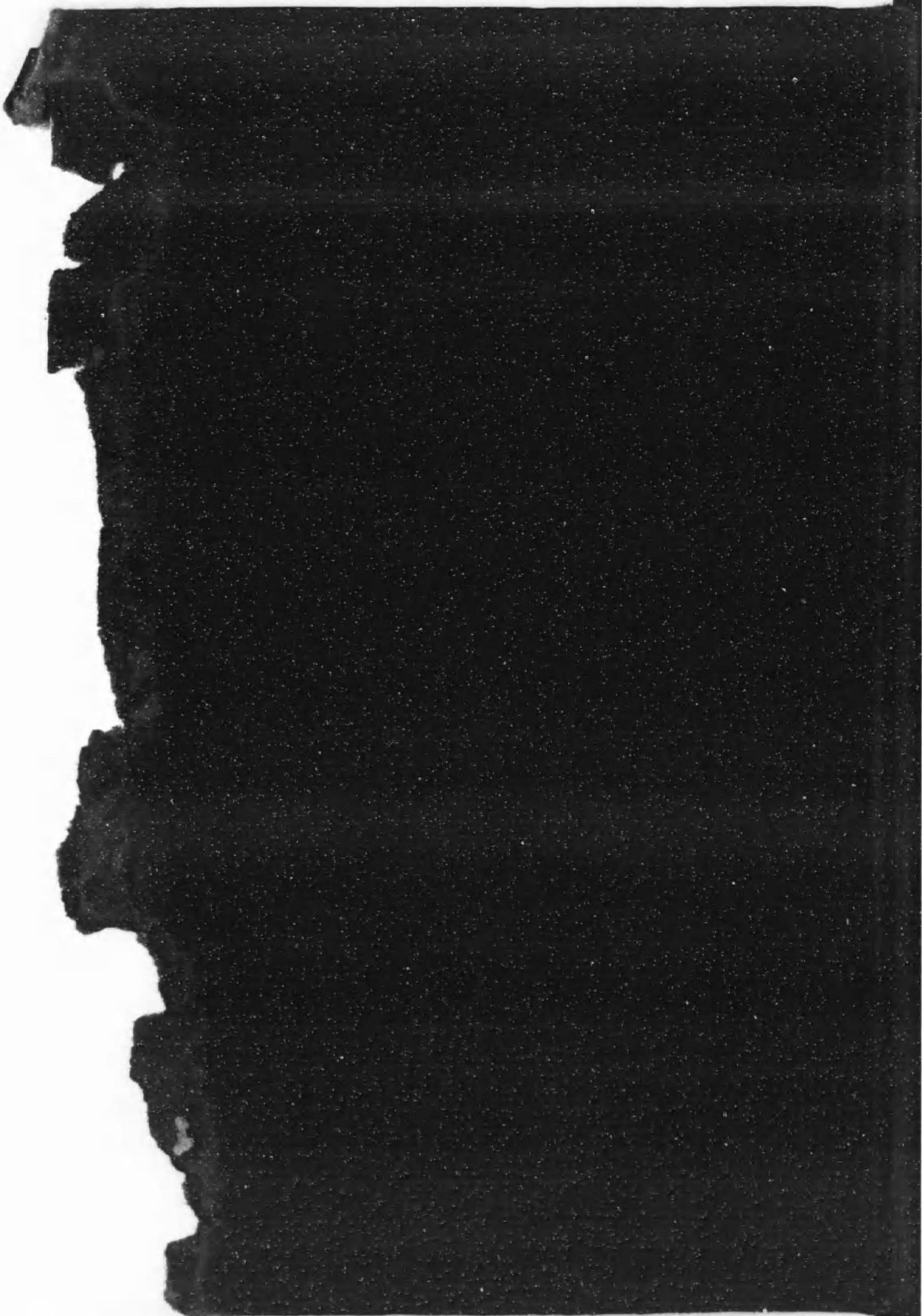


始



特219
762



菊池 寛著

日本外史

非凡閣版



序

僕は、平素から、多くの人達が、國史に親しまないのを痛嘆してゐるものである。

今年は、皇紀二千六百年である。かう云ふ好機にこそ、國民はせひ國史を再讀すべきだと思ふのである。小學校や中學校で、教へられ、すぐ忘れてしまつた國史を再讀すべきだと思ふのである。

正確を期する點に於て、史實の輕重を誤らない點に於て、歴史家の歴史書がいかに定まつてゐる。が、それ丈に、凡てを正確なる割合に於て、語らんとして、結局歴史に對する感激や感情を失つてゐるのではないかと思ふのである。

其處へ行くと素人である僕は、何の束縛もなく、素直に自由に、國史に就いての感激や意見を語り得るのではないかと思ふ。

僕は、勿論歴史家でなく、歴史好きである。正確な研究などあり得るわけはない。しかし、國史を愛讀し、史上の人物に親しみ、彼等の性格や感情を理解する點に於ては、如何なる歴史家にも、劣るとは思はないのである。

たゞ、僕は、平素鎌倉時代以後の歴史に、親しんでゐたので、上古の歴史には暗かつたのである。だから、この本の上古史の部分は、俄勉強で書いたのである。又、頼朝や、義經のところは、精しすぎたし、明治維新は、あまりにも簡單になりすぎた。讀者諸君に、これらの點を許していただきたいのである。又、「二千年六百年私感」は、僕の日本國史總論である。今年の正月雜誌に發表したものだ。「新日本外史」と云ふ名も、頼山陽の名著に對し、いさゝかくすぐつたいのであるが、頼山陽の「日本外史」も、元來一文人の野史と云つた意味で、謙遜的な命名であると思ふのである。山陽の命名當時の心境に眞似たのであつて、「日本外史」の史書としての功業に比せんと云ふ意味ではない。

用語の點に於て、尊王、尊皇と云ふ字を兩方用ゐた。現代に住む我々としては、尊皇とかくべきであるが、尊王と云ふ言葉で、大義が鼓吹され維新時代幾多の志士の血が流されたことを考へると、その歴史的文字も捨てられない氣がしたからだ。

本書は、わづか半年で書き上げたので、その間参考書の涉獵その他に就いて、同好の知人たる柴野雅彦、多根茂、池島新平三氏の助力に俟つところが多かつた。

昭和十五年二月十五日

菊池寛

新日本外史 目次

序

上古時代……………一

天孫降臨……………一

神武天皇……………六

祭政一致……………三

日本武尊……………四

神功皇后……………三

聖德太子……………六

中大兄皇子と藤原鎌足……………四

奈良平安時代の文化と人物……………三

奈良時代の文化……………三

和氣清麻呂……………六

坂上田村麻呂……………五

空海……………七

菅原道真……………八

藤原時代の文化……………九

鎌倉幕府開始……………九

源平二氏の盛衰……………九

源頼朝の源氏再興……………一〇

木曾義仲の活躍……………一三

源九郎義経……………一四

元寇撃退……………一五

吉野朝時代……………一七

楠木兵衛正成……………一七

菊池武時の義舉……………一八

賊臣足利尊氏……………一八

北畠親房の神皇正統記……………二〇

菊池一族……………二〇

戦國時代……………二五

足利幕府の世々……………二五

群雄上洛を競ふ……………二二五
上杉謙信と武田信玄……………二二二

豊臣時代……………二二四

秀吉の海内平定……………二二四
伊達正宗の來降……………二二九
信長・秀吉・家康……………二二七
倭寇、朝鮮征伐、鎖國……………二二八
秀吉の最期……………二二七

徳川時代……………二二〇

秀吉薨後の家康と三成……………二二〇
關ヶ原合戦……………二二七

大 阪 役……………三〇四

徳川幕府の組織と制度……………三〇四
徳川幕府完成期……………三〇三
徳川幕府上期の思潮……………三〇六
國學の興隆……………三〇五
徳川幕府の中興期……………三〇二
徳川幕府の極盛期……………三〇五

水戸學の精神……………三〇九

會澤伯民と新論……………三五九
藤田東湖の國體觀……………三六六

攘夷から開國論……………三七〇

尊皇と攘夷……………三七〇

平野二郎國臣……………三七三

薩長同盟と坂本龍馬……………三八二

維新史を流れる國體觀念……………三八八

明治新政府の確立へ……………三九六

廢藩置縣まで……………三九六

大久保利通と富國強兵……………四〇一

立憲政治……………四二一

自由黨と改進黨……………四二一

憲法發布と伊藤博文……………四二五

日清日露戰爭時代……………四四四

日清戰爭……………四四四

日露戰爭……………四五一

明治天皇と日露戰爭……………四三九

二千六百年私感……………四三三

上古時代

天孫降臨

我國最古の歴史書である「古事記」や「日本書紀」によれば、神代の昔、伊弉諾尊、伊弉冉尊の二柱の神がましまして、大八洲國を造り給ふたといふ。大八洲國とは、我日本のことである。それから、この二柱の神は、山川草木をはじめ、地上のあらゆるものを創造し給ふて、最後に、これ等を治め給ふ最高の神として皇祖天照大神をお生みになつた。

天照大神は、神々のいます高天原を治め給ひ、人々に、農耕・機織などをお教へになり御徳高く、太陽の如く萬物をいつくしみ給ふた。

然るに、大神の御弟素戔嗚尊は、勇武にましまして、荒々しい事をされては大神の御心を痛め奉つてゐたが、遂に、高天原を逐はれて、朝鮮半島の南部の新羅國にお降りになり、次いで、出雲にお渡りになつた。尊は、簸川の川上で八岐の大蛇を斬つて、天叢雲劍を得られ、高天

原の天照大神に奉られた。次いで、尊は、出雲の須賀に宮を作られ、この地方の開拓に従事されることになつた。この時、尊は、

やくもたつ 出雲やへがき つま隠みに やへがきつくる そのやへがきを
と歌はれた。これが、わが國の短歌のはじめであるといはれてゐる。

その頃、日本列島には、北の方樺太・北海道を経て移住して来た原アイヌ人をはじめ、南の方から黒潮に乗つて来た苗族・インドネシア人・ネグリート人などが各地に割據して、夫々、蝦夷、常世族、熊襲、土蜘蛛などと呼ばれてゐた。

素戔嗚尊の御子大國主命は、出雲地方を根據地として、伯耆・能登・越前・越中・信濃方面の先住異族を討伐平定されたので、出雲國家は非常に強大となつた。

この時、高天原の神々は、天照大神の御孫瓊杵尊を大八洲國の統治者にし奉らうとしたので、武御雷神と經津主神をつかはして、大國主命に國土献上をすゝめられた。

そこで、大國主命は、

「此の葦原中國は、命の隨すに獻らむ」

と仰せられて、その國土を、異議なく大神に献上された。これが、大國主命の國讓りと言はれる。

こゝに、いよく、天孫瓊杵尊が、大八洲國の統治者として、高天原から御降りになることになつた。

天照大神は、御孫瓊杵尊を召されて、

「葦原の千五百秋の瑞穂國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり、宜しく爾皇孫就て治しめせ、行矣、資祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮まり無かるべし」

とのたまふて、八咫鏡・八尺瓊勾玉・天叢雲劍を授けられ、

「この寶鏡を視まさんこと、まさに吾を視るがごとくすべし、與に床を同じくし、殿をひとつにし、以て齋鏡と爲すべし」と仰せられた。

こゝに、世界に比類のないわが國の基礎が、永遠に定まつたのである。

瓊杵尊は、天兒屋根命（中臣氏の祖）・天太玉命（齋部氏の祖）・天鋤女命・石凝姥命・玉屋命に神器を奉持させ、天忍日命（大伴氏の祖）・天津久米命（久米氏の祖）等に従へさせられ、猿田彦の奉迎をうけて、日向國高千穂に降臨しました。

天孫民族が降り給ふと聞いて、葦原中國の同系の先住民族は歡喜すると共に、異民族達は驚愕して、五月蠅の湧くが如くに騒ぎ出した。

瓊瓊杵尊は、高千穂峯に宮居して、此所を根據地として、近くの異民族から、順次に征服して行かれた。

瓊瓊杵尊の御子彦火火出見尊・御孫鷓鴣尊不合尊も、高千穂に宮居して、九州北部の常世族（苗族なりと云ふ人多し）とは協調し、大隅・薩摩方面に猛威を振ふ熊襲（隼人族）とは戦ひ、順次平定し給ふた。

この天祖三代の間に、偉大なる包容力を持つてゐるわが天孫民族は、異民族である常世族から南方の國の米作の方法、絹の製法、航海術を習得し、熊襲からは精悍なる習俗を學んだ。

當時の日本列島には、樟・楠・黒松・やまもも・内桂・ぶな・大楡・檜・杉・椎などの温帯樹・亞熱帯樹の大森林が、山野を蔽ひ海に迫つてゐたのである。「日本書紀」にも、高さが數百丈、幹の周圍も數百尋の老樹喬木が鬱蒼と繁茂して、陽の光りさへ見えなかつたと書かれてゐる。また、低地や河川のほとりは、葦が生ひ繁つて、人間など容易に入れなかつたのであらう。九州、中國、四國地方を一括して「葦原中國」と呼び、葦がいかにか、生ひ繁つてゐたかが分る。かうした國土で、わが天孫民族は、山川や湖水に近い南向きの地を、撰んで住居を作つた。山には、食料となる猪や鹿などの動物の他に胡桃・栗・芋・百合の根など所謂山幸があり、河や湖には、魚類や貝類所謂海幸が、獲られたからだつた。住居の近くで、彼等は、穀類

を作つた。食器は、素焼の盆・平盆や木の葉でした。彼等の住居は、はじめは「いはれ」或は「いはり」と言はれる洞窟や穴であつたが、間もなく、穴の上に低く土につく軒を造り、軒端から斜に横穴を作つた所謂「天地根元造」となつた。然し、尊貴のまします高殿は、「日本書紀」或は「祝詞」にもあるとほり、柱を地中に掘立て、根元を固くして、桁・梁などは葛の綱で結び、戸、窓なども造り、屋根は茅をふき、千木・堅緒木をつけた。室内には、床があり、菅・縞・絹・皮疊などを敷いた。高殿も、はじめは、天地根元造から發達した切妻造から、神明造、四注造、入母屋造と、次第に、宏壯なものとなつて來た。それにつれて、一般の氏人も、次第に家を造つて住むやうになつた。

彼等は、男は禪をはき、女は腰に裳をまとひ、筒袖の上衣を左袵に着た。布は「にぎたへ」（柔い布）、「あらたへ」（荒い布）・明布、照布などと言ひ、一般に、麻や楮の纖維で織つたものだつたが、少數の貴族は、常世族から傳はつた絹を持つてゐた。

髪は、男は、美豆良といつて、前でわけ兩耳の上でぐるぐるとまいて後へ垂れ、女は、垂れ髪にし、或は後から前へまいて束ねた。彼等は、男も女も、勾玉や管玉や切子玉や白玉を緒で貫いた「みすまる」を、耳や首や腕や脛や足首までにつけた。歩く度に鈴のやうに鳴るのを喜んだ。玉の材料は、青瑯玕・翡翠・水晶・瑪瑙・琥珀・黄金・銅・貝などである。

彼等は、事あるごとに、「くろき」しろき」の酒を先祖の神に祭り、一所に集つて寄合評定をして計畫をたて、事件を解決した。

戦争に行く時には、鐵の短甲たんかを身につけ、眉庇まゆびつきや衝角しやうかくつきの冑をかぶり、頭椎かぶつちの太刀や狛劍こまけんを佩き、箆へらには鏑矢かぶらや、鐵鏃てつやくの矢を負ひ、弓を持つて出陣したのである。

天孫民族の武器が精銳であつたことは、「細戈千足國」といふ國名を持つてゐたことから、知られるのである。「くはし」は精銳といふ意で、戈は矛に限らず武器の總稱で、ちたるとは充實といふ意である。従つて、「細戈千足國」とは「精銳なる武器が充實してゐる國」といふ意味である。これは、天孫民族は、他の民族が未だ石器を使つてゐる頃から砂鐵のみならず鐵礦から鐵を精煉する方法を知つてゐたからである。天孫民族は、この鐵製の新しい精銳の武器を持つて、勇猛果敢に服まじろはぬ他民族を征服して行つたのである。

神武天皇

瓊瓊杵尊の御曾孫神武天皇は、御名を狹野、若御毛野、豊御毛野など申し上げ、御即位の後、神日本磐余彦尊と申された。

天皇は、御年四十五才まで、日向國高千穗宮にましまして、葦原中國を治められたが、やが

て、親ら諸皇子諸皇族をはじめ、天孫民族を率ゐて、東征の途に上られた。

この時、「日本書紀」には、「東に美地有り、青山四周せり、彼地必ず以て天業を恢弘し、天下に光宅くわうたくするに足るべし」と宣はれて東征の途につかれたとあるが、「古事記」には、「何れの地にまさばか、天の下の政を平けく聞しめさん、猶ほ東のかたにこそ行でまさめ」と仰せられて、御出發になつたとある。蓋し、古來から、學者の間に、「東征説」と「東遷説」のある所以である。これは、日向の國はさして地味も豊かでなく、物産も豊富でないのに、天孫民族が膨脹した結果、住みよい地、大八洲國の眞中にある地を目ざして征かれたのであらう。

天皇は、舟軍ふなぐさを率ゐて、九州の東海岸に向つて北上し、速吸門はやすひのみかど（今の佐賀關）で珍彦ちひこといふ者のお出迎へをうけ、彼の案内で、筑紫の菟狹うす（豊前宇佐）に行き、菟狹津彦うすつひこの饗應をうけて、崗水門おかみづかど（筑前遠賀）に至り、穴門あなかど（長門）を経て安藝國に行かれ、この附近の海人族（苗族の一部）を征服されて、備中の高島に着かれ、此所に宮殿を營んで八年滞在された。これは、いよいよ、精悍な異民族が割據する大和地方を一舉にして征討される準備として、長い航海の勞を癒し、船を造り、武器を備へるためであつたのだらう。

7 神武紀元前三年の春二月、天皇は、高島を發して、一氣に、海路浪速國なみはのくに（難波）に着かれ、三月大和河を溯つて、河内國章香邑あきかに上陸され、四月、膽駒山いこまやまを越えて大和に入らんとし給ふ

たが、當時、大和地方に猛威を振つてゐた土蜘蛛（ネグリート人）や熊襲（卑人族——インドネシア人と云はれる）の中で、最も強大であつた長髓彦は、皇軍を孔舎衙坂（平群郡）に邀へて、激しく抗戦した。天皇は、御兄五瀬命が賊の流矢に當たられたので、止むを得ず軍を河内に返し、乗船して再び海に出られたが、不幸、五瀬命は薨去せられたので、紀伊河口の竈山に葬り給ふた。此所で、天皇は軍を水陸兩部隊に分けられ、陸上部隊は名草・那賀方面の土賊を掃蕩して進軍し、海上部隊は、風浪を犯して熊野に至り、荒坂津に到着した。此所で、水陸兩軍會合して、背後から大和を衝く作戰に出たのである。皇軍は、先づ丹敷戸畔なる賊の主魁を誅して、進軍したが、山嶮しく、森深く、行路さへ見付らなかつた。この時、天照大神のお告げで、八咫鳥が飛んで来て皇軍を導いたといふことである。恐らく、八咫鳥といふ名の土民が、皇軍を先導したのではなからうか。八月、天皇は、菟田縣に於て、賊の酋長弟狛を降服させ、兄狛を誅伐し、進んで吉野に入り、この地の先住民族を平定懐柔し、十月國見丘の土蜘蛛の酋長八十梟帥の大堂に行き、

忍坂の おほむろやに ひとさはに

きいりをり ひとさはに いりをりとも

みつみつし 久米のこが 頭椎 石椎もち

うちてしやまむ みつみつし 久米のこらが

頭椎 石椎もち いまうたば善らし

といふ勇壯な歌を合圖に、刀を抜いて誅し給ふた。

皇軍は、更に進軍して、十一月、磐余邑に弟磯城を降服させ、兄磯城を誅し、十二月、遂に再び、長髓彦の軍と對峙した。然るに、皇軍は長い間の山嶮戦に疲れてゐるに反し、長髓彦の軍は準備をして待ちうけてゐたし地利に通じてゐるので、皇軍は又非常な苦戦に陥つた。苦戦に逢ふ度に、皇軍の將士は、

みつみつし 久米のこらが 垣もとに

うゑし蓋 口疼く われはわすれし

うちてしやまむ

と、天皇のお作りになつた來目歌を合唱して、勇氣を鼓舞した。一日、長髓彦軍の勢いよく、猛く、皇軍が益々苦境に陥つた時、一天俄に掻き曇つて、雹さへ降り出したと思ふと、天の一角から、金色の鴉が飛來つて、天皇の御弓の先に止まつた。賊軍は、その燦然たる光りに射縮められてゐる間に、皇軍は、頽勢を盛り返して、賊軍を追ひつめた。さすがの長髓彦も、到底、皇軍に抗し得ないのを知ると、使を寄越して、「吾れ饒速日命を以て君と爲てつかへまつる。夫

れ天神の子豈兩種まさむや。奈何ぞ更に天神の子と稱り、以て人地を奪はむや。」と奏上した。饒速日命は、曾て、天神から大和地方鎮撫の命を受けて來られたが、長髓彦と妥協し、擁立されてゐたのである。長髓彦は、饒速日命を奉じてゐることを口實に、皇軍に誅伐されるのを逃れようとしてゐたが、饒速日命は、天孫たる神武天皇に忠誠を表して彼を殺し、兵を率ゐて歸順した。天皇は、次いで長髓彦の殘黨を初めその他の土蜘蛛族を征伐されて、ほゞ、大和地方は皇威になびくに至つた。

翌年三月、天皇は、畝傍山の東南極原の地を下して、新たに皇居を造営された。その年の秋八月、天皇は、事代主神の女五十鈴媛命を容れて、妃となされた。

翌年正月、天皇は大和の極原宮に即位の大典を擧げさせ給ふた。

先づ、天照天神の詔を奉じ、神籬を建て、天神を祀り、神器を正殿に安置した莊嚴な式場に、大伴氏、久米氏、物部氏の祖は矛を執つて儀衛の任に當り、齋部氏・中臣氏の祖は恭々しく御前に進み出て、祝詞を言上し奉つた。いづれも、天皇を輔翼し奉つて奮戦した戰場生殘りの士である。この御盛儀に列した感慨は如何ばかりであつたらう。

天皇は、詔を發せられて、

「上は則ち乾靈の國を授けたまふ徳に答へ、下は則ち皇孫正を養ひたまふ心を弘めむ。然し

て後に六合を兼て以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦よからずや」と仰せられた。これは、實に、天照大神の神勅と共に千古不磨の大文字であり、世界に誇る我肇國の精神を宣揚されたものである。

次いで、天皇は、鳥見山で皇祖や天神を祭られ、神器を極原宮の正殿に置いて政をきこしめされた。その後、東征に従軍した諸將士の功を論じ賞を行はれ、中臣・齋部の二氏には祭祀と政治を掌らしめ、大伴・物部の二氏には軍事を掌り兼ねて皇居の守衛に當らしめられた。天皇は、更に、地方には國造や縣主を置いて治めさせられた。

天皇は、御即位七十六年の三月十一日、極原宮に崩せられ給ふた。御年百二十七才であらせられた。翌年九月、畝傍山の東北陵に葬り奉つた。

神授の三種の神器は、神武天皇以來代々の天皇が身近く奉持されてゐたが、第十代崇神天皇は、敬神の御心厚く、神器を宮中に奉安するのは恐れ多いとされて、八咫鏡と天叢雲劍を大和の笠縫邑に遷し、皇女豐鍬入姫に命じてお祭りされた。ところが、崇神天皇の御子第十一代垂仁天皇は、更に、伊勢の五十鈴川の邊に宮殿を建て、八咫鏡と天叢雲劍をここに遷され、皇女倭姫命に祀らしめられた。これが、皇大神宮の内宮である。

祭政一致

我國上古の社會は、氏族制度といふ獨特の組織をもつてゐた。

祖先を同じうする人々は、同じ所に集つて、夫々、群をなしてゐた。これを氏（氏族）といひ、夫々の氏を區別する爲に、葛城氏とか高市氏といふやうに、住んでゐる土地の名を取つて氏の名としたり、弓削氏とか玉造氏などと職業によつて氏の名をつけてゐた。氏に屬する人々を氏人といひ、その長を氏上と呼んだ。一つの氏に、氏人が多くなると、新しく住居を作つて獨立した氏を作つた。その新しい氏を小氏といひ、はじめの氏を大氏と呼んだ。小氏にも氏上があつて、その氏の氏人の尊敬をあつめ、彼等を率ゐてゐた。氏人は、その屬する氏の氏上を尊敬すると共に、本家である大氏の氏上を尊敬し、氏上の祖先を祀つて、事有る毎に參拜した。これが「氏神」であり、氏人は、その「氏子」である。「かみ」といふ詞には、後世漢字の「神」をあてゝゐるが、その初めは「上」なのである。

而して、皇室も最高の氏族であり、皇族はその氏人で、天皇は、その氏上に當らせられるのである。而も、我國民は、皆、同一祖先より出たものと信じてゐるので、天皇は、國民全體の氏上に當らせられるわけである。かくて、我國は、天皇を氏上として、國民が氏子であるところ

の一大氏族なのであつた。従つて、國家の繁榮は國民の繁榮であり、國民の繁榮は國家の繁榮であるし、國家の損失は國民の損失であり、國民の損失は國家の損失なのである。國民は、各氏の氏神を祭ると共に、天照大神をはじめ天神を崇敬し、同時に天皇を現人神と仰ぎ奉つた。然も、天皇は、天意をうけて大八洲國に降臨されたのであるから、代々の天皇は、國家・國民の上に事ある毎に、氏神であらせられる天神を祭り、天意を伺はれたのである。それは、神武天皇が御東征の途々、困苦に會はれる度に神を祭り、天照大神のお告げに従はさせられたのを見ても分ることである。而も、國民は、日常生活の端々に至るまで、悉く、「氏神」の信仰を基調としてゐるので、天皇は天神を祭り、神の啓示を得て國民を導いて行かれるのが、天皇の最大至高の御仕事であつた。従つて、神武天皇が橿原宮に御即位の御儀をあげさせ給ふ時にも、先づ、神器を祭られたのである。その後の代々の天皇も、神器を皇居に奉齋し、神器を祭ることが即ち民を治めることであつた。「祭神」は即ち「政治」であつたのである。だから、我國に於ては、「政事」は、初め「祭事」を意味したのである。「祭事」の思想は、崇神天皇・垂仁天皇を経て應神天皇・仁徳天皇の御代に最絶頂に達した。その後、支那思想・佛教の傳來と共に、國民の信仰の變移、生活の複雑化などがあつたため、政治の掌に當る人々と、祭事にたづさはる人々と別れたが、祭政一致は、我國固有の政治の特色として今日に及んでゐるのであ

日本武尊

神武天皇以來、代々の天皇は、御先祖の祭祀をせられ、民を治められると共に、軍備を充實して、大和朝廷の御威光を四方に輝し給ふた。

第十代崇神天皇は、第八代孝元天皇の皇子大彥命を北陸に、大彥命の御子武渟川別を東海に、第七代孝靈天皇の皇子吉備津彦を西海（山陽道）に、崇神天皇の御姪丹波道主命を丹波路（山陰地方）に遣はして、その地方を鎮めさせられた（五七三年）。これが所謂四道將軍である。その後、天皇は、また、皇子豊城入彦命を東國に遣はして、その地方を治めさせられた。次の垂仁天皇の御代には、鹽乘津彦が勅を奉じて朝鮮に渡り、新羅を討つて、任那に日本府を設定した。その時、北九州地方にゐた常世族も、平定された。

ところが、九州の南部には、未だ、熊襲（隼人族）といふ強暴な種族が蟠居してゐて、絶えず、不穩な形勢を示した。

されば、第十二代景行天皇は、御即位十二年七月、熊襲御親征の途に上らせられた。斯様に大々的な異種族御親征は、神武天皇の御東征以來、實に、約八百年目である。

天皇は、大和を發し、豊前・大隅・日向・肥前・肥後・筑後などを八年の長きにわたつて、巡られて、熊襲を平げ、民を撫順せさせ給ふた。

ところが、熊襲は、天皇が大和にお歸りになると、また忽ち、蠢動し始めた。天皇の二十七年八月、筑紫の熊襲が愈々横暴で、頻りに邊境を掠める由聞えたので、天皇は、御子日本武尊をお遣はしになつて、これを征伐せさせ給ふた。

日本武尊は、御名を小碓尊又は日本童男と申し上げた。御幼少の時から雄々しき性質にあらせられた。日本書紀には、「壯に及びて容貌魁偉、身の長一丈、力能く鼎を扛げたまふ」とあるから、餘程、剛勇であらせられたのに違ひない。さればこそ、天皇は、わづか御年十六才の尊に、強暴な熊襲征伐の大任を授けられたのであらう。

天皇の二十七年十月、尊は、美濃弟彦公を副將軍として、美濃・尾張地方より、弓術に秀れた兵を集められ、熊襲征伐に向ひ給ふ。十二月、熊襲の地に着かれて、暫く、附近の地勢、敵状を探られた。當時、取石鹿文又の名を、川上梟師といふ者、熊襲の酋長として、最も強暴であつた。

折しも、川上梟師が同族を集めて酒宴を開くのを聞かれた尊は、單身女子の姿に粧して、宴席に忍び近づき、川上梟師が酔つたところを隠し持つた刀で刺された。梟師も、又一黨の巨豪

である。尊の名を知るや、刺されながらも怯びれず、

「私は、この國で一番強い男であります。私に勝つ者は他にありませんでした。これ迄、澤山強い男にも遇ひましたが、皇子のやうに勇武な方は初めてです。私は下賤の者であります、どうか、尊號を奉らして下さい」

と言つて、尊に、日本武尊と御名を奉つた。

尊は、川上梟師を斃されてからも、九州の各地に兵を遣はされて、熊襲の殘黨を討伐された。尊は、豊前・豊後から日向に入り、西に轉じ、北上して肥後を経て筑後の國內を巡行され、海路歸還の途中、吉備の穴海の賊を討ち、難波の柏濟かしはのわたりに叛賊を平けて、二十八年二月、大和の大宮に凱旋せられた。御勞苦察すべしである。

然るにこの頃、東北方面の蝦夷あまし(アイヌ)も騒いだので、天皇は、武内宿禰たけのうちのすくねをその地方に遣して、地形及び民狀を探らせ給ふた。

宿禰は、一年半の後歸來、復命した。

「東夷の内、日高見國有り。其の國人男女並に髪を椎あげ、文身す。人と爲り勇悍いさまたけし。是を總べて蝦夷あましといふ。亦土地沃壤よくはらえて曠あひらし。撃ちて取るべし」と。

然し、當時は、日本武尊の西征中、内外多事であつたので征伐の議は起らなかつた。

天皇の四十年の夏、蝦夷又叛いて、近隣を騒がすとの報を聞召されたので、天皇は、再び、日本武尊に命じて、東夷征伐の軍を起させ給ふ。

天皇は、はじめ、日本武尊の前年の勞苦を察し給ひ、今度の東征には、尊の御兄大碓尊おほすののみことをお遣しにならうとされたが、尊は自ら進んで出征を志願されたのであつた。

天皇は、いたく喜び給ひ、

「今朕汝の人と爲りをみるに、身體長大、容貌端正、力能く鼎かたなを扛かぐ、猛きこと雷電いかづちの如く、向ふ所かたきなく、攻むる所必ず勝つ。即ち知る、形は則ち我が子にて、實は即ち神人なり。是れまことに天、朕が不敵せむじな、且つ國の不平みだたるを怒いかりたまひて、天業あまのわざを經綸をめ宗廟くにいへを絶たざらしめたまふか」

とまでに仰せられた。

尊は、御年二十九才、天皇のお言葉に感激勇躍し、東夷討伐の途につかせ給ふ。副將は吉備武彦で、大伴武日おほともたけひが靱部きんべ(弓隊)を率ゐ、久米氏が膳夫かじは(特務兵)を率ゐて従つた。尊は、先づ、途を伊勢にとり、皇大神宮に參拜して、倭姫命から、天叢雲劍を授かり給ふ。尾張に入つて、作戰計畫をたてられ、軍の一部を中仙道に別け、尊は御自ら、東海道を進んで駿河に入り給ふ。此所ではしなくも、尊は、賊に欺かれ、曠野の眞中で火攻めの難に遭ひ給ふたが、沈着

剛膽な尊は、倭姫より授かりし御劍で草を薙ぎ、おん自らも火をつけて、向ひ火で賊のつけた火を追ひ返し、逆襲して、賊を全滅せさせ給ふ。後世、この地を焼津といひ、御劍の一名を草薙劍と申す所以である。

尊は、更に進んで、箱根・足柄の嶮を越え、相模國の馳水から船に乗られ、海路上總へ渡り給ふ。海上、暴風にあひ、凄じい波濤に、御舟は今にも危しと見えた。この時、妃弟橋姫は、自ら尊のお身代りとなつて海中に投ぜられ給ふ。

尊きおん犠牲の爲か尊達は無事に上總に着かれ給ふ。中仙道から進軍した別動隊とも出會ひ、威風堂々と軍船の舳に大鏡をつけて、常陸の竹水門に攻め寄せられた。その有様を見て、蝦夷の巨魁、島津神・國津神等は、戦はずして威風に怖れ、弓矢を棄て、降参歸屬す。尊は、首魁等を俘にして、他は放ち給ふた。尊は、更に、北上して蝦夷を平げ、日高見國（北上川流域地方）から軍をかへされた。

歸路、筑波を通り、相模から箱根の碓日峠に登り、遙かに東の平野を望み、相模の海を眺めて、御身代りとなつて海に投ぜられた弟橋姫を追慕され、

「吾孀はや」と叫び給ふ。

關東地方を「あづま」といふのは、この時より始つたと言ふ。

尊は、更に、甲斐の國に入り、暫く、酒折宮に駐ませられ、信濃を経て、美濃に入り、尾張まで歸り給ふた。

此所で、止り給ふ間、近江の伊吹山に賊ありといふことを聞召され、草薙劍は留めて、征伐に向はせられた。然るに賊の勢は豫期以上に強く、尊の軍は苦戦し給ひ、不幸にも、尊は、負傷された。一説には、尊は、御病氣になられたのであらうとも言はれるが、恐らくは、賊の射出した毒矢にあたられたのであらう。尊は、尾張に還り、更に伊勢路をとり、尾津から能褒野まで歸られたが、此所にて、御病勢はいよく重くならせられた。

尊は、連れ還られた蝦夷の俘を伊勢の皇大神宮に献じ、吉備武彦をして軍狀を天皇に奏上せしめられた。

御病の床で、尊は、遙に天皇のまします大和の地を懐しまれて、

倭は くにのまほろば たたなづく

あをかきやま ごもれる 倭し うるはし

また、

いのちの 全けむひとは たたみこも

平群のやまの 熊鷹が葉を
 馨華にさせ その子

とお歌ひになつた。美はしい御歌である。

瘴癘立ちこめる原始の深山幽谷に、凶暴な賊徒を討伐されて、西は九州の果、東は北陸まで
 轉戦され、功成り、任を果し給ひながら、美はしく平和な大和に、今一步と云ふ所で、尊は、
 御年三十で薨せられた。

天皇は、いたく歎かれ給ふて、

「今より以後誰と與に鴻業ををさめむや」

と、仰せられ、群臣に命じて、尊を天子の禮を以て能褒野に葬り給ふた。

この時、陵から一羽の白鳥が飛び出た。その後を追ひ、その白鳥が止まつた大和の葛城と
 河内の古市に白鳥陵を營まれた。

草薙劍は、尾張にとゞめ置かれてあつたのを、妃宮實媛が、熱田に祀られて今日に至つてゐ
 る。

天皇は、日本武尊の御功績をしのばれて、おん自ら尊が平定された東國を巡られ、更に、御
 諸別命に東國を鎮めさせられた。

日本武尊の御征伐の結果、西は九州の涯から、北は陸奥まで、日本の國の殆んど總べてが皇
 威に、服するやうになつたのである。

されば、次の十三代成務天皇は、山や河の形勢により、自然の區割に従つて、國・縣・村を
 分け、その長官として、國造・縣主・稻置等を増されたので、地方の政治は次第に整ひ、大和
 朝廷の御威光が日本列島にあまねく照り輝くやうになつたので、「やまと」と云ふ名は、遂に、
 日本全國の名として用ひられるやうになつたのである。

神功皇后

成務天皇が崩ぜられ、日本武尊の御子仲哀天皇が即位し給ふ。

天皇は、御即位後間もなく、丹波主氣長宿禰の女氣長足姫を立て、皇后としたまふた。皇
 後の御母葛城高額媛は、新羅の歸化人である天日矛の後裔に當られるので、その家は古來朝鮮
 半島とは非常に關係が深かつた。従つて、天皇が氣長足姫を迎へて皇后とされたのは、その翌
 年の新羅征伐の準備を考慮せられてのことであるといふ説もあるのである。

天皇は、皇后を迎へられると、すぐ、皇后と共に越前の敦賀に幸せられ、筥飯の行宮に滞在
 し給ふた。

當時、攝津の難波は未だ開けず、敦賀は、日本海岸を傳つて九州や朝鮮へ行く海上交通の中心地であると共に、北陸道方面の皇化發展の根據地であつた。従つて、天皇は、暫く、この地に滞在されて、九州方面を騒がしてゐた新羅に就ての情報を探られたのではなからうか。

一ヶ月ばかり御滞在の後、天皇は、皇后及び百官を筭飯の行宮に止められて、おん自ら紀伊方面を御巡幸になり、徳勒津に在られた時、九州の熊襲がまたく叛いたことを聞召された。天皇は、直ちに、皇后に御使を遣はされると共に、海路御親征の途につかれた。やがて、穴門（長門）の豊浦津に着かれて、安藝の沼田を経て來られた皇后とお出會ひになり、此所に、穴門豊浦宮を營まれた。即位二年の九月のことである。それから、即位八年まで、この宮にゐるから、九州に渡らせ給ひ、筑紫の灘縣（筑前那珂郡）に幸して、樞日（香椎）宮に御駐りになつた。此の宮で、天皇は、重臣等を集めて、熊襲討伐の具體的方法に就て、會議を開かれた。その時、皇后は、神のお告げなりとして、「天皇何ぞ熊襲の服はざることを憂ひたまふ。是れ脊穴の空國ぞ。豈兵を擧げて伐つに足らむや。玆の國にまさりて寶の國あり。美女の暎（ひきまゆ）の如く向津國有り……」と仰せられて、新羅征伐を出張されたが容れられなかつた。かくして、熊襲を討つか、背後でそれを操つてゐる新羅を遠征するか軍議の定まらぬうち、天皇は、樞日宮で、俄に崩御あらせられた。皇后は、武内宿禰等の重臣とはかられ、固く喪を秘

して穴門の豊浦宮に假埋葬し奉つた。

皇后は、齋宮を小山田邑に營まれ、親ら神主となられ、神を祭られた。次いで、吉備臣の祖鴨別を遣はして熊襲を討たしめ、筑後の山門の土蜘蛛田油津媛を誅してから、新羅征伐の準備にかゝられた。皇后は、兵を集め、船を造られる一方、小河で魚を釣り、或は、海水で髪を洗はれて、外征の當否を占はれた。

半年ばかりの準備の後、皇后は、出發に先立ち、髪を男のやうに髻に結び、男装して、群臣の前に出で給ひ、

「吾れ婦女にしてまた不肖、然れども暫く男貌を假りて、強ちに雄々しき略を起し、上は神祇の靈を蒙り、下は群臣の助によりて、兵甲を振して嶮浪をわたり、艦船を整へて以て財の土を求めむ。若し事就らば群臣共に功有り、事就らずば吾れ獨り罪有らむ」と有難いお言葉を給はつたので、群臣は、皆、感激勇躍して征途についた。

皇后は、和魂を以て御船の鎮めとなし、荒魂を軍の先峰として、十月、對島の和珥津（今の鰐浦）を發し、順風に乗つて一舉に新羅に押し寄せ給ふた。その勢に海潮溢れ、山河動揺した。新羅の國人、震へ戦いた。

新羅國王波沙寢錦は、遙に、皇軍を見て、

「吾れ聞く、東に神國有り、日本と謂ふ。亦聖王有り、天皇と謂ふ。必ずその國の神兵ならむ。豈兵を擧げて以て拒ぐべけんや」と白旗をあげて、降参し、

「今より以後、長く乾坤と與に、伏ひて飼部と爲らむ。それ、船舵を乾さずして春秋に馬梳及び馬鞭を獻らむ。また海の遠きを煩はずして、以て年毎に男女の調を貢らむ。日西より出で、阿利那禮河逆に流れ、河の石昇りて星辰と爲るに非ずして、春秋の朝を闕き、怠りて梳鞭の貢を廢めば、天地神祇共に討ちたまへ」と奏上した。

皇后は、彼の縛を解いて飼部とし、直ちに王城に入つて、重寶府庫を封じ、圖籍文書を收め、人質を連れ、金銀、綾羅縑絹を八十艘の船に滿載して、筑前博多の津に凱旋せられた。皇后は、博多に凱旋の後、皇子を産まれた。後の應神天皇である。

皇后は、群臣を率ゐて穴門の豊浦宮に移り給ひ、仲哀天皇を厚く葬り奉つて、海路より大和に還られた。

皇后は、九州の熊襲を平げ、新羅を討ち、幼帝の攝政として六十九年の間、稚櫻宮で大政を見そなはされた。その間に、皇后は、前後三回兵を起して新羅の暴逆を懲らしめて居られる。

皇后は、攝政六十九年四月十七日、病を得て、稚櫻宮に崩御あらせられた。御年百才と傳へ

られてゐる。その御功績をたゞへて、神功皇后と申すのである。

皇后の新羅征伐は、我國威を外國に知らしめたのみならず、これ以來、彼我の交通が開け、彼の地のすぐれた文物が我國に輸入されて、我國の文化は、一躍、長足の進歩をとげた。我國の文物制度は、殆んど全く新しく改革されるに至つた。

當時、先進文明國たる支那は、後漢が滅んで、蜀・魏・吳の所謂三國時代であり、動亂の絶え間がなかつた爲、有識の士の朝鮮に逃避する者が多かつた。然し、朝鮮も、小國互に攻合ふ有様だつたので、彼等は、當時、交通のやうやく頻繁になつたのに乗じ、氣候溫暖にして、山川草木の美しい我國に來朝歸化した。第十五代應神天皇の御代から第二十一代雄略天皇の御代までは、漢民族の我國への歸化時代とさへ言へるのである。その數は、相當の多數である。

秦の始皇帝の後だといふ弓月君は、一族百二十餘縣の人々と、後漢の靈帝の子孫といふ阿知使主は十七縣の民を連れて、朝鮮を通じて、歸化した。弓月君の子孫は、秦氏といふ姓を賜はり、永く朝廷に仕へて養蠶・紡織を司り、阿知使主の子孫は、漢氏といひ、代々朝廷の記録の役を勤めた。その他、様々な職技に秀れた者が、續々、來朝歸化したので、我國の鍛冶・酒造・造船・裁縫・機織・製陶等の技術は、全く革命的な進歩をとげた。従つて、國の産業は、非常に發達し、國力は著しく強大となつたのである。

然し、我國人に運命的影響を與へたのは、何と言つても、漢字と儒學の輸入であらう。これは、やゝ遅れては入つて來た佛教と共に、わが國民の精神生活を決定したと云つてもよい。支那の文字が我國に傳はつたのは、何時頃であるか明確には分らない。九州地方の豪族は、國初以來漢土と交通してゐた様子があるから、文字も知つてゐたに違ひない。然し、支那の書物が、正式に我國に傳はつたのは、應神天皇の十六年（皇紀九四五年）二月、博士王仁が、百濟から「論語」と「千字文」を持つて來て、朝廷へ献上したのが初である。天皇は皇子菟道稚郎子をして王仁に就いて漢學を學ばしめられた。こゝに、漢學が我國へ傳はつたのである。漢學の中心思想は儒教であり、その現實的な政治道德の教へは、忠孝を重んじ、祖先崇拜を念とする我固有の國民精神とよく融合して、永く、我國民の精神生活の中軸をなした。斯様に、歸化支那人は、我國文化の發達に異常な貢獻をしたが、一方では、政治に關與して、易世革命の思想を我國で實行しようとする者さへ生じた。それは、その弊害の一つだつた。

聖德太子

我紀元百年代の終り頃、印度の一角から釋迦によつて説かれた佛教は、全亞細亞民族の救ひの教として瞬く間に、四方に廣つた。

西は、小亞細亞を経て、希臘・マケドン・埃及に及び、東は、緬甸、馬來半島に至り、北東は、中央亞細亞を経て我垂仁天皇の頃支那に傳はつた。

當時、我國民は、九州地方を経て、支那と頻繁に交通し、盛んにその文物を輸入してゐたから、佛教も間もなく我國に傳はつたものと察せられる。

第二十六代繼體天皇の御宇には、支那南梁の人、司馬達等我國に來つて、大和高市郡に住み佛像を祭つて、熱心に佛教の傳導をしたので、大和地方の人々の間では、早くから佛教が信じられてゐた。

然し、佛教が正式に我國に入つて來たのは、第二十九代欽明天皇の十三年（西曆五五三）である。

當時、百濟の聖明王は、我國に特使を遣はして、釋尊の金剛像一軀、幡蓋若干、經論若干卷を獻じ、同時に、その傳來を説き、功德を讚した表を奉つた。

天皇は、百濟王の上表を聽召して、諸臣に勅りして、佛教を信ず可きか否かを諮り給ふた。

朝臣の中で、物部氏や中臣氏は、

「我國には古來神道あり、天地神祇を祭つてあります。蕃神を祭れば、恐らく神々の怒りに觸れるであります。」

と言つて、佛教信仰に反対した。

然し、蘇我稻目は、

「西蕃の諸國が既に佛像を禮拜してゐる以上、我國獨り反対する要はない」と言つて、佛教信仰に讃意を表した。

中臣氏は世々神祇祭祀を掌る家柄であるから、佛教に反対したのは當然であり、物部氏は代代武將であるから朴訥で、守舊思想から古來の信仰を固持したのであらう。

これに反して、蘇我氏は、その祖武内宿禰以來韓土に交渉を持ち、代々外交を司る家柄で、海外の事情に通じ、文化的な考へを持つてゐて、佛教に就ても知つてゐたし、或は、司馬達等の教へで、既に信仰してゐたかも知れなかつた。

崇佛派と排佛派の意見の對立は容易に解消しなかつた。天皇は、試みに禮拜させて見ようと、佛像を蘇我稻目にお下げ渡しになつた。

稻目、大いに悦んで、その佛像を、飛鳥の小墾田（今は小墾田）の家に安置して、禮拜した。

蘇我氏は、當時、絶大な勢力を持つてゐたので、佛教は蘇我氏の勢力を通じて、盛んに擴まつた。

翌年には新たに佛像が造られ、翌々年には百濟の僧侶が來、次の敏達天皇の御代には寺大工

や佛師も來朝するに至つた。

然し、數代前から、蘇我氏と不和だつた中臣氏や物部氏は、新にこの佛教信仰問題をめぐつて深刻な鬭争を續けた。

蘇我氏が、佛像禮拜を始めて以來、幾何もなく疫病が流行すると、物部尾輿や中臣鎌子は、「崇佛の罰だ」

と稱して、天皇に奏して、佛像を焼き棄てさせてしまつた。

敏達天皇の御代には、稻目の子馬子が佛殿を經營し、僧や尼を招いて大會を設けたところが、またも疫病が流行したので、尾輿の子守屋及び鎌子の子勝海は、寺塔佛像を焼き、その殘片を難波（今の大阪）の堀江に投じた。

ところが、その後、瘡（疱瘡）が流行したので、今度は却つて馬子の方が、「佛像を焼いた罰だ」

と稱して、又、寺塔を營み佛法を流布せしめた。

かくて、物部氏と蘇我氏の軋轢は、益々、激化し、用明天皇崩御せられて、皇儲の問題が起るに及び、遂に爆發した。

物部守屋は穴穗部皇子を奉じ、蘇我馬子は、その妹の腹に生れ給へる崇峻天皇を位に即け奉

らんとした。

馬子は、敏達天皇の皇后（後に即位、推古天皇と申し奉る）の命を奉じて、機先を制して、先づ穴穗部皇子を討ち奉り、次いで、河内澁河の守屋の家を圍んで、守屋を斃した。こゝに、物部氏滅んで、蘇我氏獨り、政を專にするに至つた。

その後、馬子は、わが妹の腹に御生れになつた推古天皇を御位に立て奉つて、權を擅にしよつとした。

かゝる混亂紛叫した時代に出で給ひ、氏族制度の大改革を行ひ、佛教の我國に於ける位置を確定せさせ給ふたのが、聖德太子である。

聖德太子は、第三十一代用明天皇の第二皇子である。

御母が宮中をお歩きになり馬官に至り、御厩に御立寄になつた時、やす／＼と御誕生になつたので、御名を厩戸皇子と申上げた。

御生年については、色々の説があるが、敏達天皇の三年（一三三四年）といふのが、正しいやうである。

傳説によれば、御誕生後直ちに物を言ひ、またよく事を辨へられたといふ。

御年六歳の時に、他の皇子達と宮中のお庭で遊んでをられたが、そのうち何か争ひを始められて、大變騒がしくなつた。

御父君の用明天皇は、

「何といふ騒々しいことだ」

と仰せられて、鞭を持つてお庭にお出になつた。

他の皇子達は慌て、逃出したが、太子だけは、天皇の御前に出て靜かにお頭を下げられた。

「何故、そなただけ逃げないのか」

と天皇がお訊きになると、太子は、

「今は逃げましても、どうせ、後でお叱りをうけなければなりませんから」

と答へられたといふ。

「日本書紀」に據れば、太子が蘇我馬子と共に物部守屋を討たれたのは、御年十四歳の時であつたといふ。

用明天皇は、太子を寵愛せらるゝこと深く、御所の南の上宮を太子の御殿とされたので、上宮太子とも言ひ、また、一時に十人の訴へを聞き分けられたので、豊聰耳命とも申し上げた。

幼少より、御賢明なる太子は、宮中は勿論民間にも御人望高く、加ふるに御戦功あり、崇峻

天皇の後は、當然太子が即位し給ふものと思はれてゐたが、蘇我馬子は、太子を怖れて、推古天皇を擁立したのである。

推古天皇は欽明天皇の御娘で、敏達天皇の皇后であらせられた方で、我國最初の女帝であらせられる。天皇は、外戚に私するやうな御方でなく、英明な厩戸皇子を皇太子となし給ひ攝政に任せられ、政治を一任遊ばされた。

皇太子で攝政となられたのは、聖德太子が最初である。

太子は、逆臣蘇我馬子を滅さうと、潜に苦心せられたが、蘇我氏の勢力は全盛期に入つてゐて、容易に手を下し給ふことが出来なかつた。

馬子も亦、外戚として政權を擅はしにしようと思つてゐたのが、太子の攝政で意を得なかつたが、表面は恭順を装つてゐた。

従つて、太子は、馬子などの容喙を受けられることなく、所信に従ひ公明正大なる改革を實行された。

太子は、御父用明天皇が佛教の信仰篤かつた上に、周圍に多くの佛教信者がゐたので、早くから佛教を信じて居られた。

排佛派の物部守屋を討たれたのもその爲であつた。

然し、賢明な太子は、佛教を盲信することなく、當時未だに紛糾してゐた佛教と神道の問題に關しては、

「神道は天地人道の根本であり、儒教は道德律であり、佛教は宗教生活の華實である」

と、明確に、夫々の本質、使命を宣明されたのである。太子は我國古來の神祇を祀られるとともに、當時の外來の新思想である佛教も、日本古來の神道と何等相反することなく、同時に信仰する可きであると説かれたのである。

こゝに、初めて、佛教は日本人の精神生活の中に占める可き位置を明確に規定され、非常な勢ひと華やかさで日本國內に開花したのである。

太子は、推古天皇の元年、守屋の財産を沒收して、難波なにわ（今の大阪）の玉造に四天王寺を建立された。この寺は後に難波の荒陵あらかの東に移された。それが今の大阪の茶臼山の東にある四天王寺である。

翌二年には、三寶を興隆すべき旨の勅語が下つたので、太子を初め大官達は競つて佛寺を建てた。推古天皇の御宇の末には、寺院は四十六、僧尼は千三百の多きに達した。

太子が一代のうちに建立された佛寺は、四天王寺、法隆寺、中宮寺、橘寺、蜂岡寺、池後寺、葛城寺の七つである。このうち、全く廢滅したのは葛城寺だけで、前の四者はともかく存在し、

蜂岡寺は廣隆寺、池後寺は法起寺と改稱して今日も元通りの位置に立つてゐる。

太子の御遺徳が如何に偉大であるか知ることが出来ると思ふ。

而も、これ等の寺々は、太子が御自分の一人の信仰の爲に建立されたものでなく、國家の事業として建てられた官寺で、夫々の目的を持つてゐた。

例へば、四天王寺の如きは、普通、物部守屋を討たれた時の誓願に基づいて造られたと言はれてゐるが、最近の研究では、國土守護、敵國降服の力を備へてゐる四天王像を安置して、それによつて國家の繁榮と福祉の増進を祈られたものである。

四天王寺のある難波は、朝鮮と交通する重要な港であつたから、四天王寺は外交上日本の威容を示すと共に、朝鮮經營の策源地とする豫定であつた。されば本堂は敬田院とし、禮拜や儀式、學問などをする所で、その他に悲田院、療病院、施藥院を造り、夫々、孤兒救濟、養老、病氣治療、投藥などの社會事業を行つたのである。

法隆寺は用明天皇の御遺言によつて、推古天皇が聖德太子と共に建立されたもので、四天王寺同様、その工事に十五年餘の歳月を要したと云はれてゐる。

この寺は斑鳩（大和國生駒郡）にあるので、斑鳩寺ともいひ、所謂「百濟様」といふ建築様式に我國獨特のものが加はつた七堂伽藍で、その壯大典雅は、一世の耳目を驚かしたものであ

る。太子は、特にこの寺を學問寺とされ、今日の大學と殆ど同じ意味のものであつた。されば、法隆學問寺とも言はれた。

現在の法隆寺の、金堂・五重塔・中門等は太子の時の様式をそのまま傳へてゐるといはれる。千三百年以上の歳月を経て、日本最古の建物であるばかりでなく、調和と落着とを現した雄大な美しさを持つてゐる點に於て、東洋の建築史上、最も貴重な建物となつてゐる。

かうして佛教が盛んになり、佛寺の建立が相次ぐにつれ、名僧、寺工、佛工、瓦工、畫工等が、多く朝鮮半島から渡來したので、建築・彫刻・繪畫・刺繡・音樂等の美術工藝は、新たな外來の手法に、我國の獨創を加へ、著しく發達した。

世に所謂飛鳥期の美術・工藝の中心をなす推古期の美術は、我國美術史上に一新期限を劃したものである。

而して、それ等は、總べて、聖德太子の保護、獎勵に基くこと多いのである。

推古期の寺院建築は、所謂飛鳥建築で、その代表的なものは、四天王寺、法隆寺、法起寺、法輪寺である。

その特長は、一様に漆喰か瓦敷の床で、柱の礎石が床の下にあり、左右均齊のプランで、軒には雲斗、雲肘木といつてたなびく雲の飾りがついて居り、柱にはエンタシスといつて中程に

ふくらみがある。内外の木材は丹塗りとし、壁も漆喰壁で、天井・格間は彩色蓮華寶相花を描いてある。

極めて華麗な重層建築で、調和と落着きを示してゐる。

これは、支那六朝に於ける北魏式を、百濟を通じて傳へたものと思はれるが、遠くギリシヤ美術の影響をも受け、それに獨創を加へたものと言はれる。

聖德太子は、また、推古帝の十二年に、黄文畫師、山背畫師、河内畫師等の佛教畫家を定め、戸税を免除などして繪畫を奨励せられた。

十八年には、高麗から僧曇徴が來朝して法隆寺に住ひ、彩色をほどこした。

當時の繪畫は、これ等の畫師に依つて、工藝的模様が描かれたのであらうが、今日まで遺つてゐるのは、法隆寺金堂西の間の天蓋の天人圖と玉蟲厨子の繪等である。

玉蟲厨子は推古天皇の念持佛であつたといはれる。

臺座には玉蟲の翅（最近の研究によれば一二三七疋の玉蟲の翅）を敷き、唐草模様の銅の透彫で縁がつてあり、扉や臺座の裝飾畫には、酸化鉛で溶いた密陀僧といふ油繪具を用ひてある。色彩は、青、黄、朱、黒、白等で、印度の佛説物語を繪で現はしてある。

その構想は自由で空想的で、潑刺とした描寫手法を見せ、世界に類のない藝術作品である。

更に、推古期の美術品で繪畫と關係が深いものに中宮寺の天壽國曼陀羅がある。推古帝二十九年に太子が薨ぜられた時、妃の橘大女郎が哀悼の情に堪へず、太子が極樂淨土に往生してゐられる有様を刺繡されたものである。

これは、白、赤、青、黄、緑、樺、紫の色絲で、堂宇、調度、人物、花卉、草木、禽獸、龜形等を巧みに刺繡した、眞に美しいものである。殊に、龜甲のうちに四字づゝ漢字を入れたものを百個作り、この曼陀羅の由來を表すなど、その精巧なことは驚くばかりである。元來は、二張あり、各一丈六尺もあつたが、今は僅かに三尺八寸四方位しかないが、それでも、實に當代日本人の優れた藝術の名産を見せて、誠に心強いものである。

繪畫の姉妹藝術である彫刻も、太子の佛教振興政策の線に沿つて劃期的の進歩を示した。

佛教渡來以前にも我國に彫刻はあつたが、多くは所謂沈彫で、まだ浮彫はなかつた。

石製及び土製のものは埴輪・土偶として宗教的儀式に用ひられたが、それ等は藝術的意圖のもとに、藝術的技巧で造られたものではなかつた。

我國に、藝術品として見るべき彫刻が造られたのは、實に欽明天皇の御代、佛像が輸入された後である。

欽明・用明・崇峻天皇の時代にも佛像が刻まれたが、推古天皇の御代となり、聖德太子の奨

勵に依つて、彫刻は目ざましい進歩發展をしたのである。

司馬達等の孫、鳥佛師(鞍作止利)は、特に佛像彫刻の技術に秀で、「鳥佛師式」ともいふべき彫刻様式を以て、飛鳥時代の彫刻界を指導し、法隆寺の釋迦三尊をはじめ、明治初年に帝室の御物となつた諸佛像など、數々の傑作を遺してゐる。

當時の佛像彫刻として現存するものには、安居院の金銅釋迦如來坐像、法隆寺の藥師如來、釋迦三尊、夢殿の救世觀音、中宮寺の彌勒菩薩等があり、それ等は皆我國美術史上の傑作とされるものばかりである。

材料は、鑄造が最も多く木彫がそれに次ぎ、塑像漆像は未だ造られてゐない。

形式は矢張り支那六朝時代の北魏の系統で、西域印度の影響も受けてゐる。

手法は、この後の白鳳、天平のものに比べて古拙の感があるが、却て高い氣品を備へ、崇高さに於ては他の追従を許さない。

寫實に墮せざる象徴的な意圖も表現も、却て我々現代人の共感を呼ぶものがある。

我國最初の佛像彫刻がかくも美術史上の傑作ばかりであつたといふことは、實に愉快なことではないか。

かうした藝術の功績があるので、太子は今日でも尙、大工や左官等の工藝人から守護神とし

て尊ばれるのである。

太子は、佛教、美術、工藝を獎勵されるばかりでなく、御自ら經文の講義もされたのである。

太子が如何に佛法に造詣が深かつたかは、太子が「勝鬘經疏」「維摩經疏」「法華經疏」を、お著しになつたことでも知られる。

太子の説法によつて、大乘佛教は初めて我國に根を下した。我國の淨土思想は、その源を太子に發してゐるといへるのである。

太子は、これ等の御學識を、推古三年高麗から來た僧慧慈について學ばれた。

太子は屢々慧慈に向つて、疑を質されたが、慧慈が答へられないところは、御自分で研究されて、慧慈と討論された。

太子は、また、博士覺哥を聘して、儒學をも學ばれた。

太子は、佛典は勿論、老莊の學を初め、易、詩、書、春秋等を研究せられ、天文、曆法、地理の書さへ讀まれた。

従つて、太子の御事業のうち最も特記すべき十七條憲法には、多數の支那書が引用され、而も渾然と調和した莊重な文體で、支那人も及ばぬ程、立派な漢文で書かれてある。

最近の研究では、太子が「憲法」起草に際して参考とされた書物は、「論語」「千字文」「中庸」「管子」「說苑」「韓詩外傳」「左傳」「書經」「詩經」「莊子」「史記」「孟子」「文選」等であるといふ。十七條憲法は、推古十二年四月太子親ら御創作になつたもので、我國最初の法典である。今日の憲法學者の間では、これを明治天皇の欽定憲法と同じく、我國で最も大切な典憲とするに一致してゐる。

一、和を以て貴しとし、忤ふことなきを宗と爲せ。人皆黨あり、亦達れる者少れなり。是を以て或は君父に順はず、乍鄰里に違ふ。然れども上和下睦し、事を論ずるに諧ふときは、即ち事理自ら通じ、何事か成らざらん。

二、篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。三寶は即ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世、何人か是の法を貴ばざる。人尤だ惡きもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ。三寶に歸せざれば、何を以てか枉れるを直くせん。

三、詔を受けては必ず謹め。君は則ち天、臣は則ち地、天覆ひ地載す。四時順行し、萬氣通ずるを得。地、天を覆さんと欲すれば、則ち壞るを致すのみ。是を以て君言へば臣承はり、上行へば下靡く。故に詔を受けては必ず謹め。謹まざれば自ら敗る。

四、群卿百僚、禮を以て本とせよ。其れ民を治むる本は禮に在り。上禮せざれば下齊はず、

下禮なければ必ず罪あり。是を以て君臣禮あれば位次亂れず。百姓禮あれば國家自ら治まる。

五、養を斷ち、慾を棄て、明に訴訟を辨ぜよ。其れ百姓の訟は、一日に千事あり。一日尙然り。況んや累歲をや。このごろ訟を治むる者、利を得るを常となし、賄を見て讞を聴く。便ち有財の訟は石を水に投ずるが如く、乏者の訴は水を石に投ずるに似たり。是を以て貧民は則ち由る所を知らず、臣道も亦焉に於て闕く。

六、惡を懲し、善を勸むるは、古の良典なり。是を以て人の善を匿すことなく、惡を見ては必ず匡せ。其れ諂詐は即ち國家を覆す利器、人民を絶つ鋒劍なり。また佞媚の者、上に對しては則ち好みて下の過を説き、下に逢へば則ち上の失を誹謗す。其れ此の如き人は、皆君に忠なく、民に仁なし。是れ大亂の本なり。

七、人各々任あり、掌ること宜しく濫れざるべし。其れ賢哲官に任すれば、頌音則ち起り、姦者官に在れば、禍亂則ち繁し。世に生れながら知るもの少なり、克く念ひて聖と作る。事大小となく人を得れば必ず治まり、時緩急となく賢に遇へば自ら寛なり。此に因りて國家永久にして社稷危きことなし。故に古の聖世は、官の爲に以て人を求め、人の爲に官を求めず。

八、群卿百僚、早く朝し晏く退け。王事監きことなく、終日盡き難し。是を以て遅く朝すれば急に速はず、早く退かば必ず事盡きじ。

九、信は是れ義の本なり。事ごとに信あれ。其れ善惡成敗の要は信に在り。群臣共に信あるときは何事か成らざらん。群臣信なければ萬事悉く敗る。

十、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり、人各々執あり。彼れ是なるは則ち我れ非なり。我れ是なるは則ち彼非なり。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に凡夫なるのみ。是非の理、誰か能く定む可き。相共に賢にして愚なること、環の端なきが如し。是を以て彼の人は瞋るとも、還つて我が失を恐れよ。我れ獨り得るとも、衆に従つて同じく擧へ。

十一、功過を明察して、賞罰必ず當てよ。このごろ賞は功に在りてせず、罰は罪に在りてせず。執事群卿、宜しく賞罰を明にすべし。

十二、國司國造、百姓に斂すること勿れ。國に二君なく、民に兩主なし。率土の兆民、王を以て主となす。任ずるところの官司は、皆是れ王臣なり。何ぞ敢て王と與に百姓に賦斂せんや。

十三、諸々の任官者、同じく職掌を知れ。或は病み、或は使して、事に闕くることあらん。然れども知るを得る日には、利すること曾てより識れるが如くせよ。其の與り聞かざるを以て、公務を妨ぐること勿れ。

十四、群卿百僚、嫉妬あること勿れ。我れ既に人を嫉まば、人も亦我れを嫉まん。嫉妬の患は、其極を知らず、所以に智己に勝れば悦ばず、才己れに優れば則ち嫉妬す。是を以て今五百歳の後、乃ち賢に遇ふとも、千歳を以て一聖を待ち難し。其れ聖賢を得ずば何を以て國を治めん。

十五、私に背き公に向ふは、是れ臣道なり。凡そ人私あれば必ず恨あり、恨あれば必ず同ぜず、同ぜざれば則ち私を以て公を妨げ、恨起れば則ち制に違ひ法を害す。故に初章に云ふ上和下睦とは其れ亦是の情なり。

十六、民を使ふに時を以てするは、古の良典なり。故に冬月間あれば、以て民を使ふ可し。春より秋に至り、農桑の節は、民を使ふ可からず。其れ農せず桑せずば、何を食し、何を服せん。

十七、大事は獨斷すべからず。必ず衆と論ずべし。小事は是れ輕し、必ずしも衆とす可からず。唯、大事を論ずるに速びては、若し失あらんことを疑ふ。故に衆と相辯ぜよ。辭則ち理を得ん。

太子の十七條憲法は以上の如くである。

これを見るに、第一條では、先づ平和協調主義を主唱して閥族間の争ひを禁じ君臣父子の道を説き、第二條には佛教に對する國家の態度を明らかにして、必ず三寶を信ぜよと言はずして

篤く信ぜよと言はれて信仰の自由を重んぜられ、第三條は天皇の神聖を力説し、詔の尊きを示して居られる。

殊に、第十二條に於ては、當時の閥族政治の社會組織を根本から否定して、「日本國民は皆天皇を主とすべし」と、我國體の精華たる君臣の關係を明らかにし、豪族が人民を私有することを戒められた。

また、第十七條に於ては、「大事は多數にて決せよ」とて、明治天皇の五箇條の御誓文の第一條

廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘシ

と仰せられたのと同じ御精神が現はれてゐる。古書にも「八百萬の神が神集ひに集ふ」とか「神謀る」といふことが見えてゐるとほり、天皇が專斷をさけて、國民と議し公正な政治を行はんとし給ふのは、我皇室の古來からの御方針である。

實に、十七條憲法は、當時の氏姓制度の弊害を否定し、天皇中心主義の國體を明徴にすると共に、政治の要道を説き、臣民が如何にして國家に奉仕す可きかを、規定されたものである。

烈々たる、太子の大日本國建設の御理想を伺ふことが出來ると共に、蘇我馬子などを初め、

強力な閥族を前にして、發布された御大膽と御苦心とは、察するに餘りある。

太子は、また、冠位を制定して、從來の氏姓による地位、職業の一定を排し、人材登庸の道を開かれた。

冠位の制度も定り、十七條憲法も布かれて、國內體制が整ふと、太子は、隋との國交を開かれ、從來三韓を通じたり、私かに地方豪族が輸入してゐた支那の文物を、公然と輸入する道を拓かれたのである。

推古天皇の十五年（西暦六〇七年）（皇紀二二六七年）七月、太子は、遣隋使として小野妹子を隋の朝廷へ遣はされた。

當時、隋は、有名な煬帝が、天下を統一し終つてから三年を経た時で、文化は發達し、國勢は盛んで、周圍の國々を、悉く屬國の様子に考へてゐた。

然し、太子は、妹子に托された國書に、

「日出づる處の天子、書を、日没する處の天子に致す、恙無きや」と書き出されてゐる。

當時の大國隋と對等の、或はより以上の立場を取られた譯である。

これは、堂々たる態度であつた。

煬帝は、「蠻夷の書無禮なり」と怒つて、之を却けたが、さすがは太子の御信頼を得て派遣されただけであつて、妹子は種々畫策して、遂に煬帝の諒解を得て、翌年四月正使裴世清、副使遍光高と共に歸朝した。

太子は、大いに裴世清等を歓迎せられ、一行を引見し給ひ、こゝに正式に日隋の國交が結ばれた。

更に翌十六年妹子は、裴世清の歸國を送り第二回の使節として、また、隋に遣はされた。

その時の國書にも、太子は、

「東天皇、敬みて、西の皇帝に白す」

と書かれた。

東海の一小國日本は、國家の體面を辱すことなく、堂々と對等の地位で、隋と國交を開いたのであつた。

この時、太子は、高向玄理、奈羅譯語惠明など四人を留學生、僧の旻、南淵請安等四人を留學僧として隨行させた。

妹子は十七年九月に歸朝したが、これ等の留學生、留學僧達は後に残り、最も長きものは、滯留三十三年に及んで、隋の學問、法律、政治、文化などを研究して歸り、我國の文物の進歩

に貢献した。

殊に、僧旻、南淵請安、高向玄理は、後年の大化の改新に、有力なる智囊となつた。

更に、太子は、我國の歴史を知り、我國民思想を鼓吹する爲に、國史編纂の業を起され、「天皇記」及び「國記」「臣連伴造國造百八十部」並に公民等の「本記」を編纂された。

かくの如く、太子は、我國文化の發展、社會改革につくされる、こと三十年にして、推古天皇の三十年二月二十二日の夜半、四十九歳のお年で斑鳩宮で薨せられた。

天下の人民の悲嘆の有様は、「日本書紀」に次の如く書いてある。

「諸王諸臣及び天下の百姓は悉く悲しみ、年老いた者は愛兒を失つた如く、鹹いも酸いも物の味など分らなかつた。年若い者は慈父母を亡つたやうに、哭泣する聲が道路に満ちた。農民は耕すことを止め、米を舂く女は杵を棄てた。日月は光を失ひ、天地は崩れるやうに思はれた」

太子の師であつた僧の慧慈は、高麗に歸つてゐたが、太子の薨去を聞くや、非常に悲しんで、衆僧を集めて大法會を營んだ。

その時、慧慈は、

47 「私と太子とは國籍が違つてゐたが非常に深い交りがあつた。その太子が亡くなられた。私一人生きてゐても、最早仕方がない。私は、太子の一周期に必ず死んで、淨土で太子と共に衆生

の濟度をしよう」

と誓つたが、果して、その言の如くであつた。

この一外國僧の殉死に近い死によつても、太子の人格が如何に偉大であつたかを想見することが出来よう。

實に太子は、古い日本を、充實した新しい文化國家として、築き上げようとした方であつて、明治天皇が日本を世界的な國家にまで發展せしめられたのと共に、日本の歴史上で忘れることの出来ない偉大なる御存在である。

而して、この太子の新日本建設の理想は、中大兄皇子なかのおおえのわうじによつて受け繼がれ、大化の改新となつて現はれたのである。

中大兄皇子と藤原鎌足

聖徳太子が薨去せられた後は、蘇我氏は専横を極め、馬子、蝦夷、入鹿と三人相繼いで大臣となり、横暴の限りをつくした。

聖徳太子の薨去後間もなく、馬子は推古天皇に迫つて、皇室直屬の葛城縣を賜はらんことを請ひ奉つたり、専横を極めたが、その子の蝦夷は父にもまして無道な人間で、その子入鹿と共に

に言語同斷の振舞ひをした。

推古天皇が在位三十六年で崩御あらせられて、聖徳太子の御子山背大兄王と、敏達天皇の御孫田村皇子と何れが皇位を繼がれるか問題になつた時、蝦夷は、勝手に推古天皇の遺詔であると稱して、田村皇子を立て、第三十四代舒明天皇とし、擁立の功を頼んで、無法の行ひを爲した。

その上、天皇は御病身であらせられ、有馬の温泉や伊豫の温泉に一再ならず行幸あらせられた程なので、蝦夷は益々横暴を極めた。

當時は、又、支那思想の影響をうけ、迷信が、まことしやかに言ひふらされた。

舒明天皇は、在位わづか十三年で崩御せられた。

中大兄皇子が皇太子であらせられたが、まだ幼かつたので、皇后が皇位に即かせられた。

第三十五代皇極天皇である。

天皇は女帝であらせられたので、蘇我氏の宮中に於ける勢力は絶頂に達し、蝦夷の子入鹿が國政に與り、父に劣らぬ威勢を振つた。

蝦夷は病氣で朝廷へ出られなくなると、子の入鹿に紫の冠を授けて、勝手にこれを大臣に任じた。

更に、彼等は臣子たる分をも、忘れるやうにさへなつた。

蝦夷は、祖先の廟を葛城の高宮に造つたが、その祭りには無禮にも、天皇がお使ひになる舞樂を用ひた。

また、諸々の民を徴發して、彼等父子の死後の墓を造り、これを「大陵」「小陵」と呼ばしめた。

この工事の時、聖徳太子の御領地の壬生の民をも、勝手に徴發して使役したので、太子の御娘である大娘姫は、

「蘇我の臣の専權と無禮は絶頂に達した。天に二日なく、國に二王はない筈であるのに、何の理由で、彼等は、臣下の身分でありながら、恣に皇族である我が領民を使ふのか！」と、憤り給ふた。

然し、その爲に、蘇我父子は、益々、聖徳太子の御一族に對して、怨みを抱くやうになつたのである。

間もなく、皇極天皇が御退位の意をおもらしになつた時、その後は、人望の高い山背大兄王がお繼ぎになる様子だつたので、入鹿は、遂に、王を斑鳩宮に襲撃した。

王の家來達は勇敢に戦ひ、入鹿の軍を容易に寄せつけなかつた。

その間に、山背大兄王は、内寢に馬の骨を投げ入れ、妃及び子弟等を率ゐて生駒山に逃げら

れた。

入鹿の軍は、宮に火を放つて、灰の中から出て來た馬の骨を王のものと思ひ、圍を解いて歸つていつた。

生駒山に逃れた王に、馬で東國まで落ち延びられよ、とすゝめる人もあつたが、王は聞かれなかつた。

間もなく、王が生存してゐられることを知つた入鹿は、愕いて軍を生駒山に向けた。

王は、法隆寺に歸られた。賊兵は寺の周圍に滿ち滿ちてゐた。

王は、使を賊軍に遣して、

「自分は、今、兵を擧げて入鹿を討つならば勝てるであらうが、一身のために人民を傷つけるのは本意でない。だから、わが身を入鹿にくれてやらう」

といつて、一族の方々と共に、自殺して亡くなられた。佛教を深く信仰して居られた王には、これが大慈悲心の現れだつたのであらう。

このために、聖徳太子の御系統は絶えてしまつたのである。

このことを知つて、流星の蝦夷も、子の入鹿を罵つて、

「馬鹿者め、こんな暴虐な行ひをしては、やがて、お前の身が危くなるぞ」

と言つた。

果然、世の人々は山背大兄王を惜しみ、蘇我氏の専横を憎む聲が高まり、遂に、これを倒さうとする計畫が生じて來たのであつた。

その巨頭は、先づ欽明天皇の御代に、崇佛排佛の論で蘇我氏と争つた中臣鎌子から六代目の孫中臣鎌足であつた。

鎌足は、聰明な人で、學問にも秀でゝゐた。

蝦夷父子は、鎌足が名門であり、人望もあるのを見て、自分達の勢力下に置かうとして、皇極天皇の三年に、鎌足を神祇伯に任じようとした。

然し、鎌足は、蘇我氏の恩を受くるのを好まず、固辭して受けず、病と稱して三島（攝津國島上郡）に籠つてゐた。

その時、恰度、皇極天皇の御弟の輕皇子（後の孝徳天皇）も脚疾あつて、參朝をして居られなかつたので、鎌足は、その宮に伺候して、蘇我氏の横暴を嘆き、自分の志を申上げた。

輕皇子は、鎌足の優れた人物であることを知り給ひ、深く御信任あらせられた。

その後、鎌足は、英邁な中大兄皇子に、自分の志を申上げようと、接近する機會を待つてゐた。

たまたま、法興寺で蹴鞠の會があつた時、皇子が鞠を蹴られたはずみに、お靴が脱げて飛んだ。鎌足は、それを拾つて、楓の木の下に進み、跪いて捧げると、皇子も丁寧にお受取りになつた。この時から、鎌足は皇子の御知遇を得た。

英邁な皇子も、豫て蘇我氏の専横を憎まれ、秘かに對策を練つて居られたので、鎌足の意見に賛成され、着々と計畫を進行せしめられた。

皇子と鎌足の往來が繁くなるため、人々に疑はれ計畫が洩れるのを慮つて、共に推古天皇の御代の陪の留學僧なる南淵請安の許に通ひ、儒教研究に事依せて、謀をめぐらされた。

大事決行の準備として、その頃可成り勢力のあつた蘇我倉山田石川麿、武勇の誇れ高い佐伯子麿、稚犬養淵田等を、同志に引き入れた。

一方入鹿は、甘櫛岡（奈良縣高市郡飛鳥村豊津にある岡）に城のやうな家を造り、柵をめぐらし、門の傍に兵庫を設け、武器を持つた兵士で守らせた。また、蝦夷は、畝傍山の東に家を構へ、池を掘り、庫を建て、出入ともに五十人の護衛兵を従へた。

そして、蝦夷の家を上宮門と言ひ、入鹿の家を谷宮門と言ひ、子供を王子と呼んでゐた。

中大兄皇子や鎌足等は、嚴重な入鹿親子の邸宅を襲ふことが出來ず、私かに機會の到來を狙つてゐた。

皇極天皇の四年六月、三韓進貢の日に愈々大事を擧げることになった。

六月十三日、天皇は大極殿に出御あらせられ、入鹿もその席に列つた。

猜疑深い入鹿は何時も劍を放さなかつたが、鎌足が廷臣に教へて、瞞して劍を解かしめた。計られたとも知らず、入鹿は笑つて、劍を持たずに座についた。

皇子の味方である山田麿が玉座近く進んで、三韓からの表文を読み始めた。

中大兄皇子は、御殿の十二の門を皆閉めさせて、祿を賜ふと稱して警衛の士たる衛門府を一所に集めて置いた。おん自ら、長槍をとつて物蔭に隠れてをられた。

鎌足も、弓矢を持つて皇子の傍に控へ、子麿と網田は皇子から賜つた劍を持つて、進出の機を待つてゐた。

然るに、この二人は、ためらつて容易に入鹿に躍りかゝらうとしない。

山田麿は、表文がまさに終らうとしてゐるのに誰も入鹿に斬りつけないので、狼狽し冷汗が流れ、聲さへ亂れて來た。入鹿は怪しんで、

「何故震ひ戦くのか」

と訊ねると、山田麿は、

「天皇の御前近くに侍り奉り、畏れ多くて——」と答へた。

その瞬間、これ以上躊躇出來ずと見て、皇子は、

「おう——」

と叫んで、躍り出されると入鹿の肩に斬りつけられた。

驚いて立上つた入鹿を、進み出た子麿がその片脚に斬りつけた。

入鹿は、玉座の前に轉び寄り、

「私には何の罪もございません。よくお調べ下さいませ」と申し上げた。

餘り突然の出來事なので、天皇も驚かせ給ひ、事由をお訊ねになつた。

中大兄皇子は、御前に出て、

「入鹿は皇族を滅ぼして、日位を奪はうとして居ります。どうして、入鹿を天孫に代へることが出來ませうか」と申上げた。

天皇は御座を立つて、殿中に入らせられた。

子麿と網田は入鹿を斬り殺した。

その屍は、雨降り瀝ぐ庭に横へられ、蓆で掩はれた。

中大兄皇子は、法興寺に入つて、戦ひの用意をされたが、入鹿の専横を憎んでゐた皇族や、群臣達は我先きにと馳せ加はつた。

蝦夷は、人鹿の死屍が届けられたのを見て、軍備をととのへ、戦はうとした。皇子は、使を遣はして、

「我國は、天地が開けた時から君臣の別が定まつてゐる。大君に弓を引くとは何事かと、臣たる者の道を説かれたので、蝦夷の味方の者共も、弓矢を投げ、大刀を解いて逃げ去つた。

さすがの蝦夷も、最早これまでと覺悟し、家に火を放つて、自ら焼け死んだ。

この時、聖德太子編纂の「天皇記」「國記」その他、多くの珍寶が焼失してしまつた。

かくして、第二十八代宣化天皇の二年に稻目が大臣となつてから、馬子、蝦夷、入鹿と四代百餘年にわたつて、政治に參與し、馬子以後は驕奢をきはめた不忠の家、蘇我氏も英邁な中大兄皇子と忠臣鎌足によつて、つひに天誅をうけて滅んだのである。

皇極天皇は、蘇我氏が滅んだ翌日、皇位を中大兄皇子にお譲りにならうとしたが、皇子は鎌足と御相談の上、叔父君に當る輕皇子をお立てになつた。

第三十六代孝德天皇と申上げる。

御即位の日、中大兄皇子は皇太子になられ、阿部内麿を左大臣、蘇我倉山田石川麿を右大臣に、中臣鎌足を内臣に任じ、唐に留學して歸つて來た僧の曼と高向玄理を國博士に任じて、願

問とされた。

六月十九日、孝德天皇は、先帝及び皇太子と御一緒に御殿の大槻の下に群臣を召して、忠誠を誓はしめられ、この日に年號を建て、大化元年（西暦六四五年）と呼んだ。

これが、日本の年號の初めである。

これは入鹿が誅せられてわづかに七日目である。

如何に皇子達の計畫が周到であつたかを知ることが出來よう。

多年にわたる一大社會的暗礁であつた閥族の總帥蘇我氏を滅した中大兄皇子は、名臣中臣鎌足と共に孝德天皇をお助けして、聖德太子の理想を繼ぎ、新日本建設の爲に政治上の大改新を斷行された。

即ち、大化二年正月、賀正の禮が終ると、改新の大詔を渙發して四大綱領を公示せられた。

その一は、皇族、貴族、臣、連、國、造、縣主などの私有してゐた土地、人民を悉く朝廷に返上させて、公地公民となし、その代りに、大夫以上には食封を、官吏、庶民には布帛を賜はつた。

その二は、行政の區劃と交通の制度を整へたことである。

即ち、全國を分つて、畿内と畿外の二つとし、更に、國、郡、里に分つて夫々の司を置いた。

邊境の地には防人を置き、關所には關塞を置いて、國內安全を保つた。街道には、驛馬、傳馬を置き交通を便利にした。

その三は、初めて戸籍を作り、庶民に戸口に應じて土地を割りあて、耕作せしめた。これは班田收授法といつて、男には二段、女には三分の二にあたる一段百二十歩を與へ、その百分の四を税として納めさせた。

その四は、舊來の賦役を廢めて、新たに、公民に祖・庸・調の法を設けた。

この四大制綱渙發の後、更に、聖德太子が制定した十二階の冠位に改制を加へ、最高の大織冠から、最低の立身冠まで十九階として、才能ある者は、血統、家柄にかゝらず登庸して官位を授けることにした。

これ等の新政綱は、聖德太子の御代に支那へ留學して歸朝した高向玄理や僧旻や南淵請安などの意見を用ひ、隋、唐の制度を参考としたものであるが、實際上に當つては、概ね、皇子達の創案になるものといはなければならない。

その實施に當つては、中大兄皇子は、先づ領地、領民を奉還して範を示されたのであつた。

かくて百般の制度はとゞのひ、聖德太子の念願された大日本建設の爲の、政治及び經濟の中央集權制の確立は、中大兄皇子達によつて、着々、實行されて行つたのである。

その効果に於ては、政治改革といふものよりも、建國以來の氏姓制度を徹底的に破壊した點に於て、一大社會改革となつた。

世にこれを、大化の改新と稱して、明治維新と並べて、建國以來の一大改革とされてゐる。

孝德天皇は在位十年で崩御せられ、皇極天皇が再び皇位につかれ、齊明天皇と申上げた。天皇が重祚したまふた初例である。

中大兄皇子は、なほも、引續き皇太子として天皇を輔佐せられた。

これは、中大兄皇子が聖德太子の先例を追はれたと共に、天皇の位にまし／＼ては祭祀その他の儀式などが多くて、政治外交に専念し給ふ事が出来ないために、寧ろ、御自由な御身で、大化の改新を徹底させる爲に、皇太子のまゝで留まられたのであらう。

齊明天皇の御代には、大化の新政は更に廣く行はれ、國運は益々發展した。

さきに、日本武尊御征伐後も、日本海沿岸の蝦夷は屢々叛いてゐたので、齊明天皇の御代、越國守阿部比羅夫は勅命を奉じて、水軍を率ゐて三回にわたつて北陸地方から秋田・津輕地方を平げ、渡島（北海道西南部）の蝦夷を定め、なほ遠く北へ進んで沿海州の肅慎（オロツコ族であらう）をも征伐した。

これから、東北地方も大いに定まり、蝦夷はよく朝廷の命を奉じるやうになつた。

更に、この時代に、嘗て任那日本府が亡びてから日一日と強大になつた新羅が唐と結んで百濟を攻めたので、百濟は我國に援助を求めて來た。

齊明天皇は女性の御身を以て、皇太子中大兄皇子と共に御親征の途に上らせ給ふたが、風土病の爲に筑紫の行宮にて崩ぜられた。

中大兄皇子は、天皇の御志をついで、援軍を出されたが、白村江（錦江口）に於て、唐の兵と戦つて敗れ、百濟は全く亡びてしまつた（皇紀一三三三年）。更に後五年で高麗もまた、唐に亡されてしまつた。

中大兄皇子は、唐の勢力を考へ、隣つて大化改新後日なほ淺い我國情を省られて、永く海外に國力を費すことの不利なるを思はれて、斷然朝鮮半島を放棄されることになつた。

實に、神功皇后の征韓より四百數十年の後である。

新羅の朝貢はこの後百數十年間時々あつたとはいへ、久しく我に服屬してゐた半島の放棄は、中大兄皇子の非常な英斷であるといはねばならない。

半島の放棄と共に、皇子は、對馬、壹岐の二島及び讚岐屋島、大和高安山（たかやすん）に城を構へ、筑紫に太宰府を置き唐に對しての防備を嚴重にせられると共に、一方では、唐との國交調整に力を盡され、その國使が來朝するに及んで、却つて好を修めたまひ、以後、唐の制度、文物をとり

入れて、國內文化の進歩發達をはかられた。

中大兄皇子は、齊明天皇崩御の後、六年を経て、近江の志賀（今の天津市の北）に都を遷され、御即位された。

第三十八代天智天皇である。

天皇は、朝廷の儀禮を整へ、學校を建て、冠位制を修正し、庚午年籍（かうごんねんせき）といふ正確な戶籍を作り、更に、中臣鎌足に命じて、大化の改新以來の制度を整理して、近江令二十二卷を定められた。

この近江令は、後になつて文武天皇の御代に出來た大寶律令の基をなすもので、その中に定められた官制や諸制度は、明治十八年まで實に千二百年の長きにわたつて用ひられた。

かくして、大化改新は、吉野朝時代の勤王歴史家北畠親房（きたはたのちか）が「神皇正統記」に於て「中興の神」と申上げてゐる天智天皇と、中臣鎌足によつて成就したのである。

鎌足が、天智天皇の八年十月、重病にかかるや、天皇いたく御心痛になり、親しくその邸に行幸あらせられて、病を問はれ給ふた。

その後、更に、大海人皇子をお遣しになつて、鎌足に大織冠を授け、内大臣に任じ、新に藤原の姓をも賜はつた。

鎌足は、その翌日、五十六才で薨じた。

天皇の御嘆きは、一方でなく、葬儀の日には、特に葬列をして御所の傍を通らしめられ、天皇は白い喪服を召され徒歩でお出ましになり、鎌足の柩車きゆうぐるまを止められて、涙をたれて別れを告げ給ふた。

鎌足の遺骸は攝津の阿威山あゐやまに葬つたが、後、大和の多武峯に改葬して今日に至つてゐる。

その傍の談山神社は、鎌足の靈を祀つたものである。

鎌足の死後、天皇は快々として樂しまれず、三年目の九月御發病あらせられ、上下の御平癒祈願の甲斐もなく、遂に、十二月、御年五十八才にて崩御せられた。

然し、第四十二代文武天皇は、聖德太子・天智天皇の御志を嗣がれて、御叔父忍壁親王しのがせと鎌足の子藤原不比等に命じて、更に、律令を撰修せられた。それは、大寶元年（一三六一）に出來たから、大寶律令と呼んでゐる。この律令は、唐の制度を取入れると共に、我國固有の風俗・習慣を考慮して定められたものである。この後、元正天皇の養老二年（一三七八）に、不比等が、また、天皇の仰せをうけて、大寶の律令に、多少、修正を加へて、養老の律令を撰修した。これは、永く、わが國の政治法律制度の根本となつた。

かくして、我國は法治國として、だん／＼、發展して行つたのである。

奈良平安時代の文化と人物

奈良時代の文化

第四十三代元明天皇の御代のはじめに、武藏國秩父郡（埼玉縣）から出た天然銅を献上したところ、神祇の顯し給ふた瑞寶であるとして年號を和銅と改め、和同開珎わどうかいじん（同は銅、珎は寶の略字であるといはれる）といふ銅貨を鑄させて、使用させられた。近江、播磨、太宰府、長門などに鑄錢所ちゆうせんじよが置かれた。

そこで、従來は主として物と物とを交換して有無を相通じてゐたのが、これから錢を交易の媒介とするやうになつたのである。従來は、物價を稻何束で表はしてゐたのが、これからは穀六什が一文、布一常じちやうが錢五文といふ風に貨幣で計算されるやうになり、調庸の如きも錢でかへられるやうになつた。即ち、實物經濟の時代を去つて、貨幣經濟の時代に入つたのである。

然しはじめの間は、貨幣を信用出來ず、その便益を知らなかつたので、朝廷では、法律で以

て田の賣買は錢貨を用ひさせたり、錢を蓄へたものには位階を進めるやうに定められた。その結果、人民も次第に錢貨の使用に慣れて、都をはじめ畿内諸國ではよく流通するやうになり、經濟の發達を促した。

和銅三年（一三七〇）天皇は、都を今の奈良市の西方に奠められ、唐の制度に倣つて市街を整へ、皇居や諸官廳を壯大華麗にされた。これを平城京といひ、この後第四十九代光仁天皇に至るまで、七代七十餘年間は、大抵こゝに都せられたので、この間を奈良時代といふ。

奈良時代は、大化改新後に於ける我國の統一國家としての活動期であつて、内にあつては佛教が盛んに擴まり、文化は開け、外は唐との文通が繁くなつた。

第四十五代聖武天皇の御代に至つて、その文化は、咲く花の匂ふが如く燦然と光りかゞやいた。

美術史上では、この聖武天皇の御代を中心とした奈良時代を以て、天平期と名付け、美術史上第一の黄金時代としてゐる。

即ち、當代の美術・工藝は、飛鳥時代の後をうけ、唐の文化と佛教の興隆の影響により非常な發達をして、單なる前代の繼承のみでなく、單なる唐の模倣でなく、それらに優つた一つの新しい渾然たる藝術の出現であつた。

殊に彫刻に於ては、前時代の古拙生硬な技法は跡も留めず、流麗典雅な手法を以て、金銅、木彫、塑像、甌像、石佛に至るまであらゆる材料を自由に驅使して、佛教的彫刻を主とし、肖像、伎樂面等に、雄大、莊麗、渾然とした名作を残してゐる。東大寺の大佛、大佛蓮瓣の畫像、東大寺銅燈籠扉のレリーフ、法華堂（三月堂）の不容羅索觀音、日光菩薩、執金剛神、梵天・帝釋天像、四天王像、當麻寺の彌勒菩薩像、四天王、興福寺の天龍八部衆、法隆寺の九面觀音像、法隆寺傳法堂の勢至菩薩像、唐招提寺の藥師如來像等々數へ切れない程のものが、我國美術史上の傑作であるのみならず、優にエヂプト、希臘の彫刻にも比肩することが出來、實に世界に誇る可きものである。

建築に於ては、東大寺の法華堂、法隆寺東院の夢殿、傳法院、新藥師寺の本堂、西大寺、正倉院等が今尙現存して當時の佛をつたへてゐる。當時に於ては、第三流程度であつたといはれる唐招提寺の金堂でさへ、古今の傑作と稱せられてゐるのだから、當時は、如何に莊麗な寺院、宮殿が立ち並んでゐたか想像されるであらう。

天平時代の藝術のうち、最も多く、完全に近く遺されてゐるのは工藝品であり、その多くのものが、正倉院に藏されてゐる。

正倉院は「東大寺略記」によると、聖武天皇崩御の年、天平勝寶八年六月には、既に建造さ

れてゐたことは明かで、確かな建立年代は不明であるが、聖武天皇の御遺物をはじめとして、精巧美麗な當時の家具、樂器、武具、裝飾品等約三千點の珍寶を千數百年の今日までその儘傳へた世界に稀なる寶庫である。納められた寶物は、我國工藝品の粹を集めたばかりでなく、唐、西域、印度、ベルシヤ、東ローマあたりの物まで網羅され、世界にその比を見ないのである。その中でも、鳥獸草花の模様を藤纈染にした屏風、牙・角・竹・木等でモザイクした紫檀の碁盤、紺や白のガラスの盃や瓶、紫檀に螺鈿を散りばめた琵琶などの立派さは形容の言葉もないのである。

繪畫は、彫刻、建築などと共に大いに發達したのであるが、現存するものは非常に少い。然し、當時の代表的遺作たる正倉院の鳥毛立女屏風、藥師寺の吉祥天等を見ても、推古期よりは非常な發達を遂げて、唐風を入れ、豊麗な線を描き、次の平安時代藝術の淵源をなしてゐる。殊に、過去現在因果經は、後の大和繪の源をなすものである。

美術と並稱される學問、文學の方面にも、奈良時代には、著しい進歩があつた。

さきに聖德太子が編纂された國史は、蘇我氏滅亡の時、殘念にも焼けてしまつて世に傳はらなかつた。天武天皇が太子の志を繼がれて國史編纂を企てられ、稗田の阿禮に勅し我國の古傳を暗誦せしめられたのを、元明天皇は和銅五年太安萬侶に命じて、漢字の音と訓とをませ用ひ

て書き記された。これが「古事記」である。天皇は、また、諸國に勅して、國、郡、郷、里の名は、好字を選んで二字と定められると共に、それぞれ地方の物産、地勢、傳説等を記して差出さしめられた。これを撰録したものを「風土記」といひ、我國最初の地誌である。

古事記が出来て間もなく、更に國史編纂の勅があり、七年の後第四十四代元正天皇の御代、舍人親王が之を完成して奉つた。これが「日本書紀」であつて、全部漢文で書かれてゐる。

斯様に國史地理の編纂が行はれたのは、我國民の國家意識が固まり、愛國心が強くなつたからである。

このことは當時榮えた漢文學、和歌にも見ることが出来るのである。

當時の漢文學の秀才阿部仲麻呂が吉備眞備と共に唐に渡り、故國を慕つて歌つた「三笠山」の歌は有名である。

また、この時代の人々の和歌を集めた「萬葉集」には、古代の我國民精神が少しの飾りもなく歌はれてゐる。持統・文武兩天皇の頃に出た柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良等と共に有名な歌人大作家持の「海行かばみづく屍、山行かば草むす屍、大君の邊にこそ死なぬ、かへり見はせじ」の歌は、烈々たる尊皇愛國の精神を高揚したもので、千年の後の人々の魂を打つのである。

和氣清麻呂

聖武天皇は、深く佛教を信じ給ひ、佛教によつて國家を治めようと思召して、數多の寺院・佛教を造らしめ給ふた。天平十三年（一五〇一）には、萬民の爲に災厄を攘ひ、天下泰平、國土安穩を祈らせられて、國毎に僧と尼との國分寺を建てられた。大和の國分寺は即ち奈良にある東大寺で、尼寺は法華寺で、諸國の國分寺・尼寺の上に立つてゐた。今日、日本が世界に誇つてゐる所謂奈良の大佛は、この時、東大寺の本尊として、盧舍那佛の御像を金銅で鑄造されたもので、最初の鑄型を作つてから實に十五ヶ年の歳月を要して完成したもので、高さは約十六メートル二センチ、手の大きさだけで二・三メートル餘もある。

聖武帝の皇后は、藤原不比等の女で、光明皇后と申し、深く佛教に歸依し給ふた。殊に、寵愛された皇太子と御母橘三千代夫人を相ついで失はれてから皇后の御信仰は一段と深くなられた。皇后は、施藥院や悲田院を設けて、貧しい病人や孤兒の養護に御心を傾けさせられ、尊い御身で、身分の低い人の背をお流しになつたり玉手に砂運びの勞働までせられた。

斯様に佛教は奈良時代に入つて、皇室や貴族の尊信を得てます。隆盛となつたので、僧侶にも學問・徳行のすぐれたものが多く出た。良辨、義淵、玄昉等有名であるが、この時代の代

表的名僧としては、行基をあげなければならぬ。

行基は、和泉國大島郡に生れ、幼い時に出家して藥師寺に入り、玄昉、良辨等と共に義淵から法相の訣を學び、具足戒を徳光法師より受けた。彼は、貴族階級の人々よりも民間への傳導を好み、弟子百人、戒弟子三千餘人を數へた。彼はまた、佛の慈悲を萬民に施さんと努め、社會事業、社會教化に力を竭した。彼は、傳導の旅で險所に遇へば、橋を架し、路を修め、耕すべき地には池を穿ち、塘を築き、港灣を設け、諸國に九十八ヶ所の寺院を建立した。巡錫すること六十餘州に遍く、壹岐對馬にまで渡つたといはれる。彼は、山城國宇治郡に住んでゐた頃、土地の人に陶器の製法を教へ、それが粟田口、清閑寺等に傳はつて粟田焼の起源となり、又、愛宕郡清閑寺村宇茶碗坂で、聖武天皇の勅を奉じて陶器を作り、之が今日の京都五條焼、清水焼の起源になつたことである。聖武天皇が東大寺の大佛を鑄造あらせられる時、行基は、その徳望を慕ひ寄つて來た民衆を勧誘して、この大事業の完成を促し助けたのである。天皇の御信賴は愈々深くなり、行基は、遂に大僧正に補せられた。彼の高德を敬ふ民衆は、彼を行基菩薩と言つて崇めた。「續日本紀」には、「行基の徳範は夙に彰れ、都鄙に周遊して衆生を教化し、行くところ和尙の來るを聞けば、巷に居人なく、争ひ來つて禮拜するを、器に隨つて誘導し善に赴かしめた」とある。行基は、また、佛教を單なる、外來宗教のまゝ受け容れず、日本

化して、我國古來の諸神も諸佛と同一顯現であるとして、後の本地垂迹説の淵源をなす神佛同一の思想を抱いてゐた。これは、佛教思想が、我國固有の思想に動かされ、日本化し始めた第一歩として極めて注目すべきことである。

佛教の隆盛は、行基の如き學徳共に優れた高僧を出したが、一方では、玄昉、良辨の如く、上下の尊信あつきにまかせ、僧侶の分に背き、政治に關與して專横の振舞ひをする惡僧をも輩出した。

そのやうな情勢は、聖武天皇の皇女第四十六代孝謙天皇の御代になると、益々、甚しくなつた。

天皇も、また厚く佛教を信仰されたが、藤原不比等の孫仲麻呂が才學共に優れてゐるので御信任になり、重用された。

天皇は、幾何もなく、仲麻呂のすゝめにより、位を天武天皇の御孫淳仁天皇に譲られて、上皇として御自身で政治をお執りになられた。

天平寶字五年十月、孝謙上皇は、近江の保良宮に行幸された折、病に罹らせられた。そこで、上皇は、當時、有名であつた僧道鏡を召された。道鏡は、多年修行した如意輪法・宿曜祕法を用ひ、熱心に看病投藥して、御病を癒し奉つた。この時以來、道鏡は上皇の厚い御信任を得るやうになつたのである。

道鏡は、河内國弓削の出身で、義淵僧正の弟子となつたが、初め、葛城山に籠つて如意輪の法を修め、非常な難行苦行を積んだといふ。また、彼は、梵學を修め、梵語にも巧みで、梵唄・唱導の音節にも熟練してゐて聽く人を感動せしめたと言はれる。

道鏡が内道場に入つて、上皇の御病を癒し奉つたのは、彼の五十才前後と推定されるので、苦勞を積み、人心の機微を知つた彼は、巧みに上皇にとり入つて、御寵愛を得たものと思はれる。天平寶字七年九月には、道鏡は小僧都となり、上皇に近侍して御傍を離れなかつた。

仲麻呂は、それを嫉んで、遂に叛を謀つて誅せられた。

間もなく、淳仁天皇にかはつて、上皇が重祚され、稱徳天皇と申上げた。

天皇は、益々、道鏡を重用されて、天平神護元年には、道鏡に太政大臣禪師の位を授けて、文武百官をして禪師を拜賀せしめられた。

翌年には、脇寺の毘沙門像から三粒の舍利が現はれたので、かゝる奇瑞は、太政大臣禪師の教導に由るとの理由で、道鏡に法皇の位を授けられた。法皇の月料は供御に准ぜられ、その下には、大納言に准ずる法臣、參議に准ずる法參議などの僧官が置かれ一大教廳を形作り、これに一種の僧侶政治が行はれた。道鏡は、驕奢を極め、大臣以下の拜賀をうけ、自ら壽詞を告げ

るに至つた。

この時、太宰主神習宜阿曾麻呂といふ者が道鏡に媚びて、宇佐八幡の神教と作り、「道鏡を皇位に即かしたならば、天下泰平ならん」と、奏した。

道鏡は、これを聞いて非常に喜び、非望を懐くやうになつた。

天皇は、さすがに驚かれ、和氣清麻呂を召して、宇佐八幡の神勅を、聽いて來るやうにと、仰せられた。

清麻呂は、備前國藤野郡の人で、初め、從六位上右近衛少尉であつたが、神護年間に、從五位下に進み、近衛將監に遷つたが、この年、因幡員外介となつてゐた。

清麻呂は、人爲り剛直で、學識博く、特に古實に明るかつた。

清麻呂が宇佐へ行かうとすると、道鏡は彼を脅して、「定めて我が即位を告ぐる爲ならん。もし事ならば大臣の位になさん」と言つた。

清麻呂が宇佐に着いたのは八月末で、直ちに神宮に詣でて、「神教は國家の大事なれば、願くば神意を示し給へ」と懇ろに祈つたところ、神は忽然と現はれた。それは、満月のやうな色で、長さ三尺許りあつたので、清麻呂は、魂を消して仰ぎ見ることが出来なかつた。神は託宣して、「國家君臣の分は定まれり。道鏡が神器を望むとも、震怒して聽されず。汝歸りて奏せよ。天

日嗣は必ず皇儲を立て、早々無道の人を掃除すべし」とあつた。清麻呂は、九月半ば過ぎに歸京して、道鏡の威勢を懼れることなく、この神託を奏上した。

道鏡は、大いに怒つて、清麻呂を大隅に、その姉の法均尼を備後へ流した。「日本後紀」によると、道鏡は、追手を遣はして、清麻呂を殺さうとしたが、雷雨のために、成らなかつた。

この時は、實に、清麻呂の忠誠によつて、萬國無比の國體を、全うすることが出来たのである。

この後も、道鏡は依然として専横な振舞ひをし、その弓削一族は高位高官に上つて勢力を振つた。

幾何もなく、稱徳天皇の御病が重らせられると、藤原永手、同良繼、同百川等が宮中で議して、人望のあつた天智天皇の皇子施基親王の御子白壁王を皇太子に冊立し、道鏡を下野に流し、清麻呂、廣蟲を召還した。

道鏡は、間もなく下野で死んで、庶人として寂しく葬られた。

白壁王は即位されて光仁天皇と申上げる。

73 天皇は、緊縮政策を執られ、これ迄の幣政の刷新に心掛けられ、軍團制度を一變して、弓馬に馴れた者を兵士とし、羸弱な者は農に歸らしめて兵農二分の端を開きなどして、新時代の改

新を斷行された。

清麻呂は、天皇に仕へ忠勤を勵んだが、幾何もなく、第四十代桓武天皇が即位あらせられるや、歴仕して、數々の功績を遺した。

即ち彼は、天皇の御代の初めに、奏上して、攝津と河内の境に運河を開鑿して民利をはかつた。

また、天皇は平城京を去り、山城の長岡に都を移されたが、延暦十三年（一四五四年）更に、葛野郡宇太野の地を相して都とされ、平安京の基を礎かれたのも、實に、清麻呂の奏議によるのである。この時、清麻呂は、狩獵に託して各地を跋渉して、遂に、この地を見出したのであるといふ。

延暦十五年從三位に進んだ時、清麻呂は、骸骨を乞ふたが、お許しがなかつた。

如何に清麻呂が、天皇の御信任篤かつたかを知ることが出来る。

延暦十八年、清麻呂は、六十七才で薨じた。

彼は、その博い學識で、民部省例二十卷、和氏譜を撰し、天皇に奉つたところ、天皇は甚だ善し、と仰せられたとのことである。

清麻呂の子供の廣世、眞綱、仲世の三人は、共に、忠義の心深く、學問に秀で、大學の先生

となり、或は、民利をはかつて、人々に尊敬せられた。

清麻呂は明治三十一年、正一位を贈られた。

京都の護王神社は、清麻呂を祀つた社である。

坂上田村麻呂

奈良時代末期に於ける佛教政治の弊害は著しかつたので、桓武天皇は、人心を一新し、國運の進歩に伴ふ交通に便利な地を求めて居られたが、和氣清麻呂の奏議により、延暦十三年（一四五四年）山城國葛野郡宇太野に都された。これが平安京である。左右兩京の制、條坊の區劃等は、平城京にならひ、更にそれよりも大きく、東西約四十二町、南北約四十九町にわたつてゐる。今の京都市は、主として、その左京から東部に發展した都市である。これから、平安京は、明治天皇の初年に至るまで千七十五年の間の帝都となつたが、源賴朝が鎌倉幕府を開くまで、およそ四百年の間は、政令がこゝから出たので、その間を平安朝時代といふ。

桓武天皇は、國內の統一に全力をあげられ、奈良時代の佛教政治の積弊を一掃されると共に、東北地方のアイヌ（蝦夷）を征伐して、皇威を日本全國に輝かされた。

東北地方のアイヌは、奈良時代にもしばしば亂を起したので、聖武天皇は、陸奥に多賀城（仙

臺市東北方)、出羽に秋田城を築いて、根據地として、これを征伐されたが、はかばかしい成功を見なかつた。

アイヌは、野蕃で勇猛な民で、桓武天皇の勅にある如く、「追へば鳥の如くに散じ」て、「捨て、置けば、蟻の如く集結して」襲來して來るのであつた。現在のゲリラ戰術を心得てゐたのである。

桓武天皇は、大伴家持や紀古佐美などを、征東大將軍に任じて、アイヌを討たしめられたが、皇軍は、東北の地理氣候に通じなかつたために、屢々、苦戰をした。

延暦十六年(一四五七年)、天皇は、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じ給ふた。

田村麻呂の父荀田麻呂は、弓削道鏡の奸策を見破つた人で、その功により正四位下を授けられ、ついで従三位に進み、左京大夫右衛士督を兼ねて宮廷守衛の任にあつた。田村麻呂は、そのお蔭で近衛將監に進み、少將となり、延暦十年には副將として、征東軍に加はり、その功により、擢んでられて征夷大將軍となつたのである。

田村麻呂は、身長五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、眼は蒼鷹の如く鋭く、鬚髯は金絲を編んだ如くで、物凄い腕力があつた。體重は、必要あつて重くする時には二百一斤あり、軽くしようとするれば六十四斤になつた。眼は、怒つて、ハツタと睨めば禽獸も懼伏してしまひ、笑ふ時に

は、子供も馴れ親しんだといふ。勇猛であると共に優しい心の持主であり、理想的な武將であつたに違ひない。

田村麻呂は、東北の荒蕪地に兵を進め、精悍なアイヌを各所に破り、その首魁惡路王・高丸等を、或は射殺し、或は切り殺して、膽澤城(岩手縣南部)・志波城(盛岡市南部)を築いて、皇威を大いに輝かした。

田村麻呂は、延暦二十一年、アイヌの酋長二人を連れて、堂々と平安京へ凱旋した。

この時、文武百官は、表を上つて、東北平定を賀し奉つた。

その後、第五十二代嵯峨天皇の御代に文屋綿麻呂がまたその餘黨を討伐して(一四七三年)、膽澤城に鎮守府將軍を置いて、この地方を治めるやうになつてから、東北地方は、全く、皇化に浴するやうになつたのである。

田村麻呂は、功により、従三位に叙せられ、延暦二十三年、再び、征夷大將軍となり、更に、參議、中納言、侍從兵部卿等に歴任した。

田村麻呂が宮廷を守つて居れば、その威望は、日本國中の賊を畏れさせたのである。

田村麻呂は、嵯峨天皇の弘仁二年五月、五十四才で薨じた。従二位を贈られ、山城守治郡栗柄村に土地を給はり、墓地とした。

その屍は、甲冑を着け、劍を帯び、弓箭を持つて立つたまゝの姿で、平安京に向けて葬られた。死して、なほ、皇室を守護し、都を守り、日本國を守る意味である。

この後、わが國に、事あるごとに、田村麻呂の墓が鳴動するといふ。

武將は、出征する前には、必ず、この墓に詣で、忠義を誓つたのである。

京都の清水寺は、田村麻呂の創立で、その殿堂は、彼の私邸の建物を移したものである。

また、近江の土山の田村大明神は、田村麻呂を祀つた社である。

空 海

桓武天皇は、新たなる法令を制定せられて、腐敗墮落せる奈良朝佛教の改革に力を注がれた。天皇が平安に都を遷された理由の一つは、奈良の諸寺院の僧侶達が政治に容喙するのを、防がれるためであるといはれる。

當時の僧侶は、私利私慾を恣にし、邪法を以て庶民、高官を迷はし、勝手に租税を取り立て、法令には耳を傾けないなど、横暴の限りをつくしてゐた。

この時に當り、たまゝ、空海（弘法大師）と最澄（傳教大師）との二人の高僧が出て、革新的新宗派を唱へ、宗教界の積弊を一掃した。

空海は、光仁天皇の寶龜五年六月十五日、讃岐國多度郡屏風ヶ浦に生れた。姓は佐伯氏、幼名を眞魚と呼んだ。幼い時から、穎悟のほまれ高く、遊ぶにも、土で佛像を造つてゐた。それを見て父は、彼を出家させようと思つてゐたが、外戚の叔父從五位下阿刀大足が儒學の勉強を奨めたので、經書を學んだ。延暦七年十五才の時、彼は、阿刀大足を頼つて上京し、大學の明經科に入つて、「左傳」「尙書」などを讀んだ。然し、彼は、佛教に志があつたので、この頃か、奈良の佛寺に出入りして佛教を學び、深山、幽谷を跋涉して難行苦行を重ねた。十八才の時奈良の石淵寺に入り、勤操僧都の弟子となつた。勤操は、三輪宗の碩徳であつたので、彼も三輪を學び、後、具足戒を受けた。延暦十二年二十才で、剃髮し、和泉國槇尾寺で得度し、名を教海と改めた。教海は、三輪、法相、成實、俱舍、華嚴、律の諸宗を究めた。後、如空と改め、延暦十四年、東大寺に入り、空海と名乗つた。この頃、彼は、二十二才で比叡寺を開いた。最澄に刺戟されて怠慢を戒めて難行を續けた。

延暦十七年には、「三教指歸」三卷を著した。その中で、彼は、儒教、道教、佛教の三教を比較して、忠孝の本義に達し、宇宙の眞理を悟り、人生の眞意義を會得するには、佛教が最上であることを説いてゐる。彼が、親戚知友の反對を押し切つて、儒教を棄て、佛法に入つた精神過程を知ることが出来る。

然し、この頃、空海は、年未だ若く求法の道にも煩悶が多く、只管、解脱の道を求めた。三十才の頃、夢のお告げで、大和高市郡久米寺で、珍しい大日經を發見した。彼は、この頃は、既に、日本國中の佛典は學びつくしてゐたが、この大日經だけは、どうしても理解出来ない所があつた。而も、彼の疑問を解いてくれる人が日本になかつたので、空海は、唐に渡り、一層深く佛教を學ばん事を誓つた。

延暦二十三年、遂に、彼の願望は達せられて、遣唐使藤原葛野麿かどのまろに従つて唐に向つた。この時、最澄も船を並べて行つたが、空海は彼より身分も低く年も若かつたので、待遇は悪かつた。

途中、船は暴風に遭つて三十四日の間海上を漂つた後、漸く南支那の福州に着いた。其處から四ヶ月間の支那内地の旅をつゞけて、長安（今の西安）の都に着いた。彼はこの地で名僧や學者を訪ねて教へを受けたが、中でも、不空大廣智ふくくわい三藏さんざうの高弟である青龍寺せいりゆうの慧果けいこ阿闍梨あせりに傾倒した。慧果は、當時、眞言宗第一の高僧であつたが、空海は、わづかの間に、彼の教義を悉く學んだ。慧果も空海の非凡な才能を認め、胎藏界たいざうかい、金剛界こんごうかいの眞言宗の二大祕法を授け、傳法阿闍梨くわんりの灌頂くわんちやうを許して、遍照金剛へんざうこんごうといふ名譽の號を與へた。

その後、間もなく、慧果阿闍梨が、入寂すると、空海は、インドから來てゐた高僧を訪ねて、華嚴や眞言の教を受けた。

空海の唐土在留の期間は、滿一年九ヶ月に過ぎなかつたが、その間に、佛教以外唐の優れた文化に接し、繪畫、彫刻、詩文、書法、音韻學をはじめとして、醫道藥物、儀軌典禮、土木、造筆、製墨、製紙等の技術に至るまで、殆んどあらゆることを學びつくして、平城天皇の大同元年、日本に歸つて來た。

空海は、暫く、博多に留まり、翌年入京して、携へ歸つた經文を天皇に献上した。

天皇は、彼の齋らした革新的教理に御感あらせられ、天下に眞言の教理を弘布することを許したまふた。

眞言宗は當時の新佛教であり、一言でいへば、現世は大日如來の創造したまふところであり、我々人間も大日如來の心の顯現である、従つて、我々も修業をし悟れば、佛になり得るといふ、即身成佛の教へであつた。

然し、彼の革新的教理は、他派の僧侶の排斥するところとなつたので、嵯峨天皇は、空海と共に諸宗の碩徳せきとくを宮中に召して、宗教論を戦はしめられた。この時、空海は、衆を相手に、即身即佛の教理を主張し、反對説を論破して、遂に、彼等を屈服させたと傳へられてゐる。

以來、空海の教へは、世人の信仰するところとなり、天皇には、深く彼を御信任あそばされた。空海は、初めは、和泉の槇尾寺や山城の高雄山寺にゐたが、餘りに多數の弟子や信者が押

し寄せて来て、修業の妨げとなるので、天皇より、紀州の高野山を賜はり、勅許によつて此所に金剛峯寺を建て、眞言宗の本山とした。弘仁十年、空海四十六才の時である。

弘仁十三年、最澄入寂の後、海内の信望悉く、空海に集つた。この年、平城太上皇は、空海より密乗の灌頂を受け給ひ、翌年正月には、京都の東寺を賜ひ、教王護國寺といひ、都近く眞言宗の本山とせしめられた。弘仁十四年、嵯峨天皇は淳和天皇に御讓位あらせられ、空海より灌頂をうけられ給ふた。淳和天皇御即位の後、皇室の御信仰益々加はり、天長元年少僧都に、四年大僧都に叙せられた。次の仁明天皇は、宮中に眞言院を置かれて、空海をして、天下泰平の祈禱を、せしめられたほどである。空海の説く眞言の教理は、上は天皇より、下は廣く庶民に至るまで、強く信奉されたのである。

かくて、空海は一宗の開祖として萬民に信奉され、高遠な哲理を窮明するとともに、一方では、我國民の福利の増進、文化の發達のため、あらゆる方面に、その非凡な能力を驅使して大いなる功績を残した。

彼は諸國に眞言宗を傳導する傍、橋を架け、道路を開き、並木を植ゑ、渡舟を設けなどして交通の便を計り、或は、池・堀・溝などをうがつて農業の開發につくした。就中、大和の益田池と、讃岐の萬濃池の開墾は特に有名である。彼は、更に、貧者を救ひ、病者を治療して社會

救済に盡すのみならず、京都に綜藝種智院といふ平民の子弟の爲の學校を起し、教育事業に努めた。當時、桓武・平城・嵯峨の三天皇は、相次いで學問を御獎勵遊ばされたので、官立の大學、國學の盛んなことは言ふに及ばず、和氣氏の弘文院、橋氏の學館院、在原氏の獎學院、藤原氏の勸學院などの貴族の子弟を教育する私立學校が、相前後して起つた。その爲、小野篁・都良香など多數の漢文學者が輩出したが、空海は漢文學、國學にすぐれてゐたのみならず、書道をもよくし、嵯峨天皇と橋逸勢と共に日本の三筆と稱されてゐる。「弘法筆を擇ばず」とか、「弘法も筆の誤り」などと言はれる程、彼の能筆は有名なものである。

その他、空海は、當時の繪畫、彫刻、建築に新風をもたらし、製紙、製筆、製墨の法を庶民に教へ、藥草、茶の木の植ゑ方を傳授した。

「いろは歌」も空海が作つたものと云はれる。

彼の著書は、「十住心論」「即身成佛論」等佛教に關するものは勿論、「文鏡秘府論」「性靈集」等文學に關するものなど合せて、老大な數に上り、枚擧の煩にたへない。

かくの如く、當時の我國文化の、革新的指導者であつた空海は、萬古に輝く多くの功績を遺して仁明天皇の承和二年三月二十一日の早曉、高野山の眞言道場に結跏趺坐して、六十二歳をもつて、入寂した。

後、文徳天皇の御代、大僧正を贈られ、醍醐天皇の御代、弘法大師の號を賜はつた。

菅原道眞

奈良時代から平安時代にかけての眼ざましい文化の發達は、國民生活が華美に流れる傾向を生じ、政治の方面に於ても、一つの變態的な一時期となつた。それは、天智天皇を輔佐して大化の改新に大功のあつた藤原鎌足の子孫が、平安時代に入り、非常な勢力を得て、朝廷の高位高官は殆んど皆藤原氏一門で占める有様となり、我國は、藤原氏の貴族政治萬能となつたのである。

藤原鎌足の子不比等は、大寶律令の撰修に與つて功績があり、右大臣となつた時、その娘宮子姫が文武天皇の夫人となつて、聖武天皇を生み奉つた。聖武天皇の御代には、不比等の次の娘光明子が皇后とられた。これから後、代々の天皇には、殆んど、すべて、藤原氏から皇后が立たれる例となつた。その爲、藤原氏は皇室の外戚として勢を振ふやうになつた。

不比等の玄孫冬嗣は、嵯峨天皇の朝に仕へて左大臣に進み、その娘順子は、仁明天皇の妃となつて、文徳天皇がお生れになつた。

文徳天皇の御代に冬嗣の子良房は、太政大臣に任ぜられた。娘の明子が妃となり、清和天皇

がお生れになつて、御年わづか九歳で御即位になられると、外祖父良房は攝政となつた。人臣で太政大臣となり、攝政となつたのは、良房が最初である。

清和天皇の次に御子陽成天皇がおん九つで御即位になり、良房の甥で養子の基經が攝政となつた。天皇は、基經のはからひで、位を光孝天皇にお譲りになり、ついで、御子宇多天皇が即位された。天皇は、政務の總べてを、太政大臣基經の手を経るやうにと仰せられた。これが、關白のはじめである。

斯様にして、藤原氏は、天皇御幼少の間は攝政となり、天皇長じ給ふと必ず關白となるといふ有様で、政治の實權は、藤原氏一門に握られた。

英明な宇多天皇は、政治の實權が藤原氏にあるのを歎かれ、天皇親政の實を擧げんとして御即位後間もなく、基經に拮抗し得る人物として、參議左大辨橘廣相を重用された。廣相は、文章博士で、博學多識、文章を善くし、既にこの時五十歳前後で、朝臣間に人望があつた。

然るに、基經は、廣相が重用されるのを喜ばず、故意に學說の争ひを持ちかけて、壓迫し、遂に失脚させた。

廣相は、その後、幾何もなく卒したが、基經も、間もなく、關白を辭し、薨じた。

天皇は、基經が薨じた後は、關白を置かれず、天皇親政の御理想を實現せられ、あらたに、

菅原道眞を登用せられた。

道眞は、參議（これより）是善の子で、先祖は野見宿禰（のみすくね）に出で、父祖以來儒家の名門であつた。幼い時から穎悟のほまれ高く、文章博士となり、地方に轉出して讃岐守となり、善政を布いた。その任が終つて歸京しようとした時、國人が別れを惜しんで涕泣して見送つたといふ。以て、道眞の人格が偲（しの）ばれよう。道眞は、上京中、廣相と基經の論争を聞き、書を基經に送つて直言した。このことが、天皇の知遇を得る契機となつたのであらう。

道眞は、和歌をよくし、詩は唐の白居易に劣らずと言はれ、經史に通じ、書は、空海、小野道風と共に三聖と言はれる位であり、學徳一世を蓋ひ、如何にも温厚な政治家であつたので、天皇は、厚く御信任あそばされ、重用された。

天皇の寛平六年、道眞は、遣唐使に任せられた。然るに、當時、唐は國內が擾亂してゐたし、發達した我文化は既に彼から學ぶものは殆んどなかつたので、道眞は、航海の危険まで冒して、入唐する必要はないと上表した。そこで、天皇は詔して、遂に、舒明天皇の御代から二百年間續いた遣唐使派遣は廢止された。ところが、間もなく、唐も滅亡したので、この後支那の商船に便乗して、僧侶が彼地に入るくらゐで、支那との公の交通は絶たれた。この爲に、我國の文物藝術は、一層、本來の日本的なものとなり、漢文さへ日本風のものとなり、書道の如きは、所謂上代様と稱する和風を生じた。この後、我國の文化が、漸く、獨自の發達を遂げるやうになつたのは、道眞の功績によると言はなければならぬ。

天皇の道眞への御信任は、益々厚く、醍醐天皇を皇太子とし、御讓位あらせられる時には、道眞一人に計られて、他に與る者はなかつた。

醍醐天皇も、宇多天皇の御志をつがれて、攝政を置かれず、道眞を右大臣に、基經の子時平を左大臣に任じて、善政を施し給ふた。

道眞（五十五歳）は、時平（二十九歳）よりも遙に年も長じ、學徳識見共に優れてゐる上、身を忘れて忠誠をつくしたので、天皇の御信任、愈々深く、禁中の内宴に一として、彼の與らないものはなかつた。

時平をはじめ藤原氏一門の者は、これを嫉んで、相結托して、遂に、道眞を陥れようと謀るに至つた。

文章博士にして、功臣、三好清行（よしの）の如きは、この空氣を察して、書を道眞に送つて退官を奨めてゐる。

然し、道眞は、上皇と天皇の御信任に酬ひる爲、その地位に留まつてゐた。ところがたまたま、道眞の娘が皇弟齊世親王（なほ）の妃となつてゐたことが、時平等の讒言の口實となり、彼等は、

道眞が、親王を皇太子とし、皇位に即けんとする陰謀を抱いてゐると密奏した。

そこで、天皇は、やむを得ず、延喜元年、道眞を、遽に、太宰権帥として、筑前に左遷せられた。

然し、英邁な天皇は、時平等の讒奏を信じ給ふて、道眞を左遷せられたのではなかつた。一時、道眞をして要路から避けさせ、時平等藤原氏一門の迫害と激烈な學閥の争ひから遠ざけて、彼の身を安全な地に置くためであつたと拜察される。この時、勢力のあつた時平等を壓へようとすれば、由々しい擾亂を起すかも知れない形勢であつたので、道眞は、冤罪を忍受して筑前に下り、天皇も涙を呑んで、彼を左遷し給ふたのであらう。

道眞の一族二十數人も、皆、所を異にして流された。

西下にのぞみ、

東風吹かば香おこせよ梅の花

主なしとて春を忘るな

と詠じて、かねて愛してゐた庭の梅にも名残を惜んだ。

太宰府に於て、道眞は、天を恨まず、人を恨まず、固く門を閉ざして出ず、文墨に託して、自ら遣るのみであつた。

海ならずたたへる水の底までも

清き心は月ぞ照らさん

といふ歌は、時の道眞の心を知ることが出来る。

九月十日に、恩賜の御衣をとり出し、

去年今夜侍清涼きよらうのこんやせいらいりやうにじす 秋思詩篇獨斷賜あきしほのうししほへんひとりだんちやう

恩賜御衣今在おんしのぎいまこゝにあり 此こゝ 捧持毎日拜ほうぢしてまいにちよかうをはいす 餘香よかう

といふ詩を作つて、皇恩の厚きを偲び、涙にむせんだ。

延喜三年二月、道眞は、配處に病んで、薨去した。年五十九歳であつた。

當時の人々が、如何に、道眞の死を悲しみ惜んだかは、彼の死後、色々な浮説が生じたのを見ても、知ることが出来る。

即ち、道眞薨去の翌年、四月に雷が紫宸殿を震はし、七八兩月にわたつて凄じい雷雨が続いたので、人々は、道眞の祟であるとして、五年八月筑前安樂寺に廟堂べうだうを建てた。これが、今の太宰府天満宮の起りである。

ついで、道眞を陥れた時平をはじめ藤原氏一門の者達は、何れも、譯のわからぬ病氣で死に、京都に屢々火災などがあつたので、これも愈々道眞の祟りなりとして、道眞を本官に復

し、正二位を贈り、左遷に關する書類は皆焼かれた。その後も、時平の娘達が相次いで死に、時平の一味が落雷の爲に死ぬなどの事があつたので、人々は、益々、道眞の祟りを怖れた。天皇は、その子孫を優免し給ひ、時平の弟の忠平の如きは、大臣となると、大いに安樂寺の廟を祭つた。

朱雀天皇の天慶五年に至り、託宣あり、はじめて、京都北野に天滿宮の祠が建てられ、朝野の信仰がますます加はつた。天滿天神の勅號を賜はり正一位太政大臣に進められたのは、一條天皇の御代であるといふ。

人臣にして、官幣をうけ、國家の崇祀と國民の尊信の厚いのは、道眞を以て第一とすると言つても過言ではない。

道眞には、「三代實錄」、「菅家文章」、「菅家詩集」、「新撰萬葉集」、「類聚國史」等の名著があり、何れも、彼の非凡な學識才能を窺ふことが出来るが、就中「類聚國史」の如きは、我史學史の中でも最も重用なものであり、且つ、道眞の醇乎たる國體觀を知ることが出来る。

藤原時代の文化

醍醐天皇と村上天皇は、親しく政を聞こしめされたので、御世は泰平で文化は榮えた。世に

延喜・天曆の治と申してたゞえ奉るのである。

然し藤原氏は、菅原道眞を退けた後も、盛んに他の名門・舊家を排斥して、益々、一門の勢力を加へ、皇室の外戚として攝政・關白その他の高官・榮職を獨占する有様であつたが、やがて一門の間に勢力争ひを生じ、結局、忠平三世の孫道長が出るに及んで最後の勝利を得た。道長は、一條・三條・後一條三天皇の御代三十餘年にわたつて政治の最高樞機に與り、その女は相次いで、一條、三條、後一條の皇后に立ち、外孫に當らせられる皇子御三人まで皇位に即かれた。

道長の子頼通も、父について、攝政または關白たること五十年であつた。

かくて、藤原氏の威權は並ぶものなく、榮華は絶頂に達した。

この世をばわが世とぞおもふ望月の

かけたることなしと思へば

といふ道長の歌は、實に、彼の得意の絶頂にあることを現はしてゐる。

そのため、藤原氏一門をはじめ、貴族の生活は、著しく華美となつた。彼等は、寢殿造と稱する遣水・前裁の麗しい庭園にのぞんだ宏壯な邸宅に棲み、一夫多妻の風があつた。男は、禮服としては東帶・直衣、常服には直垂・水干をつけ、女子は、禮服には十二單、常服に袿姿が普通とな

り、四季折々の配色に意匠をこらした。彼等は、斯様に優美な姿で、宮廷、貴族の私邸、社寺に集まり、夜をこめて篝火をたき、詩歌・管絃・圍碁・雙六等の宴遊・娯樂に耽つたのである。當時の最も注意すべき文献「梁塵秘抄口傳集」には、「東三條にて、船にのりて、人々つどへて、四十餘日、日の出る程迄、夜毎に遊びき」とある。斯様な華やかな生活の爲に、彼等は、學識もなければならず、詩歌、管絃にも長じてゐなければならなかつた。而も、彼等の精神生活の根柢には、陰陽道の迷信と運命觀が深く浸潤して居り、また、一條天皇の御代に僧源信、(惠信僧都)が體系付け、唱道した淨土信仰が盛んであつた。

こゝに、艶麗纖細で頹廢的な藤原時代の文化が生れた所以である。藤原時代の文化は、さきに宇多天皇の御代、菅原道眞の上奏により遣唐使の派遣が中止となつたので、飛鳥以來續いた大陸模倣文化とは可なり違つた、我國独自の文化として、發達したところに、一つの特色がある。

さきに、奈良時代から平安時代初期にかけ、漢文學の盛んであつた時には、國語を寫すにも漢字を用ひたが、色々不便なことが多いので、おのづから簡便な片假名や平假名が、誰からともなく、自然に案出されて來た。そのために、自由に假名文字で、思想、感情を表現することが出来るやうになつたので、國文學が非常に發達した。それと共に、これ迄、兎角、漢文學、

漢詩に押され氣味だつた短歌が、非常な勢ひで發達した。在原業平、大友黒主、小野小町、僧正遍昭、文屋康秀、喜撰法師などの所謂六歌仙があり、紀貫之、凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑は、勅を奉じて、初の勅撰和歌集である「古今和歌集」を撰し、源順、大中臣能宣、清原元輔、紀時文、坂上望城の所謂「梨壺の五人」は、「後撰和歌集」を撰し、更に、曾根好忠、源經忠、源俊賴、能因法師、西行法師、藤原俊成、慈鎮等の名家が輩出して、或は勅撰集を撰し、或は家集を著はした。而も、當代の歌人は、男ばかりでなく、紫式部、大貳三位、清少納言、和泉式部、小式部内侍、伊勢大輔、赤染衛門などの閨秀歌人が澤山あらはれた。これは、藤原氏が、その女を宮中に納れて、勢力を張る爲に、才學ある女子を選んで、その女に侍女として附ける習はしであつたから、文藝にはげむ才女が多勢輩出したのである。

これ等の女性の著書のうち、清少納言の隨筆集「枕草子」、紫式部の小説「源氏物語」、兼家の妻の「蜻蛉日記」、和泉式部の「和泉式部日記」、兼家の妻の姪の紀行「更科日記」が、有名である。中にも、「源氏物語」五十四帖は、當時の宮廷生活や貴族生活を艶麗な名文でこまごまと描いて、平安時代小説の中心をなすものであり、且、日本文學史上有數な作品である。これを、世界文學史上で見ると、歐洲に於ける寫實小説の初と言はれる伊太利のボツカチオの「十日物語」が書かれたのは、「源氏物語」に遅れること約三百五十年であり、大長篇小説として有名な

支那の「水滸傳」も亦、一世紀以上後に書かれたものである。歐洲で最初の女流小説家と言はれるフランス生れの詩人マリ・ド・フランスは矢張り、紫式部より二世紀或は三世紀後の人である。然らば「源氏物語」は、世界で最も古く書かれた傑作小説であると言はなければならぬ。

その他、この時代には、紀行に紀貫之の「土佐日記」、歌物語に「伊勢物語」「大和物語」、傳奇物語に「竹取物語」「宇津保物語」「落窪物語」、歴史物語に「大鏡」「榮華物語」、傳説物語に「今昔物語」など、國文學史上注目すべき作品が續々と輩出した。

漢文學に於ても、菅原道眞以後は、「和魂漢才」と稱して、我國固有の和歌、和文に長じた一方、支那人に劣らない漢學の智識を持つて、日本化された漢文を書いた。

紀長谷雄、三善清行、菅原文時、源順、兼平親王、具平親王、藤原公任、大江匡房などが有名な漢學者であり、「和漢朗詠集」「本朝文粹」「續本朝文粹」「朝野群載」「江家次第」などの名著がある。

書道に於ても、空海、菅原道眞と、次第に唐風を棄て、和風となつてゐたが、小野篁の孫道風に至つて所謂上代様があらはれ、書風は全く我國獨特の趣を得て、發達するやうになつた。道風の書は、王羲之より出て、羲之を眞似ず、典雅溫潤のうちに雄勁莊重の趣を湛へ、實に、我

國書道劃時代的のものである。彼に次いで、藤原佐理、藤原行成が出てゐるが、世に、道風、佐理、行成を三跡と稱してゐる。

この時代には、草假名といつて草書を思ひ切つて崩した平假名が出来、日本獨特の美術的な書體となつた。歌人の紀貫之は、また假名文字の大家であるといはれる。

文化の日本化は、美術、建築に於ても著しく見られる。

建築では、これ迄餘り重用視されなかつた邸宅建築が著しい發達をして、貴族は、寢殿造を建て、住んだ。寢殿造は、泉水、庭園の配置をよくし、巧みに自然と人工の美を一致させたもので、優美で輕快な、獨特の建物であつた。

また、この時代の寺院建築で、現存してゐる宇治平等院の鳳凰堂をはじめ、醍醐寺の五重塔、法隆寺の講堂、淨瑠璃寺の本堂、興福寺の北圓堂、大原極樂院の本堂、中尊寺の金堂を見るに、奈良時代にあつた唐風の嚴正なシンメトリのプランを破つて、變化多く、趣味のある外觀を呈し、内部には、きらびやかな裝飾をほどこした。

建築と密接な關係がある彫刻も、單なる唐土模倣を棄て、著しく日本趣味のものとなつた。製作される佛像は、天台眞言のものも盛んであつたが、淨土教の普及と共に阿彌陀佛が多くなつた。はじめは、一木彫といつて、一つの佛像の手も足もすべて一本の木で造つてゐたが、

次第に、寄木造りで、繊細な彫刻をするやうになり、色彩塗金を偏重する傾向を生じた。

彫刻家にも、これ迄のやうな佛師の他に、専門の彫刻家が輩出した。定朝は、その巨頭とされ、定朝風とさへ言はれる繊細華麗、金色燦爛たる彫刻が一世を風靡した。中にも、平等院鳳凰堂の阿彌陀如來、法界寺の阿彌陀如來、淨瑠璃寺の九品阿彌陀佛などは、その代表的なものである。

繪畫に於ては、前代からの宗教畫は、矢張り盛んであつたが、更に、この時代に於て、貴族の邸宅を飾り、上流の人々の玩賞となる歴史畫、風俗畫とも見るべきものが現はれた。

宗教畫には、裝飾的な醍醐寺壁畫、鳳凰堂壁畫、法界寺壁畫や、佛畫的な高野山二十五菩薩聖衆來迎圖、法華寺來迎圖、高野山佛涅槃圖、東京博物館普賢菩薩、松尾寺普賢延命像、神護寺釋迦坐像等々枚舉に遑ない程ある。これ等は、前代と異り、自由な艶麗な肉色の線で描かれたり、金銀縁青などで極彩色を施されてゐる。

また、巨勢金岡なる天才が現はれ、宗教畫から獨立して、宗教とは關係なく、自然の風物、人物などを描く、倭繪を創作した。所謂日本畫の初である。倭繪の各派では、各自の作品を展覧品評する「繪合せ」が行はれ、「歌繪」「繪卷物」などが盛んになるにつれ、繪畫は進歩して、巨勢派、託摩派のほかに、藤原基光が、如何にも日本的なる土佐派を起した。倭繪の遺品とし

ては、藤原隆能の「源氏物語繪卷」をはじめとして、鳥羽僧正の「鳥獸戲畫卷」「志貴山縁起繪卷」などが特に有名である。

建築、繪畫と共に、工藝も、この時代の人々の淨土思想に裏付けられ、藤原式貴族趣味のものとして發達した。宮中や貴族の邸宅の調度には、手箱、硯箱に至るまで、毛彫の繊細な技巧を施し、或は蒔繪とし、或は螺鈿をはめ、金粉銀粉を散りばめるなど裝飾の限りをつくした。染織工藝にも、夜宴に喜ばれるやう、華美な色彩や圖案で、金銀の箔や夜光珠が織り込まれた。梵鐘にも、「音は三井寺、銘は神護寺、形は平等院」と云はれる日本三名鐘が造られた。

また刀劍鍛冶にも、有名な備前鍛冶、備前長船鍛冶、三條小鍛冶などが出て、世界に獨特な日本刀を造り始めた。

鎌倉幕府開始

源平二氏の盛衰

大化の改新は、土地の私有を禁じ、國有としたのであつたが、自分で開墾した土地、勳功により賜はつた土地、神社・寺院に寄附された土地は、特に、私有を許された。奈良時代から平安朝時代に及び、これ等の私有地は次第に増加した。殊に、平安朝の中頃に至つては、藤原氏をはじめ、地方の豪族が、競うて土地を私有した。その結果、朝廷に屬してゐる土地が、これ等の私有地の百分の一にも足りないといふ有様にさへなつた。これ等の私有地を、しやうみん莊園と呼んだ。

莊園は、國司の支配をうけず、租税を納める必要がなかつた。そのため、莊園の持主である貴族は、益々、富裕になるに反して、政府の収入は著しく減少して、財政困難となり、綱紀が振はなくなつた。

この時にあたり、藤原氏一門が朝廷の高位・高官を占有してゐたので、才能があり、實力を持ちながら立身出世の道を得ることが出来なかつた人々、殊に皇族でしんせき臣籍に降下された方々

や、名家、貴族の不平家や革新派の人達は、都を出て、地方の國司となり、そのままそこに土着して、土地を私有し、勢力を張り、夫々割據して、豪族となつた。

而も、當時、絢爛たる文化の恩恵を享けたのは、少數の貴族だけであつて、國民の大部分を占める庶民は、殆んど奴隷に近い、みじめな生活をしてゐた。延喜・天曆の泰平な御代にさへ、都の大路小路には行倒れの病人や餓死人が毎日のやうにあつた。都でさへも、この有様であつたから、地方での庶民の窮乏は想像に餘りある。この結果、火附、盜賊、強盜、海賊などが盛んに横行するやうになつた。然るに、中央政府の腐敗と共に、地方政治はひどく亂れて、警察力を闕き、兵制も既に廢れてゐたので、盜賊の横行を鎮壓する兵力などは、何處にもなかつた。

こゝに於て、地方の豪族達は、自分の土地・財産を自力で守るため、庶子分家、家人奴僕を「家子」「郎黨」と稱して配下に率ゐ、弓馬の道を練り、武力を蓄へた。かくして、いはゆる武士が起つたのである。京都に住む貴族達は、その莊園を守るために、これ等の武士と結んだ。生活は苦しんでゐた地方民は、争つて、武士の保護をうけ、その配下となつた。その爲、武士は次第に勢力を加へ、力強い武士團を結成した。中にも、桓武天皇から出た桓武平氏、清和天皇から出た清和源氏が、最も勢力を占めて行つた。

桓武平氏は、桓武天皇の皇子葛原親王の御孫高望王が、宇多天皇の寛平六年に平高望となつて、上総介に任ぜられて、東國に下つたのが始りである。その子國香は、常陸大掾に、良將は鎮守府將軍を経て下總守になつた。

良將の子將門は、生來頗る勇敢であつた。彼は、はやくより京都に出て、攝政藤原忠平（時平の弟）に仕へてゐたが、檢非違使になることを望んで聽かれなかつたので、憤然として東國に歸つた。間もなく、一族間の私闘にまき込まれ、伯父國香を攻殺し、亂を起し、遂に天慶二年、下總の猿島（茨城縣）に僞宮を建て、これに據り、自ら「平新皇」と稱した。これと殆んど同時に、前伊豫掾藤原純友も伊豫によつて、海賊を率ゐて叛き、瀬戸内海を荒しまはつた。朝廷では、藤原忠文を遣はして、先づ、將門を討たせたが、その到着に先立つて、國香の子貞盛が、下野の豪族藤原秀郷と共に將門を討滅して、父の仇を報じた。また、伊豫へは、小野好古と源經基が朝廷の命を受けて行き、純友を討ち平げた。これが、世に言ふ承平・天慶の亂である。

この亂に功を建てた平貞盛と源經基は、戦功によつて、次第に朝廷に重んぜられた。武士が、いよく、擡頭して來たのである。

源經基は、清和天皇の第六皇子貞純親王の長子であつたので六孫王と呼ばれ、朱雀天皇の承

平年間に武藏介として東國に下つた清和源氏の始祖である。その子滿仲もまた、常陸介・武藏守・陸奥守・鎮守府將軍となつた。大江山の酒顛童子の鬼退治をしたといはれる賴光はその子で、賴光の弟賴信は、平良將の弟良文の孫忠常が下總に據つて叛いたのを討滅した。賴信の子賴義、その子義家は、第七十代後冷泉天皇の御代に、安倍頼時・貞任の父子が陸奥で叛いたのを鎮めた。所謂、前九年の役である。

義家は、更に、第七十二代白河天皇の御代に、清原家衡と叔父武衡が、出羽に於て叛いたのを討つた。後三年の役である。

これ等の叛亂鎮壓に源氏は、次々と大捷を博したので、東國の武士は、その武勳を讃し益々その配下についた。殊に、彼等東國武士の崇拜の的は、八幡太郎義家であつた。

義家は、幼い時から濶達果斷、弓に長じて、戦がある度に、父に従つた。前九年の役には、彼は、十七歳の若武者であつた。彼は、東國を發つて幾山河を越え、勿來の關にかゝつた時、折からの風に散る櫻を見て、馬を止め、

吹く風を勿來の關とおもへども

道もせに散る山ざくらかな

と歌つて、東國武士の風懷を見せた。而も、一度戦へば鬼神の如く、大風雪中、人馬凍飢す

る中で、僅か六騎となるまで、奮戦して、貞任の軍を走らせたのである。衣川の柵に貞任を逐ひ、まさに矢を放たうとする時に、彼が「衣のたてはほころびにけり」と詠じたのに、貞任は、「年をへし糸のみだれの苦しさに」と應酬したので、その心の優しさに愛つゝ之を許したと云ふ襟度も持つてゐる。戦後、藤原頼通の邸宅で、前九年の役の話をした時、大江匡房が、「好漢惜しむらくは兵法を知らず」と言つた。義家の従者が、これを聞いて憤慨して、義家に告げたところ、義家は怒らないのみか、匡房について兵法を學んだといふ。後三年の役に、義家は頗る苦戦したが、彼は始終部下の將士を尙はりながら戦つた。亂後、朝廷に奏上して部下の爲に賞與を願つたところ、朝廷では、これを私闘なりとして聽許されなかつた。そこで、義家は、止むを得ず私財を抛つて、部下の將士に頒け與へた。

されば、東國の武士は、いよ／＼その恩に感じ、「京都に背くも、源氏に背く勿れ」と揚言するほど源氏に服した。

一方、平氏も、貞盛五世の孫忠盛が、しばしば西南方面の叛逆者や瀬戸内海方面の海賊を平定して、西國武士の信頼を得た。

こゝに、騎馬戦に秀れた東國武士の棟梁としての源氏と、海上戦に巧みな西國武士の棟梁としての平氏が、地方の二大勢力となつて、中央進出の機會を待つことになつたのだ。

地方に於て、かゝる新興勢力が擡頭してゐるにもかゝらず、中央に於ては、依然として、藤原氏の專横が續けられてゐた。

第七十一代後三條天皇は、いたくこれを憤り給ふて、御即位の後は、親しく政をお執りになつた。天皇は、官制の改革、莊園の整理など、種々弊政の改善に力を竭されたが、御在位、僅か五年で、御子白河天皇に御讓位あらせられた。天皇は、御讓位後も、新帝を輔けて、政を聽かれる御志であつたが、間もなく崩御あらせられた。

白河天皇は、剛毅にましまし、後三條天皇の御志をついで、はやく御位を御子堀河天皇に譲り、爾後、凡そ四十年間、上皇として院におはして、政を執り行はせられた。これを院政といひ、爾後、院政は御代々の慣例となり、天皇の詔勅よりも、院宣で政事が行はれるやうになつたので、攝政・關白は、たゞ名ばかりとなつて、藤原氏は殆ど勢力を失墜した。

院政を始められた理由は、天皇の御位にあつては、儀式典禮が多く、政は故格に従つて見そなはれなければならなかつたので、御讓位して、御自由な御身で、門閥を問はず新進の人材を登庸して、政治の刷新を行ひ、政治の實力を、藤原氏から奪ふためであつた。

然し、院政は、天皇親政でなく、上皇實權政治であつて、矢張り、一の變態政治であつた。

保元・平治の亂は、四ヶ年の間に相次いで起つたが、この二度の戦は、頽廢した貴族政治時代の清算であり、同時に、源平二氏が中央に進出し、政權與奪は、武力によらなければ解決されないといふことを如實に示したのであつた。

が、平治の亂に、源義朝が斃れたので源氏は衰へ、亂後、平氏は大いに榮え、清盛は官位しきりに進み、六條天皇の御代には、武士としては最初の從一位・太政大臣にのぼり、武士として初めて、政治の實權を握つた。彼は、藤原氏の例に倣ひ、第八十代高倉天皇が即位あらせられると、女徳子（建禮門院）は中宮となり、やがて、安徳天皇を生み奉つた。かくて清盛は、皇室の外戚となり、政權を恣にした。彼の長子重盛は内大臣左近衛大將となり、次子宗盛は權中納言右近衛大將となり、一族一門ごとく、高位・高官にのぼり、數多くの莊園を領有して、藤原氏の全盛期にも劣らぬ榮華と專横を極めた。

かくて、後白河法皇の院政も、たゞ名のみとなつたので、法皇の近臣藤原成親は、これを憤り、僧俊寛等と平氏を倒さうと謀り、鹿ヶ谷に集つて密議を凝らしてゐた。が、その陰謀が事前に平氏に洩れて、或は殺され、或は流された。この時、清盛は、後白河法皇が、この謀に與り給ふたと稱して、法皇を幽し奉らうとしたが、重盛の諫言により、一時、思ひ止まつた。然し、間もなく重盛が薨じると、つひに、非行を遂げ、安徳天皇をわづか御年三歳で御位に立て

奉つて、專横の限りをつくした。

然し、「平家に非ざるものは人にして人に非ず」といふやうに、傍若無人に私利私慾を圖る政策には次第に人心が離反し、皇族、貴族、武士の反感が高まつて來た。

この時に當り、源氏の一族源頼政は、後白河法皇の第三皇子以仁王を奉じ、王の令旨を諸國の源氏に傳へて、平氏を滅ぼさうと騒起したが、機未だ熟せず、宇治の戦に死し、王も薨せられた。

かくの如く頼政自身は敗れたが、これより、諸國の源氏が王の令旨を奉じ、頼政に呼應して打倒平氏の兵を擧げるに至つた。

源頼朝の源氏再興

源義朝は平治元年十二月、宿敵平清盛と戦つて利あらず、明けて永曆元年の一月四日に敗走の途上を尾張の國野間の里で殺された。

源頼朝は、この義朝の第三子である。彼が伊豆に流される前後の事情は、平治物語や平家物語などの演史類の書冊で見ると、實録の書には一向出てゐない。

頼朝は當時十四歳だつた。平宗清の手に捕へられて、館に閉ぢ籠められ、討たれた父や斬ら

れた兄のために法華經の要品でも誦してゐる少年頼朝の姿は、人間の運命といふものを目のあたりに見せて居るやうで、如何にも哀れをそよるものがあつたに違ひない。小刀と檜木が欲しいといふので、何か子供の手遊びでもするのかと思つて訊くと、父義朝を始め一族の菩提を弔ふため卒塔婆でも刻みたいといつて泣く。

年齢に似合はぬ頼朝の優しい心根に、池ノ禪尼は、すつかり泣かされた。禪尼の息子頼盛の家來の宗清が、「亡き左馬ノ助殿によう似てござる」などいふので、彼女は堪りかね、重盛を通して清盛に命乞をしてやつた。池ノ禪尼は清盛の繼母で左馬ノ助（家盛）の實母である。

清盛も、「もし平家の運命すでになくば、頼朝一人殺さばとて——」、といふ氣になつて斬首を思ひとゞまり、永暦元年三月十一日、伊豆に流すことになつた。頼朝一人が、後年平家の運命を左右しようとは、神ならぬ身の知る由がなかつたのだ。

池ノ禪尼のところへ暇乞ひに行つた頼朝は、「慎んで穩やかに世を経たまへ」と教訓された時には、さすがに彼も二十年後に、天下を源氏の白旗風に吹き靡かさうなどは、思ひも寄らなかつたに違ひない。彼の身を氣遣ふ側近の者が、「御髮惜しませ給へ」といふのにも、「御出家あれ」といふのにも黙つて頷いてゐるだけであつたといふが、伊豆に行つてからも、流人の所在なさからでもあらうが、日に千百遍の佛名を唱へた。千遍は父祖の菩提の爲、百遍は父義朝と

共に非業の死に方をした鎌田政家のためである。そして伊豆山權現や或は箱根權現への參詣も缺かさなかつたのである。

この頼潮流謫の地といふ伊豆の蛭島は、別に絶海の孤島ではない。狩野川に沿ふた今の四日市村の地に當り、草蛭が多かつたから此の地名が出来たといふ。とにかく雲烟蕭條たる邊陲の地だつたことは想像できる。

頼朝は此の地で二十年の多感な青年時代を埋れてゐたわけである。尤も吾妻鏡に散見するところを見ても、彼が伊豆に下される時には、二三の志の厚い縁者が人を附けて送らせてゐるし、乳母の比企の尼夫妻のやうに、武藏比企郡の所領に下つて二十年間も頼朝の背戸をおとなうたといふやうな篤志の者もあつて、配所の頼朝に對しては音問や扶持は絶えなかつたやうだ。それに監視の任に當る伊東や北條も元來が源氏の黨人だつたから、同じ流人生活でも鬼界ヶ島の俊寛のやうな惨めなものではなかつたのである。

紀伊野田文書といふのが最近になつて發見され、その中の「讀取不能奉公初日記」といふのは、佐々木定綱や家綱兄弟が謫居の頼朝に任へた有様を、かなり詳しく記載してゐる。

頼朝は氣が向くと、時々伊東にゐる伊東祐親の許を訪れた。そこは山を負ひ海を控へた勝地だし、何の風月もない蛭島とは違つて心慰むものがあつた。

殊に祐親の三女との戀愛で男の子を擧げてからは、流人頼朝の生活にも漸く春が訪れたかの感がある。かうして、愛する妻子を持ち、妻の兄に當る義理堅い伊東祐清や、忠義無類の郎等の中で日を送る頼朝の現在は、もはや決して不幸とはいへない。

かうして、さゝやかではあるが、平和な愉悅に浸つてゐる彼は、池ノ禪尼の教訓を生涯守つて行けさうな氣になるのであつた。源家重代の「源太初着」の鎧を着し髭切丸の太刀を振つて、天晴れ十三歳の初陣に鬼武者と謳はれた平治の戦の想出が、何か遠い昔に他人の身の上についた事のやうに思はれもしたであらう。

しかし、また一方で、太郎定綱が親父の秀義ゆづりの手際で矢を知いてゐるのを見てゐると、やはり若い頼朝の血は湧き立つたと思ふ。

(定綱も盛綱も何のための此の辛苦ぞ、まさか東國の邊陲に偷安の日を送るこの我に仕へて朽ち果てる所存ではあるまい)。そして、父義朝の無念の最期の様子や、今日の平家の繁榮を見せつけられながら忍んでゐる落魄した源氏の家人共の苦衷が、莽々と彼の胸に迫つてきたことだらう。

だから、八幡太郎の嫡流、名譽ある源氏の棟梁としての自覺から、武藝もやはり、表面はともかく、並々ならぬ心懸けで勵んでゐたと思ふ。でなければ、後年石橋山で百發百中の射術を

誦はれる筈がないのである。

尤も源氏の武藝は傳統的である。頼朝から五代前の八幡太郎義家は、奥州前九年の役に二十に満たぬ若武者ながら、箭に残つた八本の矢で、雪中を追ひ迫つてくる十二人の敵兵を射墮し、都にまでその勇名を謳はれた。その後阿部貞任が滅んでからのこと、或る日虜囚の清原武則が弓勢を拜見したいと請ふと、義家は堅甲三領を立木に吊し、わざと弱弓をとつて之を射ると、矢は三領を貫いて立木に突き立つた。武則は、「これ神明の變化なりや」といつて驚歎したといふ。頼朝の叔父鎮西八郎爲朝の強弓はあまりにも有名だし、源三位頼政は鶴を射て朝恩を蒙つたと傳へられてゐる。

しかし、頼朝をして、この源家傳來の武藝と武略を發揮させるための機運は、まだ到來しなかつた。源平盛衰記その他の、荒法師文覺が、父義朝の髑髏を懐中してきて、頼朝をアジつたといふ記事は、誇張附會の嫌ひはあるが、周圍の史實を綜合して見ると、全然形跡のないことでもないのである。しかし、その髑髏が、たとへ眞物であつたにせよ、そんな事で天下の大事を決心する頼朝ではなかつたと思ふ。

京都の三善康信から月に三度の音信は、何を傳へたかは知らないが、平家の暴狀や朝廷の御意辨は、文覺の快辯を俟つまでもなく頼朝は熟知してゐる筈だ。それに比企能員を初め、土肥・

岡崎・足立・狩野・三浦等の家人の中には、ひそかに馬を「助殿の御館」に繋いで、それとなく源家再興を慫慂する老巧の士もあつたであらうし、源氏の衰退を歎き平家の横逆を怒つて謀叛を力説する少壯輩もあつたに違ひない。

吾妻鏡などを見ると、頼朝は人に物を問ふ事が好きで、僧の西行に弓馬の故實を聞いたたり、大庭景義に保元の経験を語らせたりしてゐるが、かうした好學の風も流人時代から發してゐて、時に訪ふ者があれば迎へ、語る者があれば聴く彼である。文覺に吹き立てられて、乾坤一擲の危険を敢てするやうな頼朝ではなかつた。

ところが、茲に頼朝二十年の儉安を破つて身内に眠つてゐた東國武士の荒々しい血に目覺め、蹶然たる勇猛心に奮起させるやうな主觀的條件と、客觀的情勢とが、目の前に展開したのである。

伊東祐親は京都六波羅勤務を終へて、我が家へ歸つて見ると、三歳ばかりの男の子が庭で花を摘んで遊んでゐた。怪んで問ふと、これが自分の留守中に、娘と頼朝との間に出来た子供だといふ。

頑固一徹の祐親は、「世に無し源氏を弔にして、平家の咎を受けては我が家の滅亡目のあたりだ」といふので、その子を淵に沈め、娘を江間某の許に嫁がせてしまつた。頼朝もまた身邊の

危険を感じて、蛭島に遁れ歸つたが、その途中、たとへ東國は叶はぬまでも伊豆一國の主となつて、此の讐を復さう、と誓つたといふ。

一たい頼朝ほど肉親的に見て不幸な人間はすくない。彼が天下を取るまでには、弟の義經を殺し、範頼を殺し、叔父の行家、従兄弟の義仲、弔の義高、それに甲斐源氏の間も二三人殺して、宛然血族殺戮圖繪を繰りひろげた感がある。世の判官最良なる者が、口を極めてその殘忍さ、冷酷さを責めるのも一應は尤もである。

もちろん彼は、武家の統領として信賞必罰の態度で臨まなければならなかつた。しかし彼をして、よく私情を殺し得る忍人として育て上げたものは、何としてもその環境である。

殊更愛情を注いでくれた父義朝は、事もあらうに累代の家人長田父子に謀殺された。名譽ある源氏の嫡流は、一朝にして東國の邊陲に青春二十年を流人として送らねばならなくなつた。しかも、この流謫生活中に、春光漸く闌なれば北枝も花開くといつた、さゝやかながら平和な愉しい戀愛の一ページは、愛人の父であり、愛兒の祖父であり、同時に源氏重代の家人である伊東祐親入道のために無殘にも引き裂かれた。もはや彼の心の奥底には、(何の肉親ぞや、何の累代の家人ぞや)、といつた氣持が氷のやうに凝結してゐたことであらう。

とにかく、この伊東での出来事は、頼朝の心に一轉機を與へた。祐親入道への復讐は、同時

に平家への復讐である。かうして攪き立てられた荒々しい彼の血は、諸國源氏の動搖と以仁王の令旨をモメントとして、戦闘へと飛躍したのである。

頼朝が以仁王の令旨を受取つたのは、治承四年四月二十七日である。これは叔父の源行家が山伏に姿を變へて諸國源氏の間を持ち廻つたものである。

五月十日には下河邊庄司行平が頼朝に使し、源三位頼政舉兵用意の事を報じた。しかし、宇治河畔に擧つた打倒平氏の第一聲は、以仁王と頼政の敗死に終つた。けれども天下動亂の兆は已に澎湃たるものがあつた。

六月十九日には京都の三善康信が、例のごとく急使を頼朝の許に派して、「平氏は此度以仁王の令旨を受けた諸國の源氏を追討しようとしてゐる。嫡流たる助殿は、危急を奥州に避けさせ給へ」と注進した。

しかし頼朝は、平家からの追討軍が身邊に迫る前に、機先を制して伊豆から進出する以外に途はないと肚を決めて、六月二十四日には安達藤九郎盛長を遣して累代の家人召集に努めた。そして先づ、出陣の血祭りにと目指したのが、山木判官平兼隆である。

もはや此のころは、北條時政も女の政子に繋がる縁で、頼朝とは舅婚の間柄になつてゐた。

政子は父の命で、一旦は心ならずも山木判官兼隆に嫁ぐことになつてゐたが、婚儀の當夜になつて、宴席を脱出して伊豆山の密嚴院にゐる頼朝を慕ひ、日金山（十國峠）七里の山路を越えて遂に愛人の懐に飛び込んだのである。

政子は、伊東祐親の女のやうに、愛兒を奪はれ愛人との仲を割かれた揚句、心にもない男の許へ黙つて嫁して行くやうな、涙のヒロイン型の女性ではなかつた。頼朝も、もはや美しくても弱いだけの女性には、懲りてゐるに違ひない。

それはともかく、山木判官平兼隆といふのは元來平家の徒だが、流されて伊豆に下り山木の丘に館を構へてゐた。それが、いつの間にか勢力を得て伊豆一州の成敗命令は彼の掌中に歸するに至つた。従つて北條・伊東の二豪も狩野・宇佐美の諸氏も、却つて此の一流人山木兼隆の聲息を窺はねばならないといふ始末であつた。

蛭島の頼朝も、邱上の山木の眼光に絶えず身を曝してゐなければならなかつたのだ。殊に頼朝にとつては、政子に關して戀敵だし、首途の血祭としては、絶好の目標だ。すでに山木館の明細な見取圖までも出來上つてゐた。

軍議は決して、八月十七日を以て山木攻と定めた。頼朝は特に頼みとする岡崎義實とその子餘一義忠に命じて、土肥實平を伴れて來させた。

十三日になつて、佐々木定綱は甲冑を取りに郷里まで行きたいと暇を乞ふたので、頼朝は此の期になつて心許ない思ひがしたが、必ず十六日に歸参するといふ約束で許した。ところが、約束の十六日になつても佐々木兄弟(太郎定綱・次郎經高)は姿を見せぬ。頼みに思ふ彼等が居なくては明十七日拂曉(ふりげ)の山木攻は軍勢不足で決行は覺束ない。

佐々木兄弟の父義秀は近江源氏の錚々たる者だが、平治の亂後武藏に流寓して、澁谷重國といふ平家恩顧の士と縁組までしてゐる。頼朝は佐々木兄弟の一旦の志に感じて大事を打明けたが、平家に密通するための今日の不參だとすれば、萬事休矣、だ。肉親や譜代の頼み難さを幾度か見て來た頼朝である。心痛のために氣も狂はんばかりで、恐らく一睡もしないで十七日の朝を迎へたことだらう。それだけに十七日の未の刻(午後二時頃)泥にまみれて馳せ歸つて來た佐々木兄弟の姿を見た時には、夜來の傷心は歡喜と變り、頼朝は萬感迫つて涕泣したといふが、宜なる哉である。

佐々木兄弟は洪水のために遠く廻り道をしたから歸参が遅れたのである。それにしても、十八日は頼朝が幼少から信仰してゐる正觀音の忌日として、争ひ事をしないことに定めてあるから戦争はできない。しかし十九日まで延ばせば、既に大事が洩れる處がある。佐々木兄弟は歸つて來たし、何うしても今夜の中に夜討を懸けようといふ事に決つた。

いよ／＼出發といふことになつたが、従ふ者は三十人足らずの家の子と、雜兵合せて八十五人の總勢である。源氏の嫡流として、關東八ヶ國十萬の兵を其の麾下に率ゐることも出來やう身を、頼朝にすれば如何にも感慨深い出陣だつたに違ひない。しかし此の夜は、東國はおろか天下を統一して、武家政治の基礎を確立するための輝かしい首途の朝となつて明けたのである。

山木は要害の地ではあつたが、當夜は三島神社の祭禮で、家來たちも大てい出かけ、黃瀬川の宿あたりに遊び浮かれてゐたのであらう。いかにも手薄であつた。

北條館の縁先に出て、勝利を合圖の炎々たる火の手を望む頼朝の腦裡には、既に來るべき石橋山の作戦が計畫されてゐたと思ふ。

石橋山出陣は、山木攻から二日後の二十日と決つた。寡兵であるだけに、速戰即決主義に出なければならぬのだ。

このときも、味方は北條時政親子・安達盛長・土肥實平・佐々木兄弟等に、從子郎黨雜兵を入れて漸く三百に足りない小勢である。平治の昔に、近江路の雪中で生死を共にした源氏恩顧の勇士たちも、今の平氏の繁榮を目のあたりに見れば、やはり逡巡してゐたのだらう。頼みに思ふ三浦義澄や和田義盛以下の三浦の徒も、遠路のためか海上風波に遮ぎられてか、まだ參加

してはるなかつた。

併しとにかく、寡兵ながら以仁王の令旨を源氏の白旗の横上に付けて、本格的に平氏追討の陣を石橋山に張つたのが、治承四年八月二十三日である。

石橋山の地形は、丁度箱根山塊の一端が延びて海に迫り、海岸から急に崛起してゐるので、それほど峻しくはないが山裾と海との間の通路は狭隘になつてゐて、天然の要害を成してゐる。小勢の味方で大軍相手の戦だから、平地では千に一つの勝目もないのだ。地形を利用した此の一戦で、とにかく敵を敗りさへすれば、東國諸源も風を望んで馳せ参ずるは必定、といふ目算だつたのであらうが、それにしても頼朝にとつては無理な戦であつた。

目指す敵の大庭景親の大軍は既に到着して、頼朝の軍とは僅かに谷一つを隔て、對陣してゐるし、宿怨の伊東祐親は頼朝の後方の山に布陣して虎視眈々たるものがある。

兩軍相對峙して動かぬ中に、二十三日は暮れかゝつた。すると酒匂川のあたりに火の手が上つた。これは三浦一族が參會の途上、大庭景親の同類の家に火をかけたのだ。これを望見した景親は、この援兵が到着しない先に一擧に強襲して、頼朝の本陣を揉み潰さうと決心し、一天墨を流したごとく、暴風暴雨交至る中を、大軍を提げて殺到した。

これに對して頼朝の寡兵はもとより敵すべくもないが、皆嗜好を重んずる決死の勇士だから、克く抗戦に努めた。中でも頼朝の腦裡に深く刻まれたのは眞田與市義忠の討死の様である。

建久元年正月、功成り名遂げた頼朝は、伊豆山權現に詣る途中、石橋山を通つた。そこには嘗ての勇士、眞田與市や郎黨の豊三の墓が、山光黯澹たる中に十年の風雨を凌いで立つてゐるではないか。馬上の頼朝は悚然として心動き、深哀の餘り涕涙の止め難いものがあつた。參詣の途中で落涙するのは不吉でもあり、威儀も亂れるといふので、その後は道順を變へたといふ。十年の後までも頼朝をして痛哭させた義忠の最期は、いかに悲愴なものだつたか想像される。そして又、頼朝にとつては此の時の敗戦が、いかに無念だつたかも察せられるのである。

頼朝は夜中箱根の峰々を逃げ廻り、明けて二十四日となつた。北條父子も佐々木高綱も、夜來の苦戦に疲れ果て、もはや峰に登る氣力を失つてゐた。頼朝の傍に付き添ふ者は土肥實平唯一人になつた。慘憺たる敗戦の狀である。そこへ加藤景廉兄弟等が後を慕つて來たので、頼朝も大いに喜んだが、土肥實平は「落人は大勢になると發覺し易い。後日この恥を雪ぐために、今の別離の悲しみを堪へ忍ばう」と言つたので、主従は涙ながらに分散し、悲涙のために道路も見えかねるほどだつたといふ。

此の間にも景親の追求は激しく、もはや頼朝は到底助かるまいと覺悟をしてゐた。

彼は髻の中に入れてゐる丈二寸ばかりの正観音の像を取り出して、岩窟の中に安置するの
で、土肥實平が其のわけを問ふと、「景親に首を渡した時、髻の中から此の像が出たら、源氏の
大將軍たる者に似ぬ仕業と笑ふだらうから」と言つた。

かうして、主従は幾度も死地を彷徨つたが、吾妻鏡には梶原景時が頼朝の居所を知つてゐな
がら、此の山には人の足跡がないから、多分向ふの山だらうと言つて、景親の手を引いて他の
山へ案内したと記してゐる。

源平盛衰記や平家物語に、臥木の洞に隠れてゐるのを、梶原の計ひで救はれた、と記してゐ
るのは、作者の潤色だらう。

とにかく頼朝は、二十五・六・七の三日間は、箱根山中に隠れてゐたが、どうも危いので、
實平の案内で土肥に出て、眞鶴から小舟に乗つて房州に向つた。出帆に先だち、土肥彌太郎遠
平を使として、伊豆山の政子に別離以後の愁情を書き送つたのである。

謡曲なども七騎落ちにしてゐるが、このとき頼朝に従ふものは、土肥實平の外には櫓を漕ぐ
貞恒といふ者たゞ一人であつた。

扁舟の上から振り返り見する主従の腫には、無念の想出も生々しい山脈が、沁み入るやうに映じ
たことだらう。頼朝にすれば、もつと譜代の者が馳せ参じると思つてゐたかも知れないが、瀧

口三郎經俊などは乳母の子で重代の家人でありながら、招集に應じないばかりか、使者の藤九
郎盛長に「猫の額のを狙ふ鼠のやうだ」といつて嘲罵した。そして、事もあらうに石橋山
では大庭景親の軍に加はつて頼朝に矢を射かけ、その矢は頼朝の鎧の袖に筈深く突きさつた
ほどだつた。

しかし此の敗戦は、頼朝二十年の墮眠を破つて鬼武者の昔に立ち還へらせ、不屈の戦闘精神
を鍛へさせたのである。

房州は鬘祖頼義の縁の地でもある。頼朝は幼時から知つてゐた安西三郎景益を頼つて、今の
安房郡加地山海岸の龍島に上陸した。北條時政も三浦義澄も渡航してゐたし、やがて千葉常胤
も馳せ加つた。

これら六百騎を率ゐて今の葛飾郡鴻ノ臺まで来たときに、上總介廣常が二萬の軍兵を率ゐて
參會した。これに對して頼朝は悦ぶかと思ひの外、却つてその來方が遅いと云つて責め、「後陣
に控へて沙汰を待て」と言つた。廣常は實は害心を懷いてゐたのだが、頼朝の態度に荒膽をひ
しがれた形で、「棟梁たるの器だ」と感じ入り、心服してしまつたのである。

味方の六百のところへ二萬の加勢は有難いには有難いが、死生の間も彷徨して度胸も出來た

し、既に父祖が地盤を作つておいた土地に來たのだから、追々と味方が集つて來る見通しもつてゐた。だから山木攻の時には佐々木兄弟が馳せ歸つて來ても涙を流して喜んだ頼朝だが、今ではかうした肚藝をやるだけの餘裕もできたのである。

果して、これから後の頼朝は、武・相・豆・駿・甲・信と風を望んで集る源氏恩顧の士を合し十月十八日には優に十萬の大兵を率ゐて軍容堂々駿河の黄瀬川に着いた。次いで二十日には富士川の東岸に進軍して、平維盛・忠度を將として源氏追討に東上した平氏の軍勢を河を距て、睥睨してゐた。

いよ／＼拂曉を期して總攻撃と決した。全陣隊を整へ諸營みな篝火を焚く。對岸の平軍の陣よりこれを望めば、火光は雲に映じて凄壯をきはめた。水禽の羽音に駭いて平家勢が潰走したといふのは、實にこの時である。

それは甲斐源氏の武田太郎義信が、夜襲を懸けようとて、夜半ひそかに平氏の陣の後方に廻つたとき、富士沼に下りてゐた數千の水禽が一時に翔び立つた。戦前すでに氣を吞まれて、源氏恐怖症に罹つてゐた平家勢には、さながら軍馬の押し寄せる音にも聞えたのである。そして、平軍の參謀平忠清が「すでに東國悉く頼朝に歸順せる由、卷討に會はぬ中に歸洛して、別の計略を樹つるに如かず」といふ意見を出すと皆一も二もなく賛成して、夜明も待たずに陣を

拂つて西走したのである。

激怒した清盛は、翌年二月宗盛を將として再び頼朝討伐軍を向けようとしたが、その軍が進發しない中に悶死した。二十年前に、泣く／＼卒塔婆などを刻んでゐた十四の少年頼朝の姿が、平相國淨海の胸を灼き爛らせたに違ひない。

源平盛衰記には、この富士川對陣のとき、平家の大将維盛が齋藤別當實盛を呼んで、

『汝は東國の事情に明るいが、頼朝の勢には汝ほどの弓勢が何のくらゐ居るか』と、問ふと實盛は、

『われら如きは物の數に候はず。源氏には、弓は三人張五人張、矢は十四束、十五束を響き、一矢で二人三人を仆す者が一隊に二三十人はゐる。馬も逸物を一人して五匹や十匹は蓄へてゐて、まるで山林を家と思つて馳せ習つてゐるから、乗ることを知つて落ちることを知らない』といつて嘆稱し、これと平家方の軍馬を較べて、

「つくろひ飼ひの博勞馬だから、京を出て少し行くと、はや乗り損じて物の用には立たぬ。東國の荒手の馬に一當てあてられたら、二度と起ち上れまい」と言つて、自分だけ先に都に引還したと記してゐる。

事實、源平對戰の勝敗は、最後は馬の優劣で決してゐる。この當時の稗史も殆んど名馬の記

事で蔽はれてゐる。

源三位頼政の擧兵は名馬大木の争奪が導火線となつてゐるが、當時名のある大將はみな名馬の持主だ。頼朝の馬なども軍記物に名の出てる逸物だけでも十四頭ある。中でも磨墨や生咳は、宇治川の先陣で有名だが、大將は名馬を勇士たちに盛んに賞賜褒與してゐた。騎馬戦から徒歩戦に變つた戦國時代では、名馬拜領が専ら名槍とか名刀拜領といふことになるのである。

源氏の名馬は大てい南部系のやうだ。瀬踏をして急流を渡し、或は嶮岨を越えて奇襲して、懸軍長驅して敵の本據を急襲したので。この偉大な輸送力が、地方豪族たる源氏の實力を中央に加へて制覇の時期を速めたのである。

ところで、頼朝は直ちに平家の總追撃戦に移らうとしたが、重臣たちが、東國の殘敵を掃蕩して後方を安全にした上で、と進言するので、駿河の黄瀬川に退いて浮島ヶ原に陣を据ゑた。

奥州の藤原秀衡の許で人と成つた弟牛若が、源九郎義経と名乗つて兄頼朝を訪ねたのは此の陣中である。このとき頼朝は、後三年の役に新羅三郎義光が兄義家の苦戦を援けるために官を捨て、奥州に下り、兄弟力を併せて武衡・家衡を討伐した佳例を引いて喜べば、義経は、襁褓の中にして父義朝に死別れた牛若・遮那王の昔を語り、共に懷舊の涙を催した。

これほどの二人であつたが、相容れない立場と性格から、後年血を血で洗ふ骨肉相尅の悲運

を背負はなければならなかつたのだ。それはともかく、頼朝は東國を平定すると鎌倉に居を定め、以後は自ら出征することなく、専ら將士を遣して事に當らせたのである。

木曾義仲の活躍

頼朝が鎌倉で本據を固め後圖を爲してゐる間に、信濃の木曾から崛起した義仲は、信濃や北陸の大軍を率ゐて途上の平氏を撃破し、遂に入洛して京都の主人となり、一時は至尊を擁して天下に號令するほどの地位を得たのである。

義仲は、源爲義の子の帶刀先生義賢の二男だから、頼朝や義経等とは従兄弟同志である。父の義賢は甥の義平（頼朝の異母兄）のために殺された。そのとき義平は畠山重忠に命じて、當時三歳だつた駒王（義仲の幼名）をも殺させようとした。子の重能は憐れに思つて密かに齋藤別當實盛に託した。實盛は駒王を信濃に送り、駒王の乳母の夫の中三權頭兼遠に頼んだ。かうして兼遠に養育されて木曾で人と成つたから、世に木曾次郎義仲といふのだ。

ところで、兼遠の子の樋口次郎兼光や今井次郎兼平といふのが何れも豪傑ぞろひで、源氏の御曹子義仲を戴いて、治承四年以仁王の令旨を奉じて信濃に兵を擧げたのである。その時義仲は二十八歳であつた。

義仲の擧兵と頼朝の擧兵は、何れが先で何れが後だったか、また兩者に直接の関係があつたのか無かつたのか、それは明かでない。だが義仲は、頼朝の幕下に參じて其の指揮を仰ぐつもりでなかつたことは確かだらう。一波起つて萬波動くといつた當時の客觀的情勢にあつて、官の令旨がモメントとなつて兩者殆んど同時に、平氏打倒運動を代表して起つたのだらう。

一たび蹶起した義仲は、頼朝に譲らぬ神速さで信濃・上野・越後を従へ、次いで越前・越中・加賀を徇へて養和元年九月には、彼の武威は北陸一帯に亘つたのである。

この頃、甲斐源氏の宗家たる武田信義の子信光は、女を義仲の嫡男義高に妻せようといふ氣でゐたが、それを義仲は侮つて斷つたので内心怨んでゐた。そして今の義仲の威勢を見た信光は、「彼に自立の志あり」といつて頼朝に讒した。折も折、頼朝に領地を乞ふて聽かれなかつた源行家(頼朝・義仲の叔父)が不平を懷いて義仲に投じたので、頼朝は武田信光の讒を信じ、壽永二年三月兵を率ゐて信濃に入り義仲を討たうとした。

このとき義仲は逸る將士を制して、

「保元以來わが宗族は互に殺戮して世の嘯を貽してゐる。平氏を滅さざるに今又頼朝と戦ふのは賢明でない。暫く彼の鋒先を避けよう」とて越後に抵り、

「若し二心なくば行家又は清水の冠者(嫡男)を質とせよ」といふ頼朝の要求を容れて、鎌倉に

遣した。

血族殺戮の悲運を泌々と味つて來た義仲にしてみれば、事實彼の言のやうに頼朝との衝突はできるだけ避けたかつたのだらう。彼は必ずしも山出しの猪武者ではないのだ。

頼朝は、姫の大姫を義高の許嫁にしたが、後年義仲が近江で敗死すると、間もなく義高を殺してしまつた。このとき大姫は七八歳だつたが、幼馴染の義高に對する思慕の情に堪へかねて、以後十年のあひだ愁歎やまず病床に沈み勝ちで、二十にもならず世を去つてゐる。吾妻鏡にも、頼朝夫妻が姫のために哀傷して、諸社に祈願し諸寺に祈禱して、親心を竭す有様を記載してゐる。

この大姫や義經の愛人靜、それから囚裡の平重衡に侍いた千手前などは、源平ゆかりの悲劇の女性として、最も代表的であらう。

ところで、頼朝と和解した義仲は愈々諸方を經略したが、平氏の方でも、右近衛中將平維盛を主將とする木曾追討軍は、越前の燈山・林・富樫の諸城を陥れ、勝に乗じて盤若野まで進出した。

この形勢を見た義仲は、越後を進發して越中に入り、六動寺に到つた。義仲にとつては七日間の養父である齋藤實盛は平軍中にゐるが、錦の直垂を着し白髪を染めて最後を飾つたといふ

のは當時のことである。そして木曾冠者義仲が、朝日將軍義仲の名によつて京都の平氏を震駭させた礪波山俱利加羅峠の殲滅戦は、これから展開されるのである。

壽永二年五月十一日、平家の武將越中前司平盛俊は、一萬五千騎を率ゐて俱利加羅峠の頂上から少し越中側に下つた猿の馬場に布陣した。これに對して義仲は南黒坂・北黒坂・黒坂口の三方から進んで包圍隊形をとつたのだ。

長門本の平家物語は、この北黒坂の大將こそ、義仲の愛人で美貌の勇婦巴だつたと書いてゐる。

平軍は、「北は山巖石也、夜軍よもあらし、夜明てぞあらんとゆだんしける處に陣を作りければ、東西色を失ひてあはてさわぐ」といふ結果になつたが、駿馬の健脚に物を言はせて一舉に決する奇襲戦こそ、源氏獨壇上の戦法だ。この方面の偵察と防禦を全然怠つてゐた平氏こそ、運の盡きである。

ところが義仲は、自ら大手に當る黒坂口に向つたが、

「夏山の縁の木の間より朱の玉垣ほのみえて、かたそぎ作りの社あり、あれは何の宮ぞ」と尋ね、手書きの太夫覺明をして戦勝祈禱の願文を捧げさせたといふのは、今の縣社護國八幡のことで、その願文も現存する筈だ。

かうして義仲は、いゝ加減に敵をあしらひながら日没を待つてゐたのである。この戦況は、平家物語の敘するところに従へば、

「去程に日もくれがたに成にければ、今井四郎兼平、楯六郎親忠、八島四郎、落合五郎を先として、一萬餘騎にて平家の陣のうしろ、西の山よりさし廻して、陣をどつと作り懸たりければ黒坂口、柳原に控へたる大手二萬餘騎、同時に陣を作る。前後四萬餘騎がおめく聲、谷をひゞかし峯にひゞきて夥し」と。

すると平軍は、

「後は山深くして峻しかりければ搦手へ向ひぬべしともおぼえざりけるを、いかゞせんずる。前は大手なればえずゝまず、後へも引返へされず、鳥にもあらねば天へものぼらず、力及ばぬ道なれば、心ならず南谷へ向けてぞ落しける。

さばかりの巖石を闇の夜に我先にと落ちける間、杭につらぬかれ岩に打たれても死にけり。先に落るもの後に落す者にふまれ死ぬ。後に落す者は今落す者にふみころさる。父落せば子も落す、子落せば父もつゞく。主落せば郎党も落重なる。馬には人、人には馬、上が上に落重なりて、くりからが谷一つをば平家の大勢にて馳埋てけり」

狼狽した平軍は、かうして猿ヶ馬場の陣のすぐ下の谷に雪崩れ落ちたが、この谷は馳込谷と

も地獄谷とも言はれ、摺鉢の底のやうになつてゐて、一旦落ち込むとまた向ふの急峻な山腹を攀ち登らねば逃げ路がない。まったく平軍にとつては地獄谷であつた。

當時の文献としては最も信用できる關白兼實の玉海にも、五千騎に及ばぬ源軍に襲はれた四萬餘騎の平家勢は、僅かに生き残つた者も甲冑を帯してゐるのは四五騎に過ぎず、大將越中前司盛俊以下の勇士も、郎党一人をも連れず鬚を引きくだして逃げ去つた、と記してゐる。當時、都に傳へられた敗報は此の通りだつたと思ふ。平家物語がいふ兩軍の兵數は、あまり多きに過ぎて信用し難いが、とにかく平軍は大兵を擁しながら退嬰主義をとつてゐて早く敵陣を衝かうとせず、却つて小勢の敵に奇襲されて、その惨敗の状は嚴島合戦の陶晴賢に似てゐる。

この礪波山の俱利伽羅峠は策戦上の要地で、承久の亂にも官軍は此處で東軍の西上を喰ひ止めようとしたのである。だから此の敗戦は平家にとつては實に致命的な打撃で、それだけに義仲の武功は決定的なものだつた。

此處で敗れた平軍は、安宅・篠原と連敗し、義仲はさながら野を捲く疾風のやうな勢で之を追蹤して、京都に迫つたのである。

義仲が俱利伽羅峠の夜襲で火牛の戦法を用ひたといふ話は、あまりにも有名だが、本邦ではこれ以外にも二つばかり用牛戦が傳へられてゐる。併し何れも實録の書には見えてゐないか

ら、齊の田單の火牛戦を焼き直したものと斷じてよい。

七月、義仲は北陸道から近江に入つて延暦寺を手馴づけ、叔父の行家は大和に入つた。また源行綱(攝津源氏で鹿ヶ谷會議を清盛に密告して平家黨となつてゐた)は攝津河内に據り、足利義清も義仲に党して丹波に入り、これらが相呼應して京都に攻め入らうとしたのだから、平家の狼狽は極點に達した。

このとき後白河法皇は御書を前内府宗盛に遣はされ、いよく火急に及ばゞ、如何に措置する所存か、を御尋ねあつた。宗盛は、その際は直に參向して主上並に法皇を奉じて西海に赴くべき旨を奉答した。

宗盛の考へでは、主上と法皇を奉じ、三種の神器さへ奉じたならば、源氏はたとへ一旦京都を占據しようとも賊名は免れないから、回復の機會があるだらう、といふのである。ところが、法皇は兼ねゞ平氏の所爲を惡み給ふてゐたから、宗盛を出し抜いて密かに比叡山の圓融坊に渡らせられた。木曾の大軍はすでに比叡の彼方に満ち満ちてゐるといふのに、最後の策を失つた平家一門の周章狼狽の状は、言語に絶してゐた。もはや寸刻の猶予も許されない。二十五日、平氏は清盛以來豪華を誇つた六波羅の館邸に火を放ち、安徳天皇と建禮門院を擁し、三種の神器を奉じて西海に落ちて行つた。

これ以後の彼等は、一ノ谷、矢島、壇ノ浦と敗滅の一途を辿りながら、平家物語が描くやうな美しい悲劇を展開して行くのである。

平家が西海に落ちた後、高倉天皇の第四の皇子、後鳥羽天皇が御即位あり、なほ後白河法皇が萬機を總覽し給ふてゐたが、源氏諸將の論功の結果は、頼朝の功を第一とし、義仲は第二、行家は第三とせられた。併し義仲に喜ばぬ風が見えたので、平氏一族百八十人の没官領五百餘箇所のうち、義仲に百四十箇所、行家に九十箇所を賜ひ院の昇殿をも許された。

併し義仲の氣持としては、治承四年九月、以仁王の令旨によつて義兵を擧げ、また、く間に上・信・北陸道を席捲して専横を極めた平氏一門を驅逐して京都を手中に収めたのだから、やはり以仁王の御遺子である北陸ノ宮の御即位を御期待し奉つてゐた。従つて、それが自然本意の色ともなつて現はれたのだ。このあたり、すでに法皇と義仲の間には除き難い障壁が生じてゐたのである。

そして、何といつても源氏の正統頼朝ほどの地盤を持つてゐなかつた義仲は、いきほひ功を急いで上洛したが、そこには殆んど運命的なものが、いろ／＼と彼の前途を阻害しようとしてゐたのである。

元來、狭い京都は、兵糧の貯蔵も補給も困難で、到底大兵を擁して久しく留るべき地ではな

いのである。平氏が都を捨てたのも、頼朝が容易に足を擧げて京都に向はなかつたのも、多くは此の爲めだ。後年楠木正成も主上に再び山門行幸を仰ぎ、尊氏の大軍を京都に引き入れておいて、淀川口を塞いで敵軍の糧道を斷たうといふ策戦を奏上してゐる。

この京都に猛虎の勢で攻め上つた義仲は、俄然自由を失ひ窮地に陥つた。それは、何よりも部下の大兵を給養するための糧食物資の欠乏である。徴發しようとするれば、寺院その他都民一般の反感を免れ難いし、と言つて兵士を食はずには居られない。

もはや部下の士卒は掠奪を始めてゐるが、彼は黙認するより外に途のない破目に立ち至つてゐた。源平盛衰記には、

「只今食はんとて箸を立てるをも奪ひ取りければ、口を空しうして命いくべきやうなし。道を通る者も衣裳をはがれ、手に持ち肩に擔へるものをさへ取れば、安き心なし。青田を刈取つて秣に飼ひ、堂塔蘇屠婆などを破り取つて薪としけり」。

その他玉海や平家物語も等しく掠奪劫盜の様を書きたてゝゐる。なほ平家物語には、

「木曾義仲は色白う、みめよい男にてありけれど、起居の振舞の無骨さ、物言ひたる言葉つき片口なること、限りなし。ことわりかな、二十より三十にあまるまで信濃國の木曾といふ片山里に住み慣れてありければ、なじかはよかるべき」。

そして、此の頃猫間中納言光隆卿が義仲を訪問したので取次ぐと、義仲は「猫が人に對面したりするのかわ」と言つて笑つた。そして猫間殿と言へないで「猫殿々々」と言つた。あまりのことに中納言は訪問の用件に觸れないで歸つてしまつたと記してゐる。

これが事實としても、信濃の山奥などでは輕口を叩いた程度のものだらうが、京都の公卿づきあひでは、たしかに無い作法である。

また、院に參向するときにも、昇殿を許されてゐる者が、直垂で出仕するといふ法はなからうといふわけで、俄かに束帶を着けて出かけたのはよいが、

「鎧取りて着、矢かき負ひ、弓推し張り、甲の緒をしめ、馬に打ち乗りたるには似も似ず、あしかりけり。されども車にこがみ乗りぬ。

牛飼は八島の大匠殿(平宗盛)の牛飼なり。牛車もそれなりけり。逸物なる牛のすゑかふたるを門出づるとて、一答あてたらんに、なじかはよかるべき。牛は飛び出づれば木曾は車の中に仰向きにたをれぬ。蝶の羽をひろげたるやうに、左右に袖をひろげ、手をあがいて、起きん起きんとしけれど、なじかは起きらるべき」

そして、牛車が院の御所に着いたとき義仲は後から降りようとするので、雑色が「召される時には後からであるが、降り給ふ時は前からである」と注意すると、

「何條すどほりすべき」と言つて、遂に後から降りてしまつた、と。

都會人の地方人批評は、昔も今も先づ言葉と服装と動作から始まる。幕末維新の頃も江戸っ子は、官軍に加はつてゐる地方藩兵を捉へて、薩摩ッぼだの錦ぎれだの、だんぶくろと言つて嘲笑してゐる。

木曾の山奥に崛起して、實力主義で押し通して來た義仲だ、いまさら都風に爲濟まさなくてもよいにはよいが、何しろ部下の暴行があるので都の上下は皆、權勢には驕つても滅茶はしない平氏以上に困つた野蠻人が侵入したと思つた。

花の香は遠くから聞く方が佳い。義仲が不人氣のどん底にあるとき、超然として獨り關東の膏腹を占めて徐ろに後圖を爲してゐる頼朝の、毒にも藥にもならぬ外交辭令は、京都の公卿達には存外人氣があつて、中原定康が鎌倉に下向して頼朝の上洛を促すといふ有様であつた。

併し、それは義仲にとつては随分嫌やがらせとも思へるので、彼は法皇から平氏追討の御催促があつても、なか／＼腰を上げようとしなない。若し頼朝が兵を率ゐて上洛するならば、途中で之を邀へ撃つつもりでゐたのである。

だが、頼朝にしてみれば、西海で平氏が京都恢復の機を狙つてゐる限りは、義仲に京都を委せておいてよい、何も上洛を急ぐことはないのである。毒を以て毒を制してゐるわけだ。

だから義仲の地位は、決して安心のできるものではなかつたのだ。しかし、いつまでも法皇の御催促を無視して京都に留つてゐるわけにも行かないから、十一月に入ると都を出て、平重衡・通盛・教経等を備中の水島に攻めたが、武運拙くも大敗を取つた。場合が場合だから、百戦百勝の義仲の名譽にかけても雪辱戦をやるべきところだが、折も折、頼朝の代官範頼・義經が大兵を率ゐて西上するといふ報があつたので、同月十五日急遽都に引き還さねばならなかつたのである。

そのうへ、今まで庇護を加へてやり、行を共にして來た叔父の行家は、義仲の勢の傾くのを見て裏切つた。仍ち、(形成愈々不利ともなれば法皇を奉じて北國に赴かう)、といふ義仲の計畫を密奏してしまつたのだ。

行家は戦争は下手クソだが小才の利く器用な男で、柿の衣に藤の笈、山伏姿に身を變へて以仁王の令旨を携へ、東國諸源を遊説したりするのは彼の適役だ。京都でも無骨者の義仲とは違つて法皇の御覺もめでたく、双六の御相手にさへ罷り出たほどである。頼朝の所をしくじつた後、田舎者の義理堅さにつけてこんで義仲に泣き付くと、義仲は嫡男の義高の命に代へても庇つてやつた程だが、それを、義仲が落目と見て急に後足で砂を蹴ることもできる行家だつた。彼は後年義經に覚し、和泉で捕へられて殺されてゐる。それはともかく、義仲の激怒を恐れた行

家は、平氏追討にかこつけて播磨に下つたのである。

東には範頼・義經の來り通らんとするあり、西には京都恢復の機を窺ふ平氏あり、今またその一勢力たる行家の叛くに及んで、すでに人心を失つた京都で従四位下征夷大將軍源義仲などと言つても、その地位たるや、實に不安なものであつた。

義仲は武略に長じ、部下にも樋口・今井・根ノ井・楯の四天王を始め、忠臣勇將を擁してゐたが、頼朝のやうに大江廣元・三善康信・中原親能などのやうに、中央の情勢に通じ洗練された外交的手腕を以て、彼を補佐する人材に缺けてゐた。源行家あたりが付いてゐたんでは、何うにもならないのである。

何分にも信濃萬山中の義仲は、氣質は率直だが、それも公卿づき合ひでは却つて邪魔になつた。とにかく京都に入つてからの彼はサツパリ勝手が分らないので、散々であつた。

事毎に彼の意と食ひ違つて苛々してゐる義仲のところ、法皇の寵臣で鼓の名手、鼓判官の名を取つた平知康が、兵士の暴行を停止するように、と傳へに來た。

義仲は、蟲の居所も悪かつたし、何しろ彼にとつては最も痛い所に觸れられたのだから堪らない、卒然として、

「鼓判官といふ名は、誰かに打たれてか撲られてか？」と、憎まれ口を叩いて先方の用件には答へようとしなかつたといふ。

尤も平家物語の話だから、そのまゝが事實か何うかは分らぬが、鼓などを弄んでゐる京都貴族の檢非違使などのことだ、どうせ腰抜けで感情的な人間が居たに違ひない。しかし、そんな者を相手にするのは義仲の未熟さもある。顔色を變へて歸つて行つた知康は「木曾は、謀叛の兆すでに現れたり、疾く討たせ給ふべし」と奏上すると、延暦寺・興福寺の僧兵を始め、辻冠者や乞食法師の類までが法住寺殿に狩り集められた。都の上下は、「やれ院が義仲を討給ふ、いや木曾が院の御所を襲ひ奉る」といつた流言に攪き廻されたのである。

法皇は主典代景宗を御使として、

「謀叛の事、若し無實ならば速かに勅命を拜して西國を討て。若し又頼朝の入洛を防ぐ所存ならば、勅命によらず自身赴くがよい。洛中に在りながら動もすれば聖聽を驚かせ奉るは太だ不當であらう」と仰せられた。

併し此の御命令は、今の義仲を進退兩難の窮地に追ひ込むものだ。殊に頼朝を討つのなら、勅命に依らずに自身で討ちに行け、など言はれても、いま範頼・義經に大兵を附して上洛させようとしてゐる頼朝の方に勅命一下すれば、義仲は忽ち賊名を負はねばならなくなる。さす

がの彼も（あまりにも情ない仰せ）といふ氣持にもなつたであらう。

京都に於ける鎌倉の代辯者たる右大臣九條兼實のごときも、「今の沙汰の如くんば、王化無きに似て甚だ見苦しい」と正論を陳べてゐる。しかし、それは用ひられないで、主上（後鳥羽帝）までが法皇の法住寺殿に行幸されるに及んで、形勢は極度に緊迫した。

事ここに至つては義仲も、坐して滅亡を待つか、起つて反逆の名を冒すか、二者の一を擇ばねばならぬ破目だと感じたのである。後日頼朝さへ「義仲をして此に到らしめたものは、實に法皇の寵臣檢非違使平和康である」（吾妻鏡）と言つてゐる。

十一月十九日、遂に義仲は軍兵を率ゐて法住寺殿を圍んだ。そして宮に火を放つたり、大部が狩り集めの無頼の徒ではあるが官軍と戦つて之を殺し、果は狂ひ獅子のやうになつて文武四十人の官爵を停め、多數の公卿を幽閉した。しかし、朝廷も暫くは彼の爲すが儘の振舞に任せる外はなかつたのである。

上洛途上の範頼・義經は、この變を尾張の熱田で聞き、直ぐに鎌倉に報じて頼朝の指揮を待った。かうなれば義仲の方でも黙つては居れない、十二月十日頼朝追討の宣旨を請ふて奥州の秀衡に申し下した。窮地に追はれ、ば狂ひ出して亂暴な振舞にも出るやうな義仲ではあつたが、どうしても朝廷の御威光に頼らねば萬事成就しないと信じてゐたのだ。一方、西國にある

平氏とも和睦しようと思つて、八幡の神體を摸した一尺の鏡の背に起請文を彫つて贈つたが、平氏は（一門を現在の悲運につき落したのは義仲だ今更ら）といふので和議を一蹴したといふ。しかも、この時に當つてかの源行家は、播磨から河内に赴き石川城に據つて南方から義仲を威嚇するといふ有様であつた。

義仲は院に叛いたりしたので、去つて行く將士も尠くなかつたし、身邊すでに落莫たるものを感じつゝ、壽永三年を迎へたのである。

一月十七日、義仲は樋口次郎兼光を河内に向はせた。行家を討つて先づ背面の安全を期するためである。一方では、福原あたりまで進出して一氣に京都恢復を狙つてゐる平氏にも備へねばならなかつたから、當時都に留る義仲の兵力は劣弱だつたと思はれる。

この虚に乗じて一月二十日、範頼は瀬多、義経は宇治川を渡つて、疾風のごとく都に進入して來たのだ。平家物語に見える佐々木・梶原の先陣争は、實録の書には見えない。抜け駆功名は戦場の習だつたが、この話はひどくフェア・プレイでない。假作だと思ふ。

ところで義仲は、急ぎ法皇を奉じて北國に落ちようとしたが、御所の警衛が嚴重で果さず、宇治で破れて退却して來た根ノ井・楯の軍と合して東軍の先鋒と戦ひながら、三條河原に出て

前方を望めば、すでに搖れ動く白旗ならぬはなかつた。義仲はその中に突入して血路を求め、とにかく近江まで落ちて來たとき、股肱と頼む根ノ井も楯も討死して、つき従ふ者は、既に幾許もなかつた。粟津の邊まで來ると、勢多で破れて湖西に退く今井兼平と逢つたが、執拗に前途を遮る範頼の軍と戦つて、殆んど全滅に近いまでに討たれた。

血戦苦闘をつゞけて來た義仲は、兼平を顧て言つた。「最早わが力も盡きぬるぞ、日頃は何とも思はざりし薄金（鏝の名）の、いまは何とやらん重くこそ覺ゆれ。語る者は悵然、聽く者は愁然。春まだ淺く、蕭々たる湖畔の風は敗將の面に寒い。

すでに死地にあるを知つた義仲は、今井が防ぎ矢してゐる間に自刃の場所を探さうと、丘の方に馬首を向けたが、忽ち泥田の中に入り入れて、策てど煽れど馬は動かぬ。人も馬も疲れ果てゝゐたのだ。

今井や如何に、と振り返へる義仲の額に一矢飛び來つて中る。さしもの猛將も今は堪りかね、そのまゝ鞍の前輪（まへわ）に打ち俯した。義仲の行年三十一。吾妻鏡には、此の矢こそ相模の住人石田次郎が放てるものと記してゐる。

はるかに此の光景を見た兼平は、心を決し屹と馬首を立て直すと、そのまゝ敵中に突入した。死を決した驍將の鋒尖（はさき）に敵兵法ちて引き退けば、その隙に兼平は大刀の銚（つばき）を胸に擬し、馬

から眞逆様に落ちて壯烈な死を遂げた。義仲の墓は今の天津市の義仲寺にある。

木曾殿と背中あはせの寒さかな

芭蕉ばせうの句碑にも哀感が深い。

直情徑行、生れながらの野人木曾義仲は、典故先例を無視し古格を破壊して、徹頭徹尾東國武士の本領を發揮した。彼の長所も短所も同時に此に在つたのだ。信長に似てゐるが政治的手腕はくらべものにならない。舊き時代の破壊が彼の歴史的な役割だつたとすれば、義仲はそれを果して遺憾なきものがあつた。そして新たな建設は、新興武士階級の指導者たる頼朝の力に俟たねばならなかつたのだ。

義仲に對する當時の都人士の反感は、源平盛衰記や平家物語の筆誅ひつちゅうとなつて現れてゐるが、彼も皇室に對して不遜な心を懷いてゐたのではない。後白河法皇が西征せよ、と強ひて仰せられた時にも、敢て反きはしなかつた。十一月十八日のクーデターに遇つて、止むなく法住寺殿に攻入りはしたが、彼とて後世水戸の史家のために反臣傳中に收められるやうな不臣を、敢て犯さしめた當時の事情を深く悲しんだに違ひないと思ふ。

源九郎義經

義經が兄の頼朝と對面したのは富士川の合戦の翌日の治承四年十月二十一日、浮島ヶ原の陣中である。

義經は幼名が牛若で、左馬頭義朝の第九子といふことは、あまりにも有名だが、母の常盤はもと九條院(近衛天皇の皇后)の雑司ざしで、義朝がその美貌を見こんで妾とし、今若・乙若・牛若の三子を儲けたのである。雑司といふのは禁中で雑用驅使に従つた女のことだから、もちろん身分は低い。

牛若が生れた年に平治の亂が起つて、父の義朝は尾張で殺され、異母兄の頼朝は平家の手に捕へられた。母の常盤とよはは三子を抱へて大和の龍門の里に匿れてゐたが、遂に六波羅に名乗つて出た。すると清盛はその容色を愛で、妾とし、三子の命を助けた。これが世に謂ふ「常盤の操」で、操を捨て、操を立てたといふのである。

しかし、鬼若など言つて、源氏一門から信望のあつた嫡男の頼朝さへ殺さなかつた清盛だから、敢へて「常盤の操」に依らなくても、牛若などは助かつたと思ふ。それに常盤は、清盛の寵が衰へると、又もや大藏卿藤原長成といふむげん微祿の公卿に嫁して、こゝでも數人の子供を生んでゐる。

尤も、當時は平安時代の後で、女性の貞操觀念は後世ほど嚴格なものではなかつたから、曾

我兄弟の母親なども、夫の河津三郎祐康が殺されると、二子を連れて曾我祐信に再嫁してゐる。だから、もしも母親が未亡人のまゝで兄弟を育て上げてゐたなら、「河津兄弟の仇討」となつたわけである。

常盤は長成に嫁ぐと今若・乙若を坊主にし、牛若もまた遮那王と改めて鞍馬寺に入れたが、彼女はおそらく、子供たちが武士などになつて、父のやうな恐ろしい運命の中に身を曝さないやうに、と願つての上だと思ふ。曾我兄弟の母親が、次男五郎を箱根山の別當坊に入れたのも同じ心からに違ひない。ところが、英武牛若は木の端のごとく言はれる法師などで一生を過せるわけはなかつたのだ。

平治物語には、牛若は十一の時に系圖を見て自分は源氏だと知り、平氏を滅して父義朝の靈を慰めようと思ひ立つた、と記してゐる。

義経は、義家以來縁故のある奥州の雄、藤原秀衡を頼り、源氏の御曹子として厚遇を受けながら六七年を平泉の館で過した。すると源三位頼政の蹶起に次いで、兄頼朝が伊豆に崛起したことを知つたので、彼は秀衡が情勢觀望を説いて引留めるのも肯かずに、平泉の館を脱け出して頼朝の陣に馳せ参じた。

これからの義経は、次兄の範頼と共に頼朝の股肱となつて、平氏を追討し源家再興の一路を

邁進したのである。

守覺法親王(後白河法皇の第三子)が記された「左記」にも「彼の源廷尉(義経)は直之勇士に匪る也、張良三略、陳平六奇、其藝を携へ其道を得たる者歟」とあるが、もし義経が居なかつたら、源平の對局はもつと長引き、その勝敗も常に源氏にばかり有利ではなかつたと思ふ。

何處で何う學んだか、實録の書にないから確かなことは分らないが、とにかく彼は十五六から二十三四歳までの最も大切な武術修業期を、八幡太郎が實戰によつて智略を磨いた奥州の地で過してゐるから、その天稟の才に傳家の兵略を繼承して、あの奇策縱横の武功を輝かせ得たものと思はれる。

壽永三年一月二十日、都に武威を張つた木曾義仲をたゞ一日で攻め滅した義経は、二十六日には法皇の命を拜して早くも平氏追討の途についた。

木曾義仲の京都進入によつて一旦都を落ちた平家も、そのころは源氏同志の抗争の隙に徐々に勢力を挽回して、屋島の内裏から山陽道に進出して瀬戸内海の制海權を握り、やがて攝津の福原から一舉に入浴しさうな形勢を示してゐた。源氏たるもの猶豫はできなかつたのである。

二月二日、一ノ谷の總攻撃戦に、義経は奇中の奇に出て、突如鴨越の嶮から敵の背後を襲つた。不意を打たれた平軍は一たまりもなく潰走したのである。

次の屋島の戦には、渡邊ノ津(今の大阪)から水手も怯氣づくほどの荒天を衝いて安波勝浦附近に上陸し、牟禮高松(今の古)の民家に火を放ち、屋島の内裏を襲撃して平軍を敗走させた。このときも義経は、兒島灣もしくは小豆島方面から攻撃するだらうといふ豫想を裏切つて又もや背面攻撃を敢行してゐる。

義経が騎馬戦に長じた東國武士を率ゐて陸から意外外の背面攻撃の策に出ると、水戦に自信のある平氏は必ず海上に向つて遁走するのだ。併し、この平氏を最後の潰滅させるには、是が非でも、東國勢には勝手不案内の瀬戸内海を戦場として、苦手の海戦を敢行するより外はなかつたのだ。義経と景時の逆櫓(さかか)の論争なども、この難節(なんせつ)に臨んで、さすがの源軍も思案(しあん)泥迷(ぬいまい)し彼は決せざる有様をよく物語つた逸話だと思ふ。

壽永四年三月二十四日、義経は終に長門の壇ノ浦で、巧みに潮流を利用し、わづか數時間の交戦で、美事に平家を海底に葬り去つたのである。この戦争は、源平盛衰記や吾妻鏡で見ると午前六時に始まつて正午に終つたことになつてゐるし、玉海(たまうみ)では正午に始つて暮方終つたと出てる。潮流の關係や義経の戦法から見て、玉海(たまうみ)の記事の方が正しいと思ふ。

とにかく、陸に海に往くとして可ならざるなき義経(よしかげ)の戦術は、玆に至つてまさに張良の智謀と陳平の兵略にも通ずるの概がある。

壇ノ浦の一戦に平氏を滅した義経が、捕虜の前内大臣平宗盛父子を護送して酒匂驛(さかづき)に着いたのは、元暦二年五月十五日の晩であつた。そこには北條時政が出張して来て、捕虜の引渡しを終つたが、義経自身は鎌倉入りを禁じられたのである。

彼は、已(すで)に兄の勘氣(かんき)を知らぬではなかつたが、骨肉の愛情一つに頼みをかけて東下したのであつた。しかし赫々たる戦功に輝く自分を待ち受けたものは、抽賞(ちゆうしょう)恩與(おんよ)ではなくて依然として溶けぬ兄の怒であつた。歡喜に酔ふべき筈の彼は、悲涙に沈まねばならなかつたのだ。

頼朝の周邊に取り入つてゐる大江廣元や、軍奉行の梶原景時などの中傷もあつたであらうが、兄頼朝の心情を害した直接の原因は、義仲追討の賞として頼朝が從四位下に陞任(しやうじん)されたのを見て、義経は他の誰よりも早く任官推舉(すまきよ)を願ひ出したことに始まつてゐる。次いで一ノ谷合戦が終ると範頼は參河守に、源廣綱は駿河守に、平賀義信は武藏守にと、一門は夫々頼朝の手を経て推舉されたが、第一の殊勳者義経は、何ノ守(かみ)でもない唯の源九郎義経でなければならなかつたのだ。

妾腹の彼は、恩顧譜代の家人たちの手前、意地もあり張もあつた。そして(さすがは頭ノ殿の御子だ、鎌倉殿の御舎弟だ)、と言はれるだけの働はしたつもりだ。それにも拘らず兄の此の

仕打は、若いだけに義経には堪へ難いものだった。

その年の八月六日、義経は院宣を賜つて左衛門少尉に任じ、檢非違使に補せられた。そして關東には、

「自分で所望したわけではないが、數度の勳功黙し難しとて、朝恩こゝに至つたので、固辭するわけにも行かず拜受した」と報告した。

しかし頼朝は、武家の棟梁として賞罰の權を手中に確保してゐる必要があつたので、早くから朝廷に、

「平氏追討の行賞は自分が取り計ひ、後日まとめて奏請する」と申し出てゐた。このことは義経も知らぬ筈はないのだから、これも頼朝の氣を悪くした。そして、

「彼を平氏追討使にするのは暫く見合さう」といふことになつてしまつた。とはいへ、平氏を討てるものは義経の外に居ないのである。

斯くして彼は一年間京都に留つて、洛中の警備などに就いてゐた。

義経に見れば、鞍馬寺を脱け出して行方知れずになつた稚兒の遮那王が、いつの間にか源氏數萬の大將となつて都に攻め上り、またゞ間に木曾を滅し平氏を追ひ落して、想出多し京の都を舞臺として活躍する有様を、皆の者にも見せたかつた。また、それが其儘父祖の名譽

の恢復ではないか、さう考へてゐる彼は、できるだけ高官が欲しかつた。早く昇殿も許されなかつた。彼一人のためばかりではなく、源氏の名譽のためにも望ましかつたのだ。だから彼には推擧を澁る兄頼朝の氣が知れなかつたのである。

義経は、清衡以來三代の繁榮を誇り、白川ノ關以北の王者を以て任じてゐた陸奥鎮守府將軍秀衡の許で人となつたゞけに、義仲のやうに粗野なところがない。あれだけの武略を持つてゐながら、體つきなども小柄で、何かにつけて優美な感じがして後白河法皇の御信任も厚かつたし、都人士にも人氣があつた。だから、兄頼朝との間が釋然としないことが彼の心に一抹の暗翳となつてはゐるが、かなりの地位も得たし、愛人靜に侍づかれ、股肱の辨慶や佐藤兄弟に擁せられてゐる現在の境遇は、兄との不快な間柄を忘れさせてくれた。おそらくこの一年が、彼の生涯を通じて最も幸福な時期だつたと言へよう。しかし其れが又、彼のために身の仇ともなつたのである。大江廣元が、「院の昇殿を許された義経は、八葉の車に駕し、衛府三人、騎馬の供侍二十人を扈從せしめ、庭上で舞踏し、劍笏を撥げて參殿するを睹た」と鎌倉に報告して、頼朝を激怒させたのも、この間のことである。

かうしてゐるうちに西國の平氏は又もや勢を盛り返へし、周防・長門方面の征討に向つてゐる範頼の軍も、糧道は欠乏するし船はなし、軍奉行の和田義盛さへも、鎌倉に脱け歸らうとす

るほどの窮狀にあつた。

兄の怒はいつ解けるか分らない、もし此のまゝ放つておいては源氏の一大事である。義經は鎌倉の命を俟たずに、自ら後白河法皇に願ひ出て、平氏追討の宣旨を申し請けた。

屋島に向はうとする直前、彼は大藏卿泰經に、「所存あれば今度は一陣に於て命を棄てんつもり」と洩らしてゐる。

混み入つた事情の中で、しかも海戦に馴れない東國武士を率ゐて、海に強い平家の根據地を衝かうとする義經は、胸裡すでに悲壯な決心があつたのだ。かうまでして衷情を示したなら、兄も怒を解いてくれるだらうと思つたのだ。そして屋島から壇ノ浦へと、僅か一月餘りで驕る平氏を西海の涯に覆滅させたのである。しかし軍奉行の梶原景時は、

「平家討滅は君の御威光と御家人多數の合力によるものなのに、判官殿は一身の功だと思ひ上つて越度多く、われ／＼將士はみな、薄氷を踏む思ひである」と、鎌倉に訴へた。

それに、義經は頼朝の世話で河越頼重の女と婚約があるのに、當時朝敵であり智臣の譽の高い前大納言平時忠の女を正妻とした。これも頼朝を怒らせた。木曾義仲も前關白藤原基房の女を妻としてゐるが、彼等にしてなほ、名門崇拜の氣持は脱し得なかつたのだ。

頼朝は終に田代信綱をして、

「苟も鎌倉に志を寄せる輩は、嚮後義經の下知に従ふべからず」と觸れさせた。

義經は起請文まで献じて他意なきを誓つたが、兄の怒は募るばかりであつた。併し頼朝は、壇ノ浦の合戦後に義經が法皇から頂いてゐる官位を全然知らないやうな顔をして、別に伊豫守に推舉した。頼朝に取つて義經の屋島・壇ノ浦の殊勳は、痛し痒しの態だつたが、何としても無視するわけには行かないし、朝廷の處置には觸れ度くないし、しかも賞罰の權が彼の掌中に在ることは明示して置かねばならない、といふので義經を推舉したのだ。

しかし、伊豫には別に地頭を置いて、國守義經を知行地から遊離させた。そして同時に、「關東の家人で頼朝の推舉を経ずに朝廷から官位を受けた者は、朝廷に勤仕して墨俣（尾張・美濃の國）以東に歸るべからず、もし東歸する者あらば本領を沒收して斬罪に處す」と令した。

かうした空氣の中に、義經は酒匂の驛まで歸つて來たのである。

しかし、鎌倉入りを許されない彼は、悄然として腰越の萬福寺に入り、愁訴狀を認めて頼朝に提出した。これがいわゆる腰越狀である。吾妻鏡もその全文を掲げてゐるし、今の萬福寺にはその下書といふものを所藏してゐるが、義經としては肝膽を吐露し紅涙を搾る思ひで認めただけに、惻々として人を搏つものがある。だが、今の頼朝には先づ冒頭の「勅宣の御使と爲り

朝敵を傾け」の句からして氣に喰はなかつた。そして、

「俺の推擧を経ないで任官して譴責を受けてゐながら、又もや命を俟たずに直接勅許を得て平家追討使となつたのではないか。それに一旦朝敵の汚名を被ては立つ瀬がないから、「大やけ」のことは頻りに焦慮してゐるのに、彼は急襲して天皇と寶劍とを西海の底に失ひ奉つた。然るに恐悚の意は何處にも現はさないで、唯わが身の莫大な勳功が讒言によつて無視され、大功がありながら却つて咎を蒙つてゐる、と言つて怨言ばかりを放つてゐる」とばかりしか取れなかつたのである。

義經が蔽ひ難い憂憤を懷いて空しく京都に還へると、頼朝は彼の所領二十四箇所を悉く沒收してしまつた。

京都に引き還した義經の身邊には、鎌倉方の間諜が付き纏つた。事ここゝに到つては、義經も肚を据ゑて、頼朝追討の官符を申請したが、その都度慰撫されてゐた。ところが文治元年十月十七日の晩、土佐坊昌俊（しやうしゆん）が刺客となつて堀川の館に夜討を仕懸けた。義經はこれを逆襲敗走させた後、もはや堪へかねて三度院（さんたび）に參向して願つたので、遂に頼朝追討の宣旨が下つたのである。

そこで義經は、疾風迅雷得意の先手打で鎌倉に進軍するか、少くとも墨俣川（すまゑがは）あたりまで進出するかと思はれたが、何故か逡巡してゐた。

院の近臣中には漸く頼朝の威勢を嫉んで、義經と對立させて牽制しようといふ肚から、義經支持派もかなりあつた。ところが義經が主上・法皇以下を奉じて西下するといふ風聞が起ると、俄然人氣が落ちてしまつて、宣旨は手にあるが頼朝追討を實行するわけに行かなくなつたらしい。

そこで彼は、朝家一般に對しては異志なきを誓ひ、義經を九州の地頭に、それから此の前後から義經に接近してゐる叔父の行家を四國の地頭に補せられんことを奏請して、辨慶以下股肱の者だけを連れて鎮西に落ちようとしたが、途中攝津の大物浦（おほものうら）で暴風雨に遭つて難波した。

さうなると今度は反對に、義經・行家追討の院宣が頼朝に降つた。敗れたものが賊といふわけである。

行家は和泉で捕へられ、義經の臣堀彌太郎・佐藤忠信・妾靜なども追々捕へられたが、肝心の義經の行方は文治三年三月まで、三年間は杳然（やうぜん）として知れなかつた。

彼が近畿にゐるとすれば廷臣と策應する處がある。西海に落ちたとしても平家の與黨が尠く

ないから危険だ。鎌倉の焦心は並々ならぬものがあつた。

ところで、西國落ちに失敗した義経は、身邊には水も洩らさぬ探索の網が張り廻らされてるので、主従分散して妻(前内大臣平時忠の女)子と辨慶を伴ひ、山伏と童子の姿に身を窶し、伊勢・美濃等を経て、重なる縁故の藤原秀衡を頼つて奥羽に落ちたのである。この間の事情は實録の書に見えないから明確でないが義経記などは、北國街道をとつて安宅あたかの關を通過したと言つてゐて、勸進帳の挿話を生んで人口に膾炙されてゐる。安宅通過はともかくとして、鎌倉を避けて北越を通つたことは充分推測できる。

義経が奥州に落ついたと知つて、三年に亙つて氣を病んでゐた頼朝もほつとしたが、何しろ用兵にかけては天才の義経が、奥羽の富強秀衡をバックにしてゐるのだから、頼朝も迂濶うくわくに手出しもしかねて、以後まる二年の間は傍觀の形で過したのである。

そして其の間にも、北條時定が捕へた叡山飯室谷いひやまの千光坊七郎といふ僧の懷中から、義経が再び近畿に歸るといふ消息が現れるし、次いで義経のシンバサイザーとして早くから鎌倉の注意人物となつてゐた刑部卿頼經よりつねが、又もや權大納言陸羽按察使藤原朝方あそ父子と共謀して、北面の武士や叡山の僧侶を手なづけ義経と氣脈を通じて蜂起を企てた。勿論それは事前に發覺したが、在京の鎌倉御家人共は慄へ上つた。

しかし秀衡の子泰衡は「義経君を庇護して大將軍と仰ぎ國務をとれ、場合によつては鎌倉をも討滅せよ」といふ父の臨終の言葉に背いて、終に變心したのである。

文治五年閏四月三十日、泰衡は義経追捕命令によつて討手数百騎を衣川の館に差し向けて、不意に襲撃した。義経は辨慶等の勇戦の際に、二十二歳の妻と四歳の女兒を殺して自刃した。この時義経は三十一歳である。

黒漆の櫃に納れ美酒に浸した義経の首は、泰衡の使者新田ノ冠者高平の從僕二人に昇がれて、六月十三日に腰越に着いた。西海に神出鬼没して驕る平家を殲滅した驍勇義経の首を迎へて、觀衆は「皆雙涙を拭ひ兩袂を濕す」と、吾妻鏡が記してゐる。

ところが此の首は、義経が自殺した四月三十日から六月十三日まで、四十日以上もかゝつて鎌倉に届いてゐる。眞夏のことだから美酒に浸したくらは首は變化する。質首しやくびをごまかすために故意と手間どつたのだらう、といふところから種々の傳説が生じてゐる。しかし、頼朝が亡母のために營んだ塔供養は、六月九日執行と定つてゐる既に朝廷から大導師も下向し、今さら變更するわけに行かないので、執行後に首が着くやうにと、頼朝の方から命じたのだ。

なほ、義経の蝦夷入りや滿洲入りの傳説は、みな徳川時代以後になつて出來たもので、何の根據もない。アイヌ文化の研究家の金田一京助博士著「義経蝦夷傳説考」は、詳細な研究によ

つて事實を否定してゐるし、滿洲入説も金史列將傳だとか國學忘貝などいふ本から出てゐるのだが、それが偽書や出鱈目の本だといふことは、新井白石も、はつきりと論斷してゐる。何れにしても、薄命の驍將義經の死を悼むファン氣質の反映にすぎないのである。

ともかく、あれだけ探索の厳しい中を潜行して奥羽までも落ち延びて來た義經である。泰衡の襲撃くらは脱出できぬこともなかつたであらうが、最後の庇護者に背かれた彼は、もはや前途の當もないし、同じ死ぬなら源九郎時代からの想出多い奥羽で死なう、といふ氣持になつたのだと思ふ。

義經は幼時からの不遇にもかゝらず、純情で多感な武將だつた。奥羽以來の腹臣佐藤繼信の忠死を悲歎するあたり、人主の情が流露して人の心を搏つものがある。また大物浦の風波、吉野滿山の雪中、十津川の潜匿、或は少數の従士に護られ勞はられながら尾花の末にも心をおく奥州落人行は、鴨越巖頭の勇姿や、西海波濤の間に三軍を叱咤する彼を偲ぶべくもなく哀しいが、後日彼の愛人靜が、草木も靡く鎌倉將軍の勢威をも恐れずに義經追慕の情を歌つて、男勝りの政子にさへ若き日頼朝との戀の愁情を偲べたといふに至つては、史乎將詩乎、有情の驍將義經を反映して餘りある逸話ではないか。百世の後なほ人をして判官の幸福を歎せしめる

所以である。

系圖や血統、家督などが無條件で尊重される時代だつたから、義經は兄頼朝のやうに多勢の家人を持たなかつたし、二十四五歳の年少氣鋭だつたから、有り餘る才に任せて實力に物を言はせるより外はなかつた。又それでこそ彼の面目は發揮できたのだが、彼の氣づかぬうちに、(妾腹のくせに、譜代の者をも自分の家人のやうな扱ひをして)、といふやうな非難を放つ者は、強ち景時一人ではなかつたのである。だから政治的な才腕も兄頼朝に較べて先天的にハンディキャップがあつたのだ。

彼自身が今少し年齢も取つて世路の經驗を積むとか、周邊に老練の士がゐて彼を補佐したなら、明哲保身の道もあつたと思ふが、併し、範頼のやうに小心翼々として兄の氣持ばかり窺つてゐては、源平合戦が終るまでに、やつと備前兒島の城と九州の平家党原田種直を破るくらゐが關の山で、軍奉行の和田義盛さへ焦れて東歸してゐるほどだ。それでゐてさへ後になつて誅戮を受けてゐる。

骨肉を殺すといふことは、保元の亂以來ほとんど武家の習となつてゐたが、頼朝の周圍は宛然血族殺戮圖繪を繰り擴げた感がある。頼朝が、殺した近親功臣は、百四十餘人に及んだと云はれてゐる。

しかし、北海道を除いて内地全體が彼の力で統一國家となつたのだから、まさに史上空前の事である。しかも、あの混亂した社會を一定の社會組織の上に統治して行くには、嚴肅にして公正な法治主義が絶対に必要だつたのである。本領安堵によつて武家一般を率ゐて行くためには、何うしても信賞必罰を以て臨まねばならぬかも知れない。

しかし、それも程度問題である。自己の血族近親を悉く殺戮して、その子孫を孤立させることに依つて、政權が北條氏に移行することを、全然察知しなかつたとすれば、頼朝と云ふ人格に多大の疑問が懸けられるのだ。

頼朝の制法の精神は、「右大將以來のお仕置」といつて、徳川時代まで續いてゐるが、あれほど人を殺さなかつた家康でも頼朝の態度を肯定し、判官最良を老嫗兒女の茶話として卻けてゐる。しかし、制法の精神と、源家の繁榮と、頼朝にとつて、孰れが大切であつたやらうか。制法の精神のために、源家萬代の工作を無視してゐるやうな頼朝の行り方には、大なる疑問がある。

義經・範頼ばかりでなく、頼朝の子孫たる頼家・實朝・一幡・千壽丸などが、次ぎ／＼に殺されて行つたところを見ると、頼朝の周圍には、頼朝以上の黒幕的大人物がゐたのではあるまいか。

それはともかく、平氏は舊都の廢頽文化に感染し中毒して滅んだが、頼朝は自分の根據地たる鎌倉を首府として、自分自身の階級文化を創造した。

とにかく頼朝の始めた武家政治は七百年も續いてゐる。その間、蒙古の撃退は、その大なる功績の一だ。また、日本が軍國として發達を遂げるための基礎的傳統は、その中に涵養かんやうされたと云つてもよい。此の意味から言つて頼朝は、日本歴史上に例の尠ない足跡を残した人物だ。

元寇撃退

源頼朝は天下の政權を握つて武家政治を始めたが、政令一途に出るといふ大義名分から言へば、それは決して理想的でない。

併し彼は、自己の階級のものでない頽廢した貴族文化の地、京都を離れて遠く鎌倉で、新興武士階級の荒々しい創造の空氣に満ちた政治を行つたからこそ、成功したのである。

北條氏は、その精神を受けつぎ、更に之を強化して、蒙古襲來といふ未曾有の國難にも堪へ得た。公卿出身の北畠親房さへも、このことは認めて、

「後白河の御時、兵革起りて姦臣世を亂り、天下の民殆ど塗炭に落にき。頼朝一臂を振ひてその亂を平げたり。王室は古きにかへるまでなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ」

と、言つてゐるし、さらに、

159 「凡そ保元、平治より以來の亂りがはしきに、頼朝と云ふ人もなく、泰時と云ふものもなから

ましかば、日本國の人民いかなりなまし」と言つてゐる。

そして蒙古が來寇したのは、北條泰時・時頼の善政の後を承けて執權となつた時宗の世である。

時宗の幼名は正壽、相模太郎と號した。善政を布いて鉢ノ木の傳説まで生んだ最明寺入道時頼の子として生れ、一代の賢母松下禪尼に訓育された彼は、武家の統領としての資質を、早くから備へてゐたのである。

父の時頼は、天晴れ仁政を謳はれたが病弱で、三十歳で出家して最明寺に入り、三十七歳で死んだ。その間たいていは鎌倉にゐたから、傳説のやうに諸國を行脚する暇などはなかつた。だから時宗は、早くから未來の執權としての訓練を受けたのである。吾妻鑑にも、彼が十歳にもなると立派な公人として、動員されてゐる模様を記載してゐるが、極樂寺の放生會に行はれた射藝大會には、弓術自慢の鎌倉武士さへ尻ごみする小笠懸に出場して、將軍宗尊親王の御前で面目を施したといふのは、彼が十一歳の時である。彼なら執權職も立派に繼ぐ」といつた入道時頼の得意顔賭るべしである。そして、それは父入道のみならず、衆目の指す所だつたに違ひ

ない。

時宗が十三歳の時に入道は死んで、その翌年に時宗は連署となつた。

北條時宗が執權になつたのは文永五年で、彼は十八歳の時であつた。實に、忽必烈から第一回目の國書が、高麗王の手を経てもたらされた年である。

元來、日本と支那との國交は、第五十九代宇多天皇の御代に、菅原道眞の建議で遣唐使が廢されてから、公式には絶えてゐた。ところが第八十三代土御門天皇の御代に、蒙古に鐵木真といふ英雄が現れた。これが成吉思汗で、その子の太宗の世には支那全土はもちろん、今の滿洲國から朝鮮半島を征服し、西はロシアからポーランド・ドイツ・オーストリア・イタリアなどの諸國まで馬蹄に蹂みにじり、太宗の子の定宗が蒙古皇帝となつた時の即位式には、フランス・ロシア・イタリアなどからも使節が來朝したが、その中には、神權を擁して常に歐洲諸國の帝王の上に君臨してゐたローマ法王の特使まで、混じつてゐたといふ。

この定宗の孫が世祖すなはち忽必烈だ。都を燕京(北京)に奠め、國號を元といひ、その領土は東は朝鮮から西はハンガリーまで及んでゐて、もはや蒙古の皇帝は、そのまゝ世界の皇帝として通用し、彼の征服慾の動くところ世界地圖を變色した空前絶後の大帝國が出現したのであ

る。

この大勢力が、一島國日本を一呑みにしようとして、海嘯のやうに押し寄せたのだ。我國の歴史が曾つて経験したことのない大きな危機だ。我國民が曾つて感じたことのない大きな脅威だ。

ところが、この蒙古軍を二度までも殲滅して、世界的大侵略者忽必烈をして、終に日本侵略を斷念させたのは、北條氏若き執權相模太郎時宗である。

文永五年から十年まで、前後七回に亘る蒙古帝國の國書は、「朝貢しないと攻め滅すぞ」といふ威嚇に終始した。

秀吉の朝鮮征伐は、彼の英雄的趣味と一致したものではあつたが、斷じて單なる豪傑的虚榮や物好きから出たものでない。

元の日本來襲だつて、單に忽必烈の出來心や道樂が因となつてゐるのではないのだ。當時支那本國たる宋の金の年産額は、日本から非公式な貿易によつて、輸入される金の年額よりも、まだ少なかつたのである。マルコポーロが、日本の家は金の蔓で葺き、金の柱、金の床が張つてある、と書いたといふのも、當時としては強ち理由のないことではないのだ。尤も、奥州平泉の光堂の話でも傳へ聞いてゐたのかも知れない。

元の使の張良弼も、日本に就いてのレポートに、「山水多く、耕桑の利無し」と言つてゐるから、曠漠たる沃野を馳驅して歐洲までも征服した忽必烈が、こせこせした地形の日本を攻め取つて見たところで、別に痛快でもなければ、英雄的な感慨に陶醉できるわけでもない。それにも拘らず執念深く日本を狙つた所以は、やはり金鑛の魅力ではなかつたか。

來襲した元軍は、船に農具一切を積んで来たといふが、兵糧の用意がないから開墾しながらゆる／＼と日本を侵略しようといふわけではなかつた。秀吉の朝鮮征伐は、敵地の食糧を當にして、農具は勿論のこと兵糧もあまり持つてゐない。元軍の場合には、蒙古帝國の威力を以てして、日本征服にそれほど手間どるとは思つてゐなかつたし、單に征服して朝貢さすだけなら農具の必要はなく、當座の食糧だけ積んで来ればいゝ、無くなれば掠奪は、お手のものである。やはり農具を持つて来たところを見ると、侵略後の經營を考へてゐたのだ。でなければ、一望萬里の沃野を持つた蒙古人が、「山水多く耕桑の利無し」の日本の國土に、人口問題や食糧問題からの拓殖移民でもあるまい。つまり、元の船には、金鑛開發の目的で、永住的屯田兵が乗つてゐたのだ。

それはともかく、日本に取つては迷惑な話である。日本の軍國的發達の基礎的傳統を築き上げたほどの當時の鎌倉武士が、……その統領たる相模太郎が、焦土になればとて、こんな屈辱

を甘受する筈はない。少壯氣鋭の時宗は、京方のなまぬるい廷議を一蹴して、斷乎主戰論的決意を固めた。日本全國は熱鐵の塊となつて蒙古襲來に對して起ち上つたのだ。

高麗の南端合浦がっほを出發した蒙古と高麗の聯合軍三萬は、忻都イフと洪茶丘ヒョウサキウに率ゐられ、兵船九百餘艘に分乘して、海の面も見えないまでに密集して、對馬沖に押寄せた。時に、文永十一年十月五日である。

準備はしてあつたにせよ、何時襲來するとも知れない敵の大軍が、突如として上陸したのである。對馬の守護代宗ノ助國すけくには八十騎を從へて馳せ向つたが、見る／＼押し包まれて、その子と共に國防の第一戰に斃れた。

敵軍は諸所に火を放ちつゝ、壹岐の島にかゝつた。此所でも守護代平ノ景隆かげたかが悲愴な殉職を遂げてゐる。

異民族同志の戰は、源平合戰のやうに名を惜しみ、敵の武勇をも讃へるといつたわけのものではない。侵略者は例外なしに残忍だが、蒙古軍も殘虐の限りを盡した。九州地方には、ムグリ、コクリといふ言葉があつて、非常に殘酷なといふ意味に使つてゐる。ムグリは蒙古、コクリは高勾麗こくりすなはち高麗のことで、ムゴイことをする、などいふのは、蒙古から轉訛てんかしたのだといふ。

當時の戰況を知らうとするにも、正確な書物はない。僅かに、實戰に参加した肥後の竹崎季長が畫工に命じて戰況を描かせ、自分で説明を加へた「竹崎季長繪詞」と、石清水八幡の記録「八幡愚童記」など唯二つあるばかりだ。

文永十一年十月二十日、博多の沿岸に上陸した蒙古兵と、少貳・大友・菊池・竹崎をはじめ、肥前の松浦黨との間には、佐原・百道原・赤城などで激戰が繰り返へされた。が、源平以來一騎打の功名に慣れてゐた我軍の勇士が、重い甲冑姿で悠々名乗を揚げて斬り込むと、輕裝の敵はサツと開いて抱きこみ、大勢で押し込んで打ち果した。そのうへ、敵は火器も持つてゐたから、その音に馬は駭いて狂奔し、人も茫然と立ち竦むといふ有様だつた。

力盡きた我軍は、掠奪放火敵の爲すがまゝに任せて水城みづしろに退いた。この一日の戰爭に博多附近は荒野と化し、筥崎八幡宮も燒失した。

併し、敵も勝つたとは言つても、陸上に安全な陣地を占領したわけではなく、日の暮れ方には兵をまとめて船に引き揚げた。

ところがその夜である。一帯を襲つた暴風雨のために、大小の敵船は轉覆したり押し流されたりして、翌二十一日、今日こそはと意氣込んで嵐の後の海岸に出て見た日本の將士は、昨日まで海面を蔽つてゐた敵船の代りに、洋々涯あやなみしもない朝風の海を見て驚いた。たまたま志賀ノ

島に漂着した敵兵から、敵船難波の事実を聞いて、狂喜したのである。

忽必烈は、この失敗丈では断念せず、翌建治元年二月、杜世忠以下五人の使者をよこしたが、時宗はこれを鎌倉の龍ノ口で斬らせ、いよいよ國防を嚴にした。周防・長門・安藝・豊前の四ヶ國の要害を固めさせ、筑前の今津から宮崎に至る約四里の間には石壘を築かせた。それは低くは六尺、高くは一丈に及び、内部からは馬で馳せ上れるが、海の方からは攀ぢ登ることも出来ない構造だ。それが弘安三年まで五ヶ年を費して出来上つた。

今も残る今岡市の西方今津海岸二十五町に亘る石壘の址は、一步たりとも外敵に國土を踏ませないといふ、當時の壯烈な國民の意氣を物語つてゐる。

なほ、時宗は、敏腕家の北條實政を鎮西探題として据ゑ、ますます防備を固めたが、蒙古の來襲を待つてゐるばかりではなく、日本から逆襲しようといふので、建治元年十二月には、元づ高麗征伐の計畫を發表し、出征者の姓名・年齢・乗馬・武器等の届出を命じた。蒙古の奪掠を受けて悲憤した國民は、この計畫に進んで加はらうとしたのである。

残存する文書を見ると、肥後の井芹西向といふ人は、八十五歳で歩行も意に任せぬから、六十五歳の嫡子と、二十八歳の孫および一族の者を是非とも従軍させたいと書いてゐる。

また、眞阿といふ尼は、息子と娘の婿とを、夜を日について馳せ向はせるから、従軍させて

くれ、と言つてゐる。この計畫は實行されないで終つたが、當時の國民が、断じて蒙古などに畏怖してゐなかつたことが分るのだ。

忽必烈は、國號を元と改め、宋を亡して支那全土を統一した。そして征日本行省といふ役所まで設けて、飽くまでも日本征略の執意を捨てなかつたのである。

時宗が前の使者を龍ノ口で斬つてから四年後の弘安二年六月、又もや使者をよこした。併し時宗は、太宰府に命じて、そのまゝ博多で首を刎ねさせて、微動だにもしない決意のほどを示したのである。山陽の詩を藉るならば、「直前賊を斫つて顧るを許さず」だ。

時宗はそれと同時に、關東を始め、中部・四國の武士を博多に送つて戦備を整へたのである。

小國と侮つた日本に、二度までも使者を斬られては、忽必烈たるもの怒らぬ筈はない。蒙古軍は二手に分れ、一方は朝鮮を廻り、一方は江南から眞直ぐに日本に向つてきた。

弘安四年六月五日、防備のうすい壹岐を荒した四萬の東路軍は九百艘の船に分乗して博多灣に入つて來た。併し、堅固な石壘に遮ぎられて、文永の時のやうに直ぐさま上陸するわけには行かない。

待構へてゐた少貳入道覺惠父子、大友貞親、菊池武房等をはじめとして、九州四國の武士たちは石壘の上に列ねた楯の間から、鏃を揃へて雨霰と射かけたので、敵も手の下しやうなかつた。

そこへ我軍からは、輕舸を操つて見上げるやうな敵船に漕ぎ寄せ、或は火を放つて焼打にし、或は乗り移つて敵兵を斬り伏せた。中でも河野通有などは、十年のうちに蒙古が押し寄せてこなければ、我方から討伐に出かけるといふ起請文十枚を焼いて灰にして呑んだといふ快男兒だ。目の前に敵を見て、何とて黙つて居られやう。部下と共に二艘の小舟に乗つて出て、敵船に近寄り、橋を倒して渡しかけ、攀ぢ渡つて敵中に躍りこみ、見る／＼數敵を薙ぎ倒し、終に大將とおぼしい巨漢を生擒して悠々引き揚げた。

また、唐津の住人、草野次郎は舟三艘を指揮し、夜に乗じて敵船に斬りこみ、二十一の首をあげて敵船に火を放つて引揚げた。

かうして上陸を阻まれると、大陸國である敵は、晝と言はず夜といはず小舟に乗つて襲ひかかつてくる日本軍を相手に、不得手な海上戦をつゞけなければならぬ。そのうちに食糧は減つてくるし船は汚損する、そのうへ船中生活の不潔から傳染病さへ發生するといふ始末で、士氣は目に見えて沮喪してきた。そこで、暫く灣外に退いて江南軍の到着を待つより外はなかつたのである。

一方、日本國內では、いよ／＼敵船來るの報と共に、朝廷におかせられても、龜山上皇は京都の西南三里の石清水八幡宮に、徹夜で戦勝を祈願されたほどである。まして幕府の意氣込みは凄じく、時宗は鎌倉にゐる全國民の心をひきしめながら、遠く九州で國防の第一線に働く武士達を指揮してゐた。そして、

「萬一、元軍が強くと、西國を占領されるやうな事あらば、東國の軍兵を上らせて、主上、東宮、本院(後深草)、新院(龜山)を關東へ迎へ奉らう。筑紫の戦況によつては、兩六波羅の兵も鎮西に下り、生命のあらん限り戦へ、天下の大事とは今だ」と激勵した。そして武士達は勇躍感奮して、勝敵撃滅を誓つたのだ。いづれにしても、危急に臨んであれだけの大軍を短時日に集結させ得たことは、時宗の偉さと、北條氏の實力によるのだと思ふ。

山陽は、「相模太郎膽麿の如し」といつてゐるが、肥後満願寺所藏の時宗の畫像を見ると、彼はむしろ柔和洒落な相貌で、數萬の元軍を二度までも撃退したといふ偉人にふさわしい英雄型の顔ではない。併し、それは、やはり禪學の骨髓を得た人の柔和さで、彼の五體の中には鍛へに鍛へた鐵石の心腸が藏されてゐたのだ。

時宗が師事した宋僧祖元禪師は鎌倉圓覺寺の開祖だが、かつて支那の温州で兵難に遭つたと

きに、賊兵の鋒下に兀坐して、

乾坤無地卓孤節、喜得人空法亦空。

珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風。

と、喝を唱へて、賊兵を悔謝退去せしめた名僧だ。

時宗は博多に押し寄せた幾萬の敵兵も意とせぬ様子で、祖元をはじめ高僧を招いて禪話に時を過し心を叩いた。かうして麴の如き膽を練りつゝ、沈勇と果斷によつて博多の防禦陣を指導し、全軍を鼓舞激勵したのだ。

七月下旬になつて、范文虎が率ゐる元の江南軍十萬は、三千五百の船に分乗して、最初は肥前の平戸に着き、轉じて鷹島に據つた。そして、一旦退いて東路軍と合し、大舉して防壘を陥れ、一氣に上陸しようとして決した矢先、七月二十九日の夜半から俄に颶風が吹き起つたのである。

嵐は翌閏七月朔日の明方になつても止まなかつた。地上では大木は幹から折れ或は根こそぎ倒れ、海上には山なす大波が荒れ狂つてゐた。敵船は崖に當つて碎け、或は波に捲かれて覆つた。風波に對して何の用意もなかつた江南軍は全滅して、海面には船の破片や器具が算木を亂したやうに浮いてゐるだけだつた。東路軍は鐵鎖で船を繋ぎ合せてゐたので、全滅だけは辛う

じて免れたが、范文虎や愾都・洪茶丘等の虜將は、數千人の殘兵を鷹島に置き去りにして逃げ歸つた。この殘兵は、忽ち我軍に襲はれて、或は斬られ或は生擒せられたが、中で三人だけ赦して、元軍全滅の實狀を忽ち烈に報告させた。

捷報は京都に達した。朝野の湧き立つやうな喜びは容易に想像できるのである。

この時の颶風は、日本開關以來三回目といはれるほど猛烈なもので、文永の時といひ、この時といひ二度とも暴風が日本を利したので、神風が元軍を追ひ拂つたのだ、とさへ言はれるのだ。

併し、時宗が二度までも元の使者を斬つたのは、決して向ふ見ずや強がりややつたのではない。日本に來たらすぐに上陸しようと思つてゐた敵兵は、防壘の堅固さと、意外の大兵の集結に驚いた。そして彼等を一步も上陸させないで、二月間も海上に漂はせたといふのは、勇敢な將士を激勵指揮した時宗の偉さである。

それに、傳染病の流行や食糧の缺乏、日本軍の夜襲などで士氣を失つた元軍が、たとへ自暴自棄で上陸したとしても、陸上の英氣を養ひ、東國の新手の援軍と交替してゐる日本軍には、到底勝てなかつたのだ。だから颶風はたゞ、我が舉國一致の鐵鎚をくらつて困憊しかゝつてゐた敵軍の退去を、一氣に決したといふ方が當つてゐると思ふ。

この翌年、龜山上皇は、

四方の海波おさまりてのどかなる

我が日の本に春は來にけり

と、詠まれた。打ちつゞく國難に、國を念ひ民を思うて寧日もなく過された上皇が、再び平和な春を迎へて喜び給ふ大御心が拜察されて、今もなほ涙ぐまずには居られないではないか。

又、六十三日間、一堂に籠つて蒙古調伏を祈つた宏覺禪師は、

末の世の末までわが國は

よろづの國にすぐれたる國

と、詠んでゐる。全世界をも征服するかに見えた元も、わが國には終に一步も踏入ることが出来なかつたではないか、といふ國民的誇にあふれてゐる。事實、元を滅して明國を建てた太祖も「永久に日本を討つな」と子孫を戒めたといふ。元の大敗が、それほど深く支那人の頭に残つたのだ。

執權北條時宗は、文永五年に職についてから弘安の役に元軍を撃滅して國難を攘ひのけた三十一歳の時まで、十四年間は殆んど心を休める暇もなかつた。しかも悠々禪の境地を味了し得たのは實に偉いと思ふ。彼こそは元軍を撃退するために生れて來たやうな人物である。

彼は弘安の役の三年後、僅かに三十四歳で死んだ。やはり心身の勞苦が死を早めたのだと思ふ。彼の父時頼と共に、名執權が二代相次いで早世してゐることは、北條氏のためにも日本のためにも惜しい。戦後の經營を始め、彼に俟つべき事業は多かつたのである。

明治天皇は、時宗の大功を追賞されて従一位を贈られた。時恰も日露の交戦中で、皇軍は滿洲の曠野で大奮戦してゐる三十七年の五月であつた。天皇は、はるかに六百餘年前の國難を想起し給ひ、國民全體が、あの時のあの心で外敵に當るやうにとの大御心から出たものと拜察されるのである。

吉野朝時代

楠木正成

文永、弘安の兩役は未曾有の國難であつた。けに、爲政者たる北條氏は、疲弊した國力恢復のために全力を傾倒すべきであつた。だが當の責任者たる貞時も、その子高時も、共にその重任を全うできるやうな人物ではなかつたのである。

曾つては障子を切張りして子弟に儉約を奨めた賢婦人を出した北條氏、紙燭を照して厨房に殘醬を求め、政談に夜を更かした執權家も、つひに末運の例に洩れず、田樂と鬮犬に耽る懶怠の子貞時や宴遊飲佚に日を送る痴呆の孫高時を出したのである。

元享二年六月、奥州津輕の安藤季長が起した亂は、同族との領土争ひに對する幕府の處置に憤慨したからである。北條氏に對する大名の反抗は、承久の亂以來これが始めてだが、執權政

治の生命である裁判の事を顧みなかつた高時は、決所裁斷の能力を喪失してゐたのだ。武家の本領を安堵せしめ得ないものが、何うして武家の統治者たり得やう。しかも北條氏の討伐軍が安藤のために敗れるに至つて、鎌倉の權威は一時に失墜した。これをきつかけに、諸大名の不平は轟然爆發し、攝津の渡邊をはじめ、近畿の諸大名は、安藤に倣つて幕府に反抗したのである。

英邁の天子後醍醐天皇が、非北條系の太覺寺統から入つて御位に即かせられたのは、暗愚の高時が執權の虚名を帯びてから二年後の文保二年であつた。御年三十一歳の英主を擁する京都の公卿の間には、資治通鑑の愛讀者北畠親房や、宋學の鼓吹者藤原俊基等があり、公卿の弊習を破り自己の地位に目覺めようとする勃然たる革命の氣運が漲つてゐた。

後醍醐天皇の謀臣、日野資朝は、一條の邊で、北條氏の武士に圍まれながら六波羅へ拉致される爲兼大納言を見て、

「あな浦山し、世にあらん思ひ出。かくこそあらまほしけれ」と言つたと、吉田兼好が徒然草で語つてゐる。

また、内大臣の西園寺實衡が、眉雪の老僧靜然上人の腰を屈めて内裏へ參向するを見て「あな、たうとの景色や」と信仰の氣持をこめて言ふと、日野資朝は、「年のよりたるに候」と言

つてのけた。そして幾日か経て、よぼ／＼になつて毛の脱け落ちたむく犬を、「此氣色たうとくみえて候」と言つて内大臣に献じたと言ひてゐる。當時の若い公卿氣質を窺ふに足る逸話である。彼等は、舊慣故格を超脱した、潑刺たる窮理の思想の所有者であり、忠義の根本義を中心とした新興イデオロギーの鼓吹者だつたのだ。

若き英明の君主を中心とする少壯氣鋭の京都の公卿たちが、關東の正體もない政治と、皇位の繼承に關しても數々不遜きわまる振舞を見たとき、「幕府討つべし」といふ精神に結成して行つたのは、蓋し當然のことである。

正中の變と、それにつゞく元弘の政變は、かくして起つたのである。

元弘元年八月、北條高時は、公卿を中心とする京都の反幕勢力を鎮壓するために、大兵を京都に送つた。後醍醐天皇は神器を奉じて、夜の間に笠置山に行幸された。

楠木正成が金剛山下に菊水の旗を翻へして、義軍を擧げたのは此の時である。

日本の武家時代といふのは永かつただけに、その間に發達した主従間の忠義觀念も、軍國日本の基礎的傳統が出来上る上に大きな意義と影響とを與へてゐるのは事實だが、また一方から考へると、「主あるを知つて、主の上に主あるを知らず」といふやうな矛盾をも屢々露呈してゐる。

だが、楠木正成の忠義は、天皇と國家を對象とした大義に合致する忠義である。この點からみても、彼は理想的な日本武將と言へるのだ。彼こそ、大義武士道の精華だ。

いま傳はる太平記は楠正成と書いてゐるが、原本は楠木、と二字に書いてゐるし、當時信頼すべき文書には皆、楠木正成と出てゐるから、太平記は傳寫のときに一字に縮めてしまつたのだらう。

歴史に顯れた楠木正成の活動は、元弘元年九月赤坂城の擧兵から、延元元年五月攝津の湊川で戦死するまでの五年間で、擧兵前の動靜はよく分らないのである。古くから河内の國東條川の流域を根據とする豪族だつたことだけは、河内金剛寺文書や高野春秋などによつて明らかである。

増鏡にも、擧兵當時の正成を、「心猛くすくよかなるもの」と評してゐるから、その精強醇厚一代の高風は、正中の變後の進歩的な公卿たちの胸裡に、「楠木兵衛憑むべし」といふ氣持を起させ、太平記の曰ふ「後醍醐帝南柯の御夢」は、この間の事情を極めて傳奇的に物語つたものであらう。

かくして、一介の河内の豪族は、笠置の行在所に伺向して勅定を賜つた瞬間から、日本の楠木正成になつてゐたのだ。

「臣一人未だ生きて在りと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され候へ」と、感極まつて奏上する彼の胸裡には、金剛山下に撫育し來つた六百の一族を率ゐて、赤坂を本據とする楠木城に菊水の旗をひるがへし、草木も靡く鎌倉幕府勢威下幾萬の騎馬の大集團をも醜弄しようといふ、山嶽要塞戰の智略と膽勇とが、油然として湧いてゐたと思ふ。

果して彼は、笠置が陥落してからは、大塔宮護良親王をお迎へ申して、笠置攻陥の勢に乗ずる雲霞のごとき鎌倉勢を引き受けて、「此の城、我等が片手に載せて投ぐとも、投げつくべし」と寄せ手が嘲笑したといふ、方二町にも足りない孤城、楠木城を嬰守したのだ。釣屏や熱湯の奇計を用ひて、新銳の關東軍を散々に惱ましたと太平記が傳へてゐるのは此の時である。

しかも城が陥つて一年後には、焼死したと信じられてゐた正成は、大塔宮が吉野に兵を擧げられると同時に忽然として現れ、瞬く間に楠木城を奪還し、攝津の天王寺にまで兵を出して京都六波羅の目睫の間に迫るといふ勢を示した。駭いた六波羅は、鎌倉から援兵を得て、元弘三年正月から四月中までかゝつて攻めたが、今度正成が據つてゐる千早の本城は、地勢を利用して多くの山砦外城を連ねてゐるので、ビクともしなかつた。

この攻圍軍に加つてゐた新田義貞は、鎌倉方に見切りをつけて、兵をまとめて關東に歸つてしまつたほどだ。正成のこの籠城戰は、今日の軍事専門家が見ても一つの驚異だといふから、

當時正成の膽勇と智略とが、いかに敵と味方から驚嘆されてゐたか想像されるのである。

かうして正成が關東の全軍を引き寄せて、六波羅をガラ空にさせてゐるところを、北條氏に反旗を翻して官軍に應じた足利尊氏が、不意に攻めたので、六波羅は、たつた一日で全滅したので。之と相應じて、新田義貞も鎌倉を攻め落し、こゝに北條氏の運命は決したのである。

元弘三年五月二十二日、後醍醐天皇は船上山を出でまして、京都へと向はせられた。

六月の二日には、兵庫の福嚴寺を御發策、いよいよ龍顔美はしく、懐しい京都へ御還幸にならうとした。このとき楠木正成は畿内の兵七千を率ゐて、陛下の御輿の前に參候して、御慶びを申し上げると、

天皇は「今度北條を滅して京都に還幸することになつたのは、偏に汝の忠勤にある」といふ厚き勅諭を賜つた。天皇は正成の苦勞の多い地味な働きを、よく御承知であつたのである、

このとき正成、感涙に噎んで、「聖文神武、陛下の御聖徳によつて、臣は金剛山の重圍を脱して、此の處へ伺候し得たのであります」と言上した。

その至純なる忠誠、その功に誇らざる謙抑、百世の下、大楠公の敬慕尊崇される所以である。次いで六月五日、東寺の行在所を出て内裏に向はせられる車駕には、楠木・名和・赤松以下

の武將が五百騎三百騎の一群を引具して、鳳輦を挾んで供奉した。先陣はすでに二條富小路の内裏に着いてゐるのに、後陣の兵はなほ東寺に在つた。

過ぐる元弘二年三月七日の隠岐遷幸を拜して、

むかしだにしづむる恨みを隠岐の海に

波たちかへるいまぞ悲しき

と歌つた民衆の悲涙は、今や喜悅の涙と變つてゐた。供奉する勤王將士の面上も、まばゆいばかりの榮光に輝いて見えたのである。

論功行賞の結果、正成は従五位上に敘せられてゐる。足利尊氏が従三位上に敘せられ、御諱の一字まで賜り、弟の直義さへ従四位下に敘せられてゐるのに、元勳たる正成の従五位上は薄賞だと言はれてゐる。

併し、門地家格が重んぜられた當時のことである。尊氏は源氏の正嫡で、代々北條氏と縁組もして族望盛強である。これに對して楠木氏は渺たる河内の一豪族に過ぎない。彼の従五位上を敢へて薄賞とするのは、正成の生涯を強いて悲愴化しようとするものだと思ふ。

正成は記録所の寄人、雑訴決斷所衆、武者所衆を兼任して、文武の重要地位に就いてゐるし、名和長年なども、大いにもてゝ、その烏帽子の折り方や直垂の衣紋を、當時伯耆様と稱し

て、おしやれな公卿の間で流行したほどだ。

當時、京都では三木一草といふ言葉があつたが、楠木正成、結城親光、伯耆守名和長年の三つのきと、千種忠顯のくさを取つて言つたもので、破格の榮達を羨んで出來た言葉だ。

併し、行賞の不公平から、たとへ薄賞だつたとしても、あの謙抑な正成のことだから問題にしなかつたと思ふ。そして又、今の地位が人に羨まれるほどの榮達だつたとしても、他の者のやうに、いゝ氣になつては居られない彼だつたと思ふ。

すでに公武對立の表面化や、百事顛倒の中央政局の實状を見るにつけても、彼の心は暗くなつたに違ひない。これは、赤坂の膽勇や千早の智略では、何うすることも出來ないものなのである。

笠置の行在所以來の彼の熱情は、こんな醜い現實のために燃え熾つたものではなかつた。もつと大きく、もつと美しい理想、君と國とのためのものであつた。彼は、何か大きな力を身内に感じながら金剛山下で兵を養ひ武を練つてゐた楠木兵衛の頃が、懐しくなつたに違ひない。

しかし、この歎かばしい世情に堪へかねて藤原藤原房卿が出家遁世したのを見た彼は、「公家ならばさもあるべし、武人にはあらず」といつて、主上御一人の御信任に應へまつる道を、ひたすら念じ索めてゐたのだ。

つひに時は来た、それは足利尊氏の謀叛である。

正成は、いつでも寡兵を提げて、よく敵の大軍を破つて来た。彼の本領は常にその間に發揮されたのである。しかし、天皇に再び叡山行幸を請ひ奉り、敵の大軍を京都に引き入れておいて、淀川口を塞いで糧道を断たうといふ彼の策は、長袖坊門清忠ちやうしゆうぼうもんきよただのために卻けられ、すでに廟議は決した。彼は義貞の本隊と合流して、鎮西から東上する尊氏兄弟の軍を迎撃するため、兵庫に向つて出發した。延元元年五月二十四日である。

乾坤一擲けんこんいつてき、智略を傾けての一策が容れられなければ、すでに生還は期し難い。だが、彼の澄み切つた心は、もはや武人としての死所を見出してゐた。永遠に生きる道を見出してゐた。

兵庫に下る途次、正成が馬を停めた櫻井ノ驛は、翠緑に埋もれてゐた。雲煙の間に連る山も起伏する丘も、さては指呼の間を流れる川も、悉くが京都の咽喉を扼する彼の策戦区域である。彼は、この印象深い土地で正行と別れようと思つた。

彼は君國に對する武人の道を、今改めて一子正行に諄々と説いた。そして、

「一族の中、一人たりとも生き残る者ある間は、金剛山下に引籠つて朝敵と戦へ、これが父への第一の孝行ぞ」と言ひ添へた。

今日の曆法によると、七月十二日の炎暑の中である。湊川に達した正成は、前後の敵に包まれて、身には十一創を蒙るまで血戦を繰り返へしたが、残る唯一の退路丹波路も亦敵兵に遮られるに及んで、もはや死を決したのである。

彼は自分の武運の拙さを歎きはしなかつた。今の最期を悲愴とは思はなかつた。彼は、

「これ以上生き長らへても成し遂げ得ない程の大きな仕事を、今こゝで死ぬことによつて成し遂げるのだ」といふやうな嚴肅な氣持でゐたと思ふ。

延元元年五月二十五日である。我々の歴史が持ち得た至高なる武將楠木正成は、千古の後までも、日本國民の心の中に生き残るやうな立派な死を遂げた。

太平記はもちろんだが、京都方から出た梅松論さへ、

「誠に賢才武略の勇士とは、かやうのものを申すべきとて、敵も味方も惜しまぬ人ぞなかりけり」と賞揚してゐる。尊氏が、禮を厚くして正成の首を河内の遺族に送り届けたといふのも、かうした當時の輿論に動かされたと思ふ。

菊池武時の義舉

楠木正成は千早に籠城して雲霞の如き關東勢を防守し、赤松則村は播磨に、櫻山慈俊は備後